911.34
KA92
ㄋ
911.34-Ka92ㄋ
1200500756172

911.34
KA92

河東碧梧桐著

蕪村名句評釋

非凡閣版

6738

序に代へて

蕪村句集の評釋は、既に三十餘年前、子規、鳴雪の先輩と當時の雜誌「ホトヽギス」仲間で輪講した「蕪村句集講義」がある。前後約四年の歳月を費したものであるが、所謂新らしい俳句觀によつて、其の一句々々を品隲した管見は、それまでの俳壇にあつて、眞に空前ともいふべき藝術的批判の嚴肅さを示してゐた。が、一旦世間から忘れられてゐた蕪村の大手腕を發見した喜びに浸つて、聊か蕪村を過信し、且つ其の技倆に眩惑された嫌ひが無いにも限らなかつた。

のみならず、其の後蕪村の傳記、性行等の研究が進められて、其の面貌の明らかなると共に、其の句作の動機及び心理の內面觀にまで、多少の考察を及ぼすべき史料が提供せられた。

且つ又た我々の俳句觀にも、幾分の變化と動搖があつた。

三十年前の蕪村觀に、或る訂正を加ふべき好時機であるとも考へられた場合、非凡閣主人から、新たに評釋書の作製を求められ、折柄閑散な私として、甚しく食指の動くものゝあつたことを否めない。

併しながら、古人に對する禮讓の上から言つても、かゝる仕事は、愼重の上に愼重の態度を持つべきで、本來ならば、二年三年乃至五、十年、各種材料を旁引博證して、些の誤謬なきを期すべきである。

今回僅かに二ヶ月の日子の中に本稿を淨書して、熟々短時日の間に、匆忙として筆を執つた悔を省みねばならなかつた。

固より事實の誤認、私一個の獨斷等、疵瑕擧げて數ふべからずであらうが、蕪村を視、其の作に對する批判的角度に於て、多少の進展を見たと信ずる一端を錄するに、最も吝ならざらんことを期した。江湖の高敎を得て、更に其の深度を加へたいと熱望して已まないのである。

蕪村の句は、近來其の逸句の發見甚だ多きを加へて、在來の几董編「蕪村句集」に倍加するものがある。「蕪村句集」中に稀に混ずる愚句惡句を排除して、新たに理想的蕪村句集を編纂すべき時であるやにも思はれる。が、それすら此の小冊子中には收錄し難い。已むなく蕪村句集中の白眉「蕪村句集」を臺本として、其の代表句と思意せられるものを撰び、傍ら逸句を參照しながら、この評釋を進めることにした。代表句と思意せらるゝものも、其の全部を網羅し得なかつたことをこゝにお斷りして置く。

尙ほ、俳句の表現形式に就いて、定型律の可否運命觀は、別に私の管見を持つてゐる。が、古人の作を評釋するに當つては、一切それに觸れることを避けた。定型律を肯定しなければ、其の時代觀念を尊重しなければ、評釋に一字の筆を加ふることも不可能であるからである。

終りに、「古今俳人多しと雖も、俳句集如何に夥しと雖も、再讀三讀、感興の常に新たなるもの、蕪村句集の上に出づるもの幾許ありやと問ひたい。評釋者として過分の光榮を感ずる者であることを、改めて故人蕪村に感謝したいのである。」

昭和九年十一月五日

碧梧桐識

目次

蕪村略傳……（一）
蕪村名句評釋……（三）
索引……（三六）

蕪村略傳

享保元年に生れて天明三年に歿した六十八年の生涯は、さまで數奇なものでなく、むしろ平爽であつたとも見られる。

多少の波瀾は其少年時代に屈折し、やゝ壯年を過ぎて、妻子を抱擁するに至つて、全く安住の地位を贏ち得た。ありふれた言葉で言へば、正に立志傳中の人である。

自ら「馬堤は毛馬塘也則余か故國也」と書いてゐる以外、其出生地及少年時代の消息を語つてゐるものはない。「東成」の別號もあるので、大阪東成郡毛馬村の產と推定するのであるが、果してどこまで信憑すべきであるか。金福寺の境內、門人寺村百池の建てた碑の「翁本姓谷口、鶴字島、一名長庚、後改寅、字春星、號落日庵、三菓堂、紫狐庵、碧雲洞、白雪堂、四明、東成、皆其別號也、攝津人、以其生之地屬天王寺村名千蕪菁、乃又號蕪村」と號と名と緯名が、可い加減に案配してあるやうな書き方は、正しい史實とは認められない。且蕪村の由來を俗說に

取るなど、平生親炙した人の記錄とも思はれない。が、これは門人百池を責むべきでなくて、其の系譜傳統、殆んど他の何人にも傳はるものゝなかつた證左と考ふべきである。本姓は谷口と言つても、自ら谷口と書した例は今日まで見當らない。其の谷口をなぜ與謝と稱するに至つたかの理由に至つても遽として捕捉すべきものがない。自ら故意に韜晦したのか、それともそれを闡明し難い何等かの事由があつたのか。ともかく其の弱冠時代、二十歳前後既に放浪して江戸に下つてゐた事實は、其の孤兒的出發は、何人にも或る家庭的な暗影を想像せしめるのである。其の少年時代を祕密のドアの中に密閉しようとする所以にも亦た想到せねばならないのである。

で、其の史實は元文二年——蕪村二十二歳——早野巴人が江戸へ歸つて、石町の鐘樓の下に結庵した時から、始めて白日下に出現するのである。蟬が地下に十餘年暗黑時代を過ごすやうに、二十二歳に至つて、漸く正しい姿を地上に投影したのである。

忽然として照明燈下に出現した二十二歳の若者は、自活の已むない窮境の適者生存化でもあつたであらう。當時の知識勞働者として、既に一家を成す程度に訓練されてゐた。優にステーヂに立つ一アクターの資格を備へてゐた。

俳諧は當時の江戸座を支配した藏前札差の仲間にも重んぜられ、貴は俳仙群會圖を描く程度に造詣があり、かてゝ加へて書まで、其角自署の五元集を、そのまゝそつくり筆寫し得る能筆を以て任じてゐた。いつどこで、それだけの素地を培養したのか、それがダークホースであるよりか、もう立派に其の地位を確保してゐた事實は、當然其の少年時代を無意義に、無自覺に通過しなかつた頭の聰明さと、環境に處して行く忍苦を、何よりも能辯に語るものである。

殊に惠まれた銳敏な感受性は、享保元文時代の穿き違へた蕉風俳諧に慊らない獨自の境地を狙つてゐた。芭蕉の本體と餘りにかけ離れた墮落を直感してゐた。「我むかし東武に在てひとり蕉翁の幽懷を探り句を吐事瀟洒專らみなし栗冬の日の高邁をしたふ……いまだ弱うして句法の老たるをもて世人我を見ること仇敵の如くす」と几董に向つて昔を追懷してゐる。几董の筆は少し誇張に過ぎるとしても、以て這間の消息を詐り語るものとは信ぜられない。天明中興の業は、早く既に元文延享に根ざしてゐたのである。彭百川を引合に出して「又俳諧に名あらむことを求めざるも同じ趣なりけり」と洒蛙々々としてゐるのも、たゞ一時の韜晦に過ぎなかつた。時勢の非に、強ひて對抗することを避けた、表向きの口占であつた。

明和初年以後、時勢可なり、と見た俳諧的活躍は、眞に洪水の堤防を決壞する概があつた。

宿昔の志望こゝに到來する、千載一遇の愉悅に浸つてゐたのだ。頻りに「我社中」を振り廻す其の心裡を洞見しなければ、其の運動の意義をさへ理解することは出來ないのである。

既に糊口の資に足りた畫才すら、俗流の需めに應ずる程度に落著いては居れなかつた。もつと自己の趣味性にピッタリ來る畫境を開きたかつた。それは俳諧に芭蕉の幽懷をさぐると同じ超時流の飛躍であつた。明らかに自己改造の切なる念願であつた。下館の中村氏に、文徵明の詩畫八勝と言つたものゝ模寫圖がある。傳へて「蕪村筆」と言つてゐる。其の口碑を無條件に享け容るゝのは危險であるかも知れないが、俳諧復興の素志と相俟つて、漢畫開拓の第一歩を當時に蹈み出した、と見る事も強ちに早計ではないのである。

しかく時流大衆に伍して、今日の繁榮に安住することを肯じなかつた。自己創造の天分と鋒鋩とは、其の社會的出現と同時に、それとなく洞見されたのである。人を見る明のある者ならタヾ者でない其の懷抱に同感したのである。

俳諧に巴人を師としたと言つても、巴人在武の前後僅に五年有餘の歲月に過ぎなかつた。巴人歿後再び何人にも師事することを欲しなかつた。畫にも書にも、亦た他の和漢の學にも、明らかに師表と目すべき人のなかつた所以、創造的天才の蹈むべき當然の道でなかつたであらう

か。むしろ、其の志望に行きつく師表は、我自らの外、他に求むべからざる當時の現情であつたのだ。

それだけ我自らを大成する自給自足は、忍苦そのものである。歲月は人を待たず、三十の聲をきいての東北大旅行も、生活資力の經濟問題に端を發するかも知れない。蓋し結城の砂岡雁宕、下館の中村鳳篁等の後援と同情にも、自ら限りのある、寄食放浪者の惱みを體驗せねばならなかつたからである。が、又た一方には、東北の歌枕を探る、自然を友としての自己鍛錬をも意味してゐなければならない。でなければ、缺乏した旅費で、出羽陸奥の果まで苦難な旅行を、年を重ねて繼續する所以はないのである。

三十六歲——寶曆元年——飄然として京都に現はれた。人生の半ば、殊に華やかな青春時を過して、多くの貪緣と手蔓を贏ち得た關東の地を、なぜ弊履を捨てるやうに、淡白に無雜作に拋棄したのであるか。其の行動も端倪すべからざるものである。

當時の社會習慣から言へば、妻帶もし、子供もあり、一世帶を背負ふ年齡である。

諸方の貪緣に賴つて、其の生活根據を定めるべき有利な條件の下に立つてゐる。

淡々の門人渭北を文臺の主に周旋する餘裕のある程、友輩に好感を持たれてゐた。

——蕪村略傳——

「反古衾」——寶暦二年——を板行した旨原、雁宕、阿誰等も、何等の反感をも示してゐない。

其の外異性關係、金錢關係等にも、何等傳ふるに足るものはない。

この行動は、理解すべからざる多くの事由がある。又た他の自由推定を許さない胸中の祕密に屬するものである。が、强て忖度すれば、却つて其の身邊にまつはる貧緣と手蔓を斷つ强固な裁斷によるのでないであらうか。其の貧緣と手蔓といふものも、主として社會的交際の傳統に過ぎなかつた。祕かに懷抱する藝術的念願とは全く沒交渉な、人生の羈絆であつた。社會的交際の濃度は時に藝術的信念の自由を阻害し束縛する。心的自由の境地を欲する者の、山林に逃れ、都塵を忌避するやうに、先づ其の身邊の汚濁を去る決然たる意志に基いてゐないであらうか。

「京都所々巡見さて〳〵おもしろく相暮候……俳かいも折々仕候、いまだ何かといそがしく取とゝめ候事も無之候、一兩年なじみ候はゞ、一入面白候半とたのしみ罷在候」とは江戸に達した第一信であつた。當時京都には、巴人の開拓した同人が榮えてゐた。望月富鈴、三宅嘯山など、面識はなかつたにしろ、同門を迎へる禮義を心得過ぎた仲間があつた。江戸新上りの顏は、それ相當に賣れたものらしい。

が、京都にとゞまる約三年寶暦四年には、思ひもつかぬ丹後に遊んでゐる。さうして同七年まで滯留してしまつた。この行動も、其の事由を尋ねることの出來ない意外な事件であつた。確たる文獻に徵するのではないが、其の生母は丹後與謝の人であつたといふ口碑がある。既に四十歳の初老に達した、人生の行路觀も手傳つて、久しく他鄉に放浪した孤兒的荒涼な心裡にも、尙ほ殘燼をとゞめてゐた肉親への恩愛が、焦土に芽ぐむ草のやうに擡頭したのでないかを疑はしめる。姓を與謝と言ひ始めたのも、この滯留に因んでゐる。又た其の妻もこの滯留中に獲たと思はるゝ節さへがある。殊に寶暦七年京都に歸つてから、再び漂蓬の旅に出ようともせず、遂に永住の地と定めるに至つた、そこに已むない家庭事情を生じたとも想像されるのである。

浮世離れした奧山住居にも、矢張鹿の鳴く音の邪魔になるのが世の中である。江戸でのきづなを斷つて來ても、京には又た京のきづなが附きまとつて來る。さうして初老を過ぎて未だ聞ゆるなき我が生涯にも、焦燥を感じない程の逃避者でもなかつた。晩婚者にあり勝ちな情味も加つてゐる。むなく、我が期圖、事業、職務の淸算への道を辿らねばならなくなつた。つまりいつか到來すべき、秩序ある生活に入る時期を見過ごすことの出來なかつた運命の支配であつた、と見ることは出來ないであらうか。

京都に定住して、先づ力強く頼りに思つたのは、黒柳召波の出現であつた。次に高井几董、吉別大魯、下つて江森月居など、新人の躍をついでの共鳴であつた。就中召波は資力を擁してのパトロンであり、其の新鋭な意氣はともすれば苦勞人の妥協性を鞭打つに十分であつた。始めて藝術的共感者を得た悦びは、正に千人の大衆を得るよりも力强かつた。孤立無援と多寡をくゝつてゐた、沙漠のやうな心の寂しさに、又なき春が復つて來た。一旦は已むなく拋棄しようとも、又た妥協性で終始しようとも考へた俳諧的宿志は、この伴侶によつて猛然として振起した。「春泥句集」の序文は、二人者の共感を最も善く裏書きするものである。

若し召波が早世——明和八年十二月歿——することなしに、今少し十年も股肱としての腕を揮つたとすれば、それは几董を相棒とする以上に效果的であつたことは爭はれない。恐らく詩的肝膽の相照らした者、前後召波に越ゆるはなかつた。

「門人召波句集一部進上仕候、此召波と申人は、平安にめづらしき高邁の風流家にて候、それ故格調尋常のものにて無之候、隨分と嵐雪其角素堂などを擬し候て、古人に恥ぬ作者にて候、うち見にはおもしろからぬ樣に候へどもとくと御風味被成候ハヾ漸々佳境に到る心地に候……序文は愚草稿にて、いまだ三潤を加へざるものにて候、いさゝか集冊朱に而書付置候」と大和出

合村綛屋清五郎なる人に書を寄せてゐる。召波に對する愛慕と戀々の情言外に溢れてゐるのを看取せねばならない。

俳諧に進出する素地は漸く緒に就いたが、一家を支へる糊口の料は、之を畫に求めなければならない。紙本六曲屏風十二双の無盡講など、空虛な訛傳でないと思はれる。明和七年二世夜半亭を繼いで、點取宗匠の列に入つたとしても、幸か不幸か、選料を拂ふやうな顧客は、左樣に容易く其の門を潛らなかつた。

「入門御しうぎとして方金一塊かたじけなく致受領候」と丹波笹山の菱田暮蓼宛に書き送つてゐるのは、むしろ始めてさういふ種類の金を入手した悦びを語つてゐる。「花鳥篇」は晩年の著作であるが、それすら「外に月並料花鳥篇入料たしかに落手いたし候、扨〳〵花鳥篇不寄にて愚老損毛御察可被下候」と百池宛に消息してゐる。

併しながら、其の句風が大衆向きでないことを誰が自覺しないであらう。選料を貪つて一廉の宗匠顔することは其の藝術的良心が許さなかつた。むしろ畫工として勞作に從事しながら、餘技の俳諧詩人であることに多くの滿足を感じてゐた。

社會的交際上、最も敬意を表してゐたと見える名古屋の曉臺ですら「所詮尾と愚老とは俳風

□□相違有之候ゆへ、添削もいたしかたく候」「御發句愚意書付候いづれもよろしからず候只一句取べき物有之候、しかれ共尾州代ロ物にては無御座候」など百池にかけかまひのない心中を吐露してゐる。極言すれば、曉臺すら眼中になかつたと言つていゝのである。況んや其の他の嘯山、二柳、樗良、青蘿、士朗、嵐山、雅因など、當時の諸豪と目さるゝものをや。唯我獨尊と言はゞ言へ、牢乎とした詩的自己把持は、詩人としての己を潔うする特權的心境であつた。

が、糊口の料とすると言つても、畫も亦た其の心境の反映でなければならなかつた。俳境の開展するにつれて畫境も亦た進展した。同時に其の書風も獨自の老熟味を加へた。それらは三つに區分すべきものでなくて、一つに自己を語るものであつた。安永年代に入つて、古今を睥睨する書畫の妙味に達したのも、徒に世に媚び人に諂ふ陋態を學ばず、毅然として其の主張を曲げなかつたのみならず、常に我自らを鞭撻して、其の蘊蓄の陶冶を怠らなかつた、詩的精進の力强さを裏書きするのである。

明和八年大雅堂と「十便十宜圖」を合作した當時は、尙ほ大雅の盛名に押さるゝ或る羞恥の覆ふべからざるものがあつた。どこかに筆力を誇張した態とらしささへが匂つてゐた。が、それから安永の九年間、天明の三年を加へて僅かに十二年、畫境書風の展開の著しさを思ふ時、

老來尙ほ自己修錬の手を緩めなかつた、大なる教訓を感じねばならないのである。

要するに、其の偉大性が世に勝ち人に勝つのである。其の透徹した個人性が萬人に光被したのである。芳露薫風馥郁として詩境に漲る、今この略傳を書く禿筆にも、自ら微妙音の嘶きを聽く思ひである。

蕪村名句評釋

春之部

ほうらいの山まつりせん老の春

「ほうらい」は「蓬萊」、支那の「山海經」「魯范神仙篇」「十洲記」等にある、仙人の住む、壽福の極致を理想化した渤海中にある假想の山である。「山海經」の註には「上有二仙人一、宮室皆以二金玉一爲レ之、鳥獸皆白」とあり、「十洲記」には「上有二仙家數萬一、天氣安和、芝草常生、無二寒暑一、安二養萬物一」とあり、「神仙篇」には「乘空向二紫府一、控レ鶴下二蓬萊一」とある。秦の始皇帝が、方士を蓬萊に使はしめて、不死の藥を求めたのも名高い話である。說を爲す者は、其の蓬萊山は、我が日本であつて、方士徐福の墓と稱するものが、現に紀州にあるともいふ。

この芽出度い山を象どつて、三寶の上に、鏡餅を置き、海老、昆布などを添へ、正月の緣起を祝ふ飾り物を作る、それを蓬萊といふ。この句も無論、正月の飾り物の蓬萊で、蕪村の家にも、當時の習はしを缺きはしなかつたであらう。蕪村といふ人が、世間に傳へらるゝ程磊落一方の人でなく、社交にも家庭にも、むしろ細心な注意を拂つてゐたことから考へて、案外家に不相應なと思はれる程、立派な蓬萊を据ゑてゐたかも知れぬ。

「老の春」は、元日のことを「御代の春」「花の春」などゝ言つた、其の轉訛で、老人の春を迎へた、俳句的な簡約法による既成語である。

句意は、別に解釋を要するまでもない。蓬萊の山祭りをして、年老いて迎へた芽出度い春を祝はうといふのである。自分を蓬萊山中に住む不老不死の仙人と見て、其の山祭りをしよう、といふやうな氣持が、この句を作る素因であるらしくもあるが、そこまで深く穿鑿するのはどうか。年寄つても、幸ひにかやうに健やかである、このめでたい春にふさはしい、といふ春らしい豐かな華やかな氣分から、蓬萊のお祭りをしよう、といふ半ば卽興的の氣分の動きと見ていゝと思ふ。

「蕪村句集講義」の鳴雪說に、支那の帝王の位についた時、山岳を祀る儀式をする、それに倣つて、其の意氣組みで山祭りをするといふのがあるが、帝王の封山の儀式は、其の卽位を天地

に告げる意味で、神聖にして且つ壯嚴を極めるものらしい。蕪村がさういふ意氣組みであるといふより、もつとずつと輕い氣持で、めでたい心祝ひの對象として、蓬萊をかりて來た、と位に見る方が妥當であらう。

蕪村の作に、正月の句といふのが比較的に少ない。「蕪村句集」にも僅かに三句を錄するのみである。其の他「歳旦帖」「句稿草稿」等をあさつても、恐らく十餘指を屈するに過ぎないであらう。正月の句には、芽出度いとか、春らしいとか、作句內容に或る限界があつて、創作の自由性が半ば束縛されてゐる。自然、言葉遣ひや、文字の扱ひが主となつて、空虛な內容を糊塗する手段的になる場合が多い。言はゞ、最も句作の困難な、佳句の得難い、苦手とも見られる。旺盛な創作慾を持つてゐた蕪村が、正月の句を試みるに餘り勇敢でなかつたのも、其の爲めでないかと思ふ。こゝにも、たゞ一句を掲げるにとゞめる。

離　落

うぐひすのあちこちとするや小家がち

「離落」は「籬落」が正しい。垣の意。「神仙傳」に「葛玄謂弟子曰、吾今當二尸解一、八月十三

日日中時當發、至レ期臥而氣絕、弟子燒香守レ之三日、夜半大風起、失二玄所在一(中略)、風止一宅籬落樹木皆敗拆也」又た柳宗元の詩に「籬落隔烟火、農談四隣夕」、白居易の詩に「唯有數叢菊、新開籬落間」。

普通句の前書きは、句の意味を助けて、より判り易くする爲めに置くのであるが、この場合では聊か異なつてゐる。「蕪村句集講義」の子規說には、村落とか部落とかいふ意味を、具體化して「籬落」卽ち垣と置いたのだらうとある。惡く忖度すれば、作者は不用意に「離落」を村落又は部落の意味に――それを漢字的に洒落れて――解してゐたかも知れぬ。

併し、村落とか部落とか、抽象的にいふより、其の中で、最も著しく視野に映ずる生垣、竹垣又は建仁寺、四ッ目などの垣を抽出して、風景的に句の添景とするのは、珍らしいといふより、新らしい試みであるとも見られる。

「小家がち」は言ふまでもなく、大きな家に對する言葉でなく、小家の複數を意味する。雨の多い時「雨がち」と言ひ、病氣をしつゞけてゐるのを「病氣がち」といふ類である。

鶯が小家がちな間を、あちこちとしてゐるといふ純叙景の句であるが、「籬落」の前書きによつて、小家がちな場面を、一層明らかに見せるやうである。

「あちこちとする」は、鶯の動作をいふので、平たく言へば、こちらへ飛んだり、あちらへ往つたりする意であるが、「あちこちと」とする言葉の響きから、一所に蟬のやうに停止してゐない鶯の習性が、其の敏捷なとも見える姿が、或る程度まで具體化する。

この句の表面に、鶯の啼く聲は聞かれないが、俳句の約束として、普通に「鶯や」とか「鶯の」と言へば、其の聲によつて認識したことが肯定されてゐる。殊にこの句の場合では、「あちこちとする」時間的な動作もあるので、聯想の中に、其の朗らかな、籠の鶯とは別な、野放しな聲も生きて來るらしい。

さういふ部分的な知識を得て、改めてこの一句を讀み下すと、靜かに、和やかな、都塵を離れた部落らしい光景と、そこに漾うてゐる好もしい空氣が感ぜられる。さういふところに住みたい欲望さへが湧く。明るく平和な幸福感も、どことなく滲み出て來る。

「あちこちとするや」とこの場合態と八音にして、贊嘆らしい「と」が加へてある。效果的に見れば、この「と」が無ければならない一句全體の姿でもある。どうしてこの場合「と」を必要とするのか、又たこの「と」を省いては、句の價値が殆んどゼロになると思はれるのか。他の例を引いても「このあたり目に見ゆるものは皆涼し　芭蕉」の「は」の贊嘆らしいものが、取

り除くことの出來ない一句の效果に役立つてゐる。かやうな例は、其の他いくらもある。

定型七音を八音にしなければならない理由は、俳句としての微妙な詩論に入ることであつて、若し委曲を盡すとすれば、數十枚數百枚の大論議に至るであらう。よしさやうな大論議に涉るとしても、今日の學問では、到底言ひ盡せないものであるかも知れない。つまり、八音をいゝ語呂として味ふ舌の感觸から、一句全體の情景空氣に打たれる心の昂ぶりは、或る極致に至つて、もはや言葉や文字の解釋と說明を絕つからである。

鶯のあちこちとするや小家がち

鶯のあちこちするや小家がち

二つを讀み比べて、「と」の有無によつて、舌のすべり具合の、甚しく相違するを、先づ何人も感ずるであらう。すべり具合のいゝのは、むしろ後句であるが、それと同時に、何か急迫したものが伴なつて、情景を味はせる餘裕を持たない、輕く表面を通過してしまふ憾みを感じないだらうか。言はゞ、或る風景を、スピードアップした自動車で見過ごすやうな心持である。それが、前句になると、或る瞬間ではあるが、そこに足をとめさせて、しつかり其の光景を呑み込ませる力と餘裕が感ぜられる。そこが大事な分岐點なのである。

「と」は固と虚字であつて、何ら動作を指示するものではないが、單に「あちこちした」といふのと「あちこちとした」といふのでは、普通の意思表示言としても、輕重の差がある。「と」の爲めに、「あちこち」する意味を反覆せしめる程の效果がある。この句の場合に於て、尙更ら其の效果が、一句全體の上に波及してゐると思はれる。

大まかな言ひ樣で、又た此句に限つてのことであるが、徒歩で觀賞するのと、汽車で見過ごすのと——それ程でないかも知れぬが——さういふ差異が、「と」の一字の有無によつて生ずるものと、解し得らるゝのである。それ以上音樂的に言語的に科學的に又た詩的に、專門的な研究は他日に讓らねばならぬ。

鶯を雀歟と見しそれも春

鶯を雀と見違へた、それも春らしい滑稽であつたといふ意。普通なら、鶯と雀は見違へるやうな鳥ではない。羽の色と言ひ、身のこなしと言ひ、對蹠的に相反して居ると言つてもいゝ。それを不圖思ひ誤つたので、どうしたことか、と自分ながら其のをかしさを苦笑する卽興感である。「それも春」は、春なればこそ、と其のユーモラスな出來事に自ら解釋をつけたのである。

この「それも春」と自ら解釋をつける處に、多少の理智が加つてゐる。單に、鶯を雀と見違へたをかしさをのみ叙して、「それも春」を言外に味はしめよう、とするのとは、句作手段が大いに違ふのである。一句の上から理智的解釋を避けるのを本義とする主張から言へば、この「それも春」は、全然贅物だと言ひ得ないにしても、言ひ過ぎてゐるとの批難を免がれ難い。

が、俳人の習癖として、この理智的解釋を、時に氣の利いたウキット、頓智として喜ぶ傾きがある。それが爲めに、俳句を歪曲して、所謂月並化することすら無關心である場合もある。蕪村は俳人中でも、さういふ習癖の極めて薄い一人であり、又た努めてそれを避けようとしてゐるのであるが、こゝには其のウキットが、一句の效果を齎らすものと考へたのであらう。或はこのウキットを省けば、無味索寞なものになつてしまふかも知れぬが、さりとて瓦を珠とする程の效果も上つてゐないやうである。

たゞ鶯を雀と見違へたといふやうな、諷詠の素材にもなりさうにない、尋常の茶飯事を捕へ來たつた處に、作者の感受性が縱横に、何處まで働いてゐるかの一例と見られる。

うぐひすや家內揃ふて飯時分

句意を解く必要のない、又た安らかな素直な、文字的な技巧さへもない、蕪村句集中稀に見ると言つていゝ作である。

昔は銘々の箱膳といふものがあつて、お椀、茶碗、箸、皿の食器が入れてあつた。いざ食事といふ時には、主人主婦はじめ、かねて定まつた席に就き、其の箱膳を前にして、お給仕人から飯、汁の類を銘々の食器に盛つて貰ふのである。嚴格な家には、むつかしい作法もあつたであらうが、どのやうな放縱な家でも、頂きます、と挨拶して頭を下げる一禮位はしたものだ。さうして家内中、病人又は他の事故のない限り、何を捨てゝも食事を共にしなければならぬ。食事中は、成るべく雜談を禁じ、眞面目に謹直な心持でゐた。さういふ靜かな、樂しげな家庭風景に、鶯が野外伴奏をしてくれる、如何にも平和な幸福感に充ちた一シーンである。

必ずしも作者の生活に拘泥する必要はないが、多く責債に追はれて貴室に閉ぢ籠り、又た人一倍子煩惱であつたらしい蕪村の、飯時になつて、家庭の一員としての歡びに浸つてゐる情景も、この一句から汲みとられるやうである。

無造作に、たゞ有りのまゝを叙した、何ら苦心の拂はれた痕跡がない。至藝といふべきであらう。

鶯や茨くゞりて高う飛ぶ

野外の或る光景で、茨の茂つてゐる中から、鶯が飛び出した、それを意外なことに興じたのである。

鶯はやさしく敏捷な鳥、茨は刺のある醜いもの、さういふ概念を持つて、始めて作者の興がる氣持は理解される。若しこれが、松をくゞるとか、芦をくゞるといふのでは、作者の狙ふ興味は消滅する。そこに鶯のやさしい敏捷さを、茨を借りて見せようとする作意の痕跡がある。實際でなくて、作り物の匂ひがする。「高う飛ぶ」といふのも、更らに其の實際に遠い作り物感を強める。

前句「飯時分」に比較して、作者の生活感に遠い、又た自然感の稀薄な、技巧臭の作といふべきであらう。

禁城春色曉蒼々
青柳や我大君の草か木か

—蕪村名句評釋—

「禁城春色」は「唐詩選」にある七言律詩。

早朝ニ大明宮ニ呈ス二省僚友ニ

賈至

銀燭朝レ天紫陌長、禁城春色曉蒼々、千條弱柳垂レ青瑣ニ、百轉流鶯遶ル建章ニ、劍佩聲隨ニ玉墀ノ步ニ、衣冠身惹ニ御爐香ニ、共沐ス恩波ニ鳳池上ニ、朝々染レ翰侍ス君王ニ、

帝都皇居の華麗な樣と、君王に侍する榮譽な狀を諷つたものである。

又た「我が大君の草か木か」は、「太平記」にもあり、謠曲などにも引用されて、人口に膾炙してゐた、紀朝雄の歌の文句を轉用したのである。「太平記」に「又天智天皇の御宇に藤原千方といふ者ありて、金鬼、風鬼、水鬼、形鬼といふ四つの鬼を使へり……如斯の神變、凡夫の智力を以て防ぐべきにあらざれば、伊賀伊勢の兩國これがために妨げられて王化に順ふ者なし、爰に紀朝雄と言ひける者、宣旨を蒙りて彼國に下り、一首の歌を詠みて鬼の中へぞ送りける「草も木も我が大君の國なれば、いづくか鬼のすみかなるべき」四つの鬼此歌を見て……四方に去りて失せにければ、千方勢を失ひて軈て朝雄に討れにけり……」とある。

かやうな出典を根據とするのは、當時の詩人文人等の、むしろ得意としたところで、中には

往々にして衒學の嫌ひさへあつた。蕪村も其の輩に倣つたので、唐詩と和歌を背景に、自作の重味をつけようとしたのである。

固よりかやうな出典に據る以上、帝都に住む者として、太平の御代を祝ぐ底意を諷はうとした、其の作意を否むことは出來ない。卽ち單に柳のめでたい樣を述べたのでなくて、柳を借りて御代太平を謳歌したのである。若し强ひて理由づけるならば、蕪村の勤王的精神の發露とも言ひ得るのである。

併しながら、在り來つた理智に訴へる勤王歌の類と違つて、表面は柳の風情を直叙したものの如く、よく韜晦してゐる。

句意は、我が王化に草も木もなびく御代であるから、その萋々たる柳も、矢張王化になびく草か木であらうといふのである。

木の如く又た草の如き、柳の枝垂るゝ特性を捕へてゐるのが、作者の著眼の非凡なところである。

とは言へ、かやうな作は、出典を竢たねば成立しない、一句としての弱味を持つてゐる。裸一貫でない、衣冠の裝飾によつて威容を示す感がある。作者にしては、大膽らしい表現に、何

か矜らしいものがあるであらうが。

又た見樣によつては、一種の轉和吟で、賈至の詩句を、俳句に言ひ換へたのである。普通の轉和吟といふものが、原句に卽き過ぎて、何ら轉和の働きを見せないもの〻多い中に、原句に卽かず、却つて國粹的の意氣を諷つてゐるのを異色とせねばならないであらう。

捨やらで柳さしけり雨のひま

「俳諧品彙」といふ書に「前文有」として、下五「雨の中」とある。

「捨てやらで」は、捨てゝしまはうか、どうしようか、と決しかねてゐた心持で、この句の眼目とも見るべき大事な言葉である。

「柳さしけり」は地面に柳のさし木をするので、根のない枝ながら、やがて根を下ろして來る。さし木は其の他いろ〳〵の草木に行はれてゐる。

「雨のひま」は雨の降りやんだあひま。「雨の中」よりか、この句の情景に適するやうである。

「すてやらで」にはそれが氣になつてゐた、或る心の執著が含まれてゐる。だから「柳さしけり」に、ためらつてゐた事の解決のついたやうな悅びが一層深いのである。たとへば「三本の」とか、「よき枝の」とか言つたのでは、たゞ身邊の一雜事に過ぎなくなつて、卽興的な淡い、嚙みしめる味ひに乏しいのである。「三本の」「よき枝の」といふに比較して、「すてやらで」には、幾分作者の生活感情に觸るゝ濃度が考へられる。何の奇もない平淡に見えて、捨て難いところがある。

この捨てもしなかつた柳は、どういふ柳であるか、活けてあつたものか、又た何かで伐り下ろした枝であらうか、などの穿鑿は、讀者の聯想に任せて、この句の拘泥するところではない。作者は柳の來歷を述べてゐるのでなくて、柳に對する心持を表示してゐるのであるから、讀者の經驗が、其の心持に適合する場合を、いろ〳〵に想起するとして、それを一定する必要はないのである。

「さし木とも見えずなりたる柳哉」といふ句が、他に蕪村にある。柳のさし木といふことに興味を持つてゐたやうである。

出る杭を打たうとしたりや柳かな

「出る杭は打たれる」、いろはがるたなどにもある俗諺。高慢な心持への敎訓、又た異常な榮達

への戒めなど、いろ〳〵の意味を含む。

「したりや」の「りや」は拗音に讀む。「したら」の訛りである。

この句は「明和八年歳旦帖」にある。蕪村が夜半亭二世を繼いだ時の紀念の歳旦帖である。蕪村が畫人として京都に落著くと同時に、又た俳人として認められた時分の作。

背景に俗諺があるので、この句意はいろ〳〵に解される。

文字通りに解すると、出る杭を打つてやらうとすると、それが柳であつた。打たうとする心のはづみが拍子抜けした、といふやうに見える。併し、杭其のものと柳は同じものであるか、又たそれが別なものであるか、それは判然しない。杭だと思つたボクの木が、柳であつた、といふもうけとり難く、又た杭の近くに柳があり、杭を打たうとする時に、風に靡くかどうかして、そこらへ枝垂れた、といふのも無理な見方である。

實在の景物としては、隅田川の百本杭と言つた風に、高低の亂れた杭と、其のほとりの水に垂るゝ柳があるのみで、「打たうとしたりや」は、あの高い杭を打ちたい、といふ心の念ひと解する。扨て打たうとすれば、それと相待つ柳の風情も亦た捨て難い、と言つた句意らしくもある。

實在はたゞ柳のみで、杭も、打たうとする働きも、總てを俗諺通り享け容れた虚字的心の動きとする。或る高慢チキな男か何かを心に浮べて、あいつを一つ懲らしてやらねば、と稍々昂奮を感じてゐる目前に、しなやかな柳を見て、いつか平靜になる、と言つた意にも解されないではない。蓼太の有名な句に「むつとして戻れば門に柳かな」がある。小唄などに引用されるだけ、理智を含んだ、イヤ味な句であるが、それと似通つた往き方と見るのである。蓼太のは俗情丸出しであるが、蕪村のは俗諺を借りて居るとは言へ、突如とした言葉に飄逸味があるので、左程にイヤ味を感じないといふ程度である。

或は、蕪村の夜半亭二世を繼いだ時の氣持として——蕪村は夜半亭二世を繼ぐ事を餘り好んではゐなかつた、門人几董は第三世にするといふ條件附きで、漸く納得した——自戒自省の意味で、餘り出しやばつてはいけない、あの雪折れのない柳の如くあれ、と言はうとしたのが、言葉のはづみで、こんな句になつたのかも知れない。

一風變つた句であるが、句意は要するに不得要領である。

草庵

② 二もとの梅に遲速を愛すかな

句意は解するまでもなく、蕪村の庭に二本の梅があつて、一本は速く咲き、一本は遲れて咲く、其の遲速のあるところを愛してゐる、といふまでゝある。

「梅の遲速」と言はず「梅に遲速」といふ字の差違に注意すべきである。不用意に見れば「に」「の」いづれにしてもいゝやうであるが、この場合は「に」でなければならない。「に」といへば、語呂が堅くなる。それだけ調子が重々しく、やゝゴツ〳〵する。それに音律上の小休止に似た、或る澁滯がある。自然この句の主題たる梅に、觀點を凝集せしめるにも役立つ。

のみならず「梅に」といふので「遲速を愛する」ことそれが主働的な句意となる。もつと立ち入つていふなら、他のものにも遲速を愛するかも知れないが、只今はこの草庵の梅に遲速を愛してゐる、といふ心持である。結局「梅の遲速を愛す」でなくて、「梅に遲速を愛す」なのである。

「二もとの」と和文調に柔かく出たのが、「梅に」の「に」から一轉して「遲速を愛すかな」と堅い漢文調化してゐる。かやうな和漢兩調の併用は、多く木に竹を接いだ、不純な痕跡を殘すものであるが、こゝには其の斧鑿の痕がないやうである。

かやうな漢文調の句は、芭蕉以前にも以後にも甚だ珍らしく、表現上の一區劃をなしてゐる點で注意されたものである。

蕪村が大魯に與へた手紙に

ちか頃無理成哉留之事御尤と被存候、拙句にも折々有之候、連歌者流やかましく可相申と存候共不妨候

わたの花たま〳〵闌に似たる哉　素堂

春の水ところ〳〵に見ゆるかな　鬼貫

老なりし鵜飼ことしは見えぬかな　蕪村

右之類はいづれも不苦歟と覺申候、先頃拙句に

きのふけふ高根のさくら見ゆるかな

これらは無理かと存候へども、かまはず致置候見事哉と申留御尋いかにもあしく可有之候、しかれ共愚老はくるしからず存候

美哉

洋々乎　美哉盛也　悠哉

などの類はずいぶんと可然候、見事も和俗のことばにては見物事と申心に候や、左候へばあしく候、愚意には美ナル哉の事と存候、連歌者流は漢學無之人多候故、却而俳諧士よりは不さばけ成論も時々有之候……。

といふのがある。大魯といふ門人から、從來餘り見馴れぬ「哉どめ」の句を批難して來たので蕪村は其の例を擧げ、自分はさまで不都合とは思はないと、返答したのである。連歌者流といふのは、貞門俳人のことを指してゐるのであらう。それらは漢學の素養がないから話せない、

と一蹴してゐる。さしづめ、此の「遲速を愛すかな」の如きは、蕪村の所論を裏書きする好適例といふべきである。

白梅や墨芳しき鴻鸕館

「鴻鸕館」は「鴻臚館」が正しい。

支那の「漢書」に「鴻聲也、臚傳之也、傳レ聲贊通也」又た「掌二四方蠻夷一曰二大鴻臚一」とあつて、外國人を接待する場處とした。我邦にも傳はつて、古くは持統天皇の頃に、太宰府に「筑紫館」といふのが出來た。それが後に鴻臚館となつたといふ。又た奈良から京都へ遷都の時、玄蕃寮と鴻臚館を置かれ、弘仁以來東鴻臚館を東寺、西鴻臚館を西寺とされたとも傳へられてゐる。いづれも外客接待の爲めであつた。併し、村上天皇の天德元年——今より約九百八十年前——頃、既に甚しく頽廢してゐたと見え、菅原文時といふ人の、鴻臚館修築の意見封事なるものが殘つてゐる。其の意見も採用されず、其のまゝ廢滅に歸したものらしい。爾後外國使臣などの接待は、別所又た便所に於てするとあつて、鴻臚館の名は見えなくなつてゐる。鴻臚館趾として「筑前續風土記」や「太宰管內志」等の記す所も、餘り要を得ないやうである。

一時は新館と稱へて、難波——今の堺市か——にも設けられたといふが、京都と共に、所在は不明らしい。

自然この句は、どこの鴻臚館を詠んだのか判明しない。或は史上に傳へられてゐる事に準據した假想の作であらう。

「墨芳ばしき」は、文字通りには墨の匂ひをいふのであるが、この場合は、墨痕淋漓などいふ處から、文字の墨色をさすので、そこに掲げてある額か何かに對する心持も含まれてゐるであらう。外客接待と言つても、主として支那か朝鮮の使臣であつたであらうから、自然に墨の連想が湧くのである。

梅はそこらに咲いてゐる添景であるが、これも想像的に配置したので、鴻臚館といふ館物の感じにそぐふばかりでなく、墨に對する色の取り合せで、「白梅」と言ひ、又た梅の匂ひを「芳ばしさ」にも利かせてゐる。總てが清淨潔白と言つた作者の假想を具現してゐるやうである。

假空な想像を根據としての作であるが、如何にもそれらしい、實在の景情とも感ぜらるゝ表現に敬意を拂ふべきであらう。

出べくとして出ずなりぬうめの宿

「いづべくとしていでずなりぬ」「いづべくとしてでずなりぬ」「でべくとしてでずなりぬ」「でべくとしていでずなりぬ」四様の讀み方がある。作者はどう讀んだか判然しない。七五の定型律に準ずるとすれば「いづべくとしてでずなりぬ」の第二を正しとすべきであるが、蕪村にはこの外「梅遠近南すべく北すべく」「をちこち遠近と打つ砧かな」などの破調句があるから、或は「でべくとしてでずなりぬ」の第三を主張したかも知れぬ。要は、どう讀まなければならない決定は下されない。讀者の好感の持てる讀み方を把持して差支ないであらう。

右四様の讀み方いづれを採るとしても、第一「七六五」第二「七五五」第三「六五五」第四「六六五」の配列となつて、定型律から言へば、一種の破調であることに變りはない。かゝる表現も蕪村の始めて試みたところで、それまでの俳句には殆んど見なかつた、擬漢文調の一變化である。

「うめの宿」は、梅の花の咲いてゐる家のこと、俳句的簡略法に頼る既成語であるが、この「宿」が、どういふ種類の家であるかは、讀者の聯想に任かすの外はない。

句意は、外出しようとしてゐたが、たうとう出なくなつて、うめの宿に居ついたといふのである。裏面に、宿の梅を賞美する心持が仄めいてゐる。アケスケに、宿の梅に釣られて外出もしなかつたと言つては、何らの含蓄もない低調な句になつてしまふが、この表現によつて、其の卑俗さが救はれてゐるやうである。が、それまでゝ趣致は淺い憾みがある。

しら梅や北野の茶店にすまひ取

「北野」は京都の北野天滿宮、「茶店」は「ちやや」と訓む。

そこらに白い梅の咲いてゐる北野の茶屋に、相撲取が休んでゐる、客觀的光景を、其のまゝに叙したのである。作者の主觀は、外に露出はしてゐないが、何ら因果關係のない、梅、茶店、相撲取の個々の素材を貫通する感興の底流がある。清く爽かな雰圍氣が句面に浮動してゐる。

こゝに其の高弟几董に與へ、この句に關して意見を述べた蕪村の書翰がある。蕪村の藝術良心ともいふべき、詩に對する用意の一端を窺ふに足るものであるから、其の全文を左に引用する。

梅の句今撰び進じ候、併卷中秀逸之句見えず、遺恨之事に候、すべて趣向のもとめどころ、同じ木のもとをもてはやす、洒落に上手めきたる句づくりに泥みて、鬱翠の敗荷を踏襲し、鶯鶯の幽篁の煙を

破却する體の句ぶりにのみ成行事に候、堪能の上には、あやある句も、うちひらめなる句も、みな宜に叶可申候、さなきは只あらたなるより、又あらたなるこそ願はしかるべく候、しかし其の新意を探得る事はきはめてかたき事に候、況梅の題などは、いにしへより幾千萬吟ぞや、崑山の片玉もさがしもとめざる隅なく、桂林の一枝も折のこしたる梢だになく候、今はいかゞすべき、橋なき水をわたり、路なき山にわけ入て、奇絶佳勝の地をも尋ぬべきわざに候、かの武陵の漁者もむかしより、豈洞中の春色をしらんや、愚老もかくは、まなこづけ候へども、もとより不堪なれば、明らかに新古の境を申分つべくも覺ず候、されど心の欲するところなれば、はつかに此ほど申出たる句二ツ三ツ書付候。

よのつねおもひよる句

かはほりのふためき飛や梅の月

梅ちるや螺鈿こぼるゝ卓のうへ

別に趣向をもとむる句

しら梅や北野の茶屋にすまひ取

梅咲て帶買ふ室の遊女かな

右の句合のうちには、我社中の若き人々も、多くまじらひおはすよし承り候ゆへ、かくつぶやく事に候、他の老練の人々に申及すべきにはあらず候、相かまへて御さた御無用に候、穴かしこ

春夜櫻のあるじ　　夜半　蕪村

手紙の趣意は、梅の句を撰したが、どうもいゝ句がない。昔から在り來つためつけどころで、書で言へば、破れ蓮に翡翠を配するか、竹藪に鶯類を添へる紋切形をたゞ上手めかしたゞけで

ある。上手になれば、言葉の綾を求めても、すらりと工夫なく言ひ下してもよろしいが、さうでない人々は、いつでも新らしく〳〵と心がけねばならぬ。まして梅の句などは古往今來幾千幾萬と試みられてゐて、崑山の片玉も、桂林の一枝も餘す處がない。だから橋なき水、路なき山の人の思ひも及ばぬ方面をあさつて、ゆくりなく武陵桃源に探ね入つた漁夫のやうに、意外な春色に接する用意を必要とする。自分も大したことは出來ないが、誰でもが思ひよる境地と意外な處に新たな境地を發見する相違を言へば、先づ左の二句づゝのやうなものであるといふのである。だから、この「北野の茶屋」は、蕪村として、誰もが思ひよらぬ境地として、多少の自信を持つた句であつた。

この句作論は、要するに、陳腐を嫌つて新奇を求め、模倣を排して創造を奬めた、蕪村の詩的主張であつたのだ。かやうな主張、管見、用意、悟入があつたからこそ、其の大手腕をも發揮し得たのだ。この內面的勞苦の眞諦を、當時の俳人幾人が會得してゐたであらうか。不得要領に「寂び」を說き「詫び」を云爲し、獨りよがりの抽象論に終始してゐるのは、そこらに量り切れないほどある中に。

早春

なには女や京を寒がる御忌詣

「御忌」は法然上人の忌日、京都の總本山智恩院で、正月十八日から廿五日まで一七日の別行法事があるが、廿五日を正日とする。又た京都の年中行事に、この廿五日を最初の遊覽日として、辨當始めと言ひ、東福寺の聖一國師開山忌の十月を辨當納め、といふともある。

この句は「其雪影」其他二三の俳書にもあるが「早春」の前置はない。句として又た前置を必要としないやうである。たゞ前置がなければ、「御忌詣」を主題とした句になり、前置があれば、御忌詣を添景とした、早春の景情を詠むのが主になる位の相違がある。いづれにしても、句の價値を增減するものとはならない。思ふにこれも蕪村の漢詩癖ともいふべきもので、漢詩によくかういふ題を置くから來た、不用意な前置であつたのであらう。

京都の寒さは、底冷えがするといふ。冬の北風は、消え難い北山の雪颯となつて、しみ〴〵骨にしみる。餘寒の去らない時分の御忌詣は、遊覽氣分の華やかさはあるにしても、身だしなみな晴著を著た身には、まだ〳〵料峭たる寒威である。海近い比較的暖かな土地から來た者には、尙更其の寒さが感ぜられる。

當時大阪の北の新地に、梅女と言つて句を作つた嬌妓があつた。几董の日記には、北の梅女南の袖女、などゝある。後に月溪の女房になつたとも言はれる。蕪村が梅女にかいて與へた繪に添へて

花とりのために身をはふらかし、よろづのことおこたりなる人のありさまほど、あはれにゆかしきものはあらじ。

花を踏し草履も見へて朝寢かな　蕪村

右の句は四條ちかきわたりなる木屋町に、なには人の旅やどりして有けるを訪ひての口號なるを、おりふし梅女がもとよりのふみのはしに、初ざくらのほ句かいつけて、みやこの春色いかに見過し給ふやなど、ほのめきゝこへければ、其のかへりごとするとて、筆のついでに寫しておくりぬ。

といふ短文がある。朝寢をした浪花人と梅女とは、こゝでは別人のやうであるが、又たわざと別人にして書いた處に、趣があるとも思はれる。御忌詣を寒がる浪花女を、梅女と見立てなければならない所以はないが、さう見立てる爲めに、多少の情味を加へることは否めない。

「三軒家大阪人の蚊遣哉」といふのが蕪村にある。京都人には、姿樣子で、すぐ大阪者の見分けがついたものと見えるが、この御忌詣に、いきなり「浪花女や」と言ひ下した言葉の勢ひか

ら言つて、そこらの善男善女を、大阪者と見分けたのと、やゝ感じを異にするやうである。そこで梅女の如き艶つぽい女が、聯想にまぎれ込むのである。

やぶ入の夢や小豆の煮るうち

藪入りは、奉公人の宿下り、正月十六日一日休養を與へられる日。なぜ「藪入り」といふかに、五雜俎、和訓栞等に種々の說があるが、それは句以外の穿鑿になるから省く。七月の盂蘭盆にも「藪入り」があるが、それは元祿以後に出來た習慣で、それ以前は正月一度に限られてゐたらしい。「藪入り」が春の季題としてのみ取扱はれるやうになつたのも、其の爲めであらう。

支那の故事に、盧生といふ男が、邯鄲の里で、粟飯を炊ぐ間に、人生五十年の榮華を盡した夢を見て、始めて人生を悟つたといふのがある。黃粱一炊夢とも言つて有名な故事になつてゐる。「小豆の煮るうち」は、其の盧生の故事を出典としてゐる。

盧生の故事には、人生の一大事を語る嚴肅な意味もあるが、この句はさういふ敎化諷刺の意を含んではゐない。むしろ宿下りをした、父母弟妹等の肉親に接する、樂しい悅ばしい平和な心持を籠めてゐる。さぞ氣勞れもしてゐるであらう、ちよつとの間、小豆の煮えるまで、ごろ

ッと一やすみしなさい、さうしよう、と言つたやうな親心子心の感應が、仄かに響いてゐる。

京都附近では、宿下りをした者に、牡丹餅をこしらへてやる習はしがあるといふ。「小豆」を持つて來たのは、蕪村の寫生であつて、單に盧生の粟に對する抽象觀念ではなかつた。が、粟を炊くといふより、小豆を煮ると言つた方が、より家庭的に我々には感ぜられる。

「藪入りの夢や」だけでは、餘り言葉を簡約し過ぎた憾みがあるが、「小豆の煮るうち」で、盧生の故事に想到するので、却つて其の簡約が働いてゐるとも見える。

藪いりや餘所目ながらの愛宕山

「愛宕山」は京都の西に立つ最高峰。頂上を朝日峰といふ。阿多古神社が祀られてゐる。こんもりした森が瘤のやうに、著しい形をしてゐる。「餘所目ながら」は、正視しないで、わき目をしながらの意。

平生は主家の用に追はれて、郊外の山のことなど思ひ出すひまもなかつたが、けふは久しぶりに、愛宕山を望んで、何となく懷かしい氣がする。が、それよりも早く家に歸らう心が急くので、わき目をしながら行く、と言つた句意。「餘處目ながら」にこの場合、チラと一瞥したば

かりでなく、或る時間、それと連れ添うて行く意がある。

何か愛宕山に心惹かるゝ因緣でもあるのだらうか。東山と言はず、比叡山と言はぬわけは。それは主として、望見の距離と、山の形の特異性と、他に音調の關係があるやうに思ふ。東山では餘りに近きに過ぎ、又たそれを久しぶりに望見するといふのも殊更である。愛宕山は、今日こそ電車やケーブルで、樂に往復出來るが、昔は相當町を隔てた遠い山に思はれてゐた。さうして、何處から見ても、あれは愛宕だといふ丸みを持つて頂上の凸起が著しい。平生は忘れがちでも、それと氣づけば、程近い感じのする望見のいゝ距離にある。且つ穿鑿すれば、東北を山に遮ぎられて、南西に平野の展開してゐる京都の地理的關係から、藪入り者も、多くは、其の展開した平野の方へ出るとも想像される。さすれば比叡山は背後になる。餘處目ながらは、どうしても愛宕山になるわけである。それに「比叡山」「比枝の山」といふより「あたごやま」の方が、齒切れのわるい、舌に重い、音度の鈍さが感ぜられる。それが奉公人らしい氣分にそぐふ、といふのでなく、この句に、却つて音律上「鈍重の快感」と言つたやうなものを賦與してゐるやうである。

愛宕神社に對して、敬虔な氣持を持つたといふではないであらう。

要するに、蕪村自らの持つ、京都の或る風景觀を、藪入りの氣分に移存したのであらう。

やぶいりや守袋をわすれ草

「守袋」は、神社のお札を大事に袋に入れて肌身につけてゐた、身を守る意の袋。昔は老若男女を問はず、守袋を持つてゐたといふ。丁度今日の基督教徒が、十字架を持つてゐるやうに。「忘れ草」は、普通は草の名――萱草、通草、煙草、蘆の異名などゝいふ――。こゝでは、忘れたといふのを柔げ、且つ洒落れて言つた、と解したい。つまり「守袋を忘れ來て」とか「忘れけり」とかいふべきを、忘れ草といふ草の名のある處から、舌に乘りよく、且つ露骨にならないやう、文字の技巧を凝らしたのである。

之を憂ひを忘れる意、卽ち「忘れ種」と解する說もあるが、句が難解になつて妥當とは言へない。

藪入りの心慌たゞしさから、つひ肌身はなさず持つてゐる筈の守袋を忘れ、宿下りしてからそれを思ひ出した、或る場合の閑葛藤である。

大事な守袋を忘れるやうな、そゝかしさも、そのやうに無事に達者に勤めてゐれば結構、と

又たそれが笑ひぐさにもなる、なごやかな氣分をさそふ。閑葛藤ではあるが、時にとつてのいいエピソートでもある。そこらに「忘れ草」と洒落れていふ餘裕をも生ずるのである。

文字の技巧は、多くの場合、主なる感情を歪曲して、文字面のみの、餘計な彩色に墮するものであるが、この場合は、「忘れ草」の技巧によつて、却つて主なる感情が一層濃度を加へ、和氣靄々たる情愛が、燻し銀のやうに、内に籠つて感ぜられるやうである。

序でに、憂ひを忘れる「忘れ種」の意に解すると、守袋を持つてゐれば、それで總ての憂さを忘れる、即ち守袋を忘れ種にするといふことになる。それでは「藪入り」とどういふ關係になるのか不明。且つ疾くに持つて居るべき守袋を、今更ら忘れぐさにするといふのも、聊か唐突としてゐる。つまり「忘れ種」の言葉に拘泥した、考へ落ちの難を如何ともし難いのである。

尙ほ他に「初午や羽織の紐をわすれ草」「更衣うしと見し世を忘れ草」など、又た「あら涼し裾吹く蚊屋の根なし草」など他の蕪村の句を參照すべきである。

公達に狐化けたり宵の春

「公達」は、姓を賜ひたる皇子、皇孫、又は攝政、關白、太政大臣及び其の位に上るべき家格

を持つ人の子をいふのであるが、追ひ〳〵轉化して、堂上方一般に渡り、貴公子といふやうな意味に使はれるやうになつた。

「宵の春」は「春の宵」の活用。

句意は解くまでもなく、貴公子に狐が化けてゐる春の夜の意。

「新花摘」に狐狸の妖怪談がいくつも書いてあるやうに、蕪村は狐狸の傳說的な魔性を信じて興味といふより、むしろ恐怖を感じてゐたらしい。句にも「春の夜や狐のさそふ上童」「狐火やいづこ河内の麥畑」「蘭夕狐のくれし奇楠を炷む」「石を打つ狐守る夜の砧かな」「狐火や髑髏に雨のたまる夜に」「草枯て狐の飛脚通りけり」「狐火の燃えつくばかり枯尾花」など、狐の妖怪味に關するものが相應にある。恐怖的興味を感じてゐた、其の證左ともなるのである。

この公達の句も、おぼろ〳〵とした春の夜に、其の恐怖的興味から、純假想的に、貴公子に化けた狐を聯想し、如何にも春の夜らしい氣分を味つたのであらうが、「狐化けたり」と言ひ放つた語勢などから、多少違つた他の解釋も生れる。即ち、公達の姿をしてゐる者を、現に或る距離をおいて見、其の實際は微行の貴人であらうが、狐でも出やしないか、といふ恐怖心から、其の貴公子を狐の化けたものゝやうに感ずる。さういふ場合とも解されるのである。その方が

この句をよりよく價値づけるやうである。

藥盜む女やはおぼろ月

「淮南子」に嫦娥の故事がある。羿（ゲイ）といふ人の妻が、不死の藥を盜んで仙人となり、月に奔りて嫦娥となつたといふので、それ以來嫦娥は月の異名となつた。

この句は、右の故事に興味を感じて、かういふ月の朧な夜に、藥を盜む、あの羿の妻のやうな女があるだらうか、と疑ひつゝも、そんな女もあるだらうと半ば肯定して興がる心持である。「藥盜む」といふのに、他の金品を盜むより、やゝ超俗な雅致めいたものが感ぜられる。どこか氣品があり、ふつくらと暖か味さへあるやうだ。必ずしも仙人となつて月に奔らなくとも、藥、祕藥又は靈藥、或は毒藥、それを盜まうとする女を想像するだけで、作者は嬉しくなつたのであらう。

一方蕪村は、可なりな芝居通で、當時の役者をよく品隲したりしてゐる。芝居の結構に、奥女中か何かが、御殿に忍び入つて何か盜み出すやうな、これに類似な場面があつたのかも知れぬ。さう思ふと、この句には、多分に歌舞伎味を持つてゐるやうだ。

指南車を胡地に引去る霞哉

「指南車」は磁石でもつけた車で、方向を誤らないもの、支那の黄帝軒轅氏の時、始めて創められたといふから、其の來歴は隨分古い。

「胡地にひき去る」故事は、周の成王の時のこと、三譯を重ねて來たといふから、餘程遠方の胡人で、交趾の南にある越裳氏と言つた。それが歸國する時、道を迷つたので、指南車を與へて歸したのである。

句はこの故事を現實と見て、悠揚たる感じに季感の霞を配したのである。渺茫とした支那大陸の感じが、比較的によく出てゐる。

「高麗船のよらで過ぎゆく霞かな」も、高麗船（こまぶね）といふのが、何か著しい形をしてゐるかどうか、それらに關らず、「高麗」といふのに、既に遠く隔たつた感じを與へる。霞の季感を具象化する手段として、指南車、高麗船などを捕へ來り、然も巧みに實境らしく言ひこなす技倆は、蕪村獨得ともいふべきである。

蛇を追ふ鱒のおもひや春の水

「鱒くへば三年の疵をよぶ」といふ俗諺がある。鱒は蛇を食ふから、其の肉に異常な精分があるといふ意。實際春になつて小川を溯る鱒は、木からぶら下がつた蛇と戰つて、そを餌食にする程、魚中の勇者である。

唐淵明の詩句に「春水滿四澤」とあるのが先例にもなり、冬期に涸れてゐた水が、春に漲つて來る事實からも、春の水といふのに、充實した力の籠つた、或る旺んな氣合が感ぜられる。

句はさういふ勢ひを藏した、未だ發せざる滿を引いた弓矢のやうな氣持がよく現はれてゐる。鱒が蛇を呑んでゐる光景よりも、呑まんとする氣合を持つてゐる「鱒のおもひや」が、却つて未來の活劇を思はせる前奏的充實性を見せてゐる。

作者蕪村が、かういふ漲り溢れてゐる水に、勇躍してゐる鱒を目擊しての、寫生的作ではないであらうが、さりとて全然假空の想像に生れたものではない。鱒の特性を誰かゝら耳にしてそこに感興を持つた、其の結果の詠嘆とすれば、そも亦た一種の寫生的作である。

足弱のわたりて濁るはるの水

「足弱」は、この場合女の意味に使つてゐるのであらう。句の表面には現はれてゐないが、あしよわ」といふ言葉から、旅してゐる女をさすものゝやうである。

道の捗らない、悠長な女の旅する春の一光景として、さゝやかな水の濁る、其の渡る風情を想ひ浮べての作である。足で水の濁る場合など、普通にはたゞに見過ごすことが、旅する女を背景にして、始めて興を唆るのであるらしい。

この「春の水」は、前句のやうな旺んな氣合を藏してゐるのでなく、水ぬるむ、と隣同士のさゝやかな、美しい心持を誘ふ、他の一面の感じである。季感として、「春水」に略ぼかやうな二方面が、俳人に働きかけてゐたやうである。だから、蕪村の他の作「橋なくて日暮んとする春の水」「春の水背戸に田作らんとぞ思ふ」などは前者、「春水や四條五條の橋の下」「烏帽子著て誰やら渡る春の水」などは後者に屬する。

尤も劃然とした、さういふ區別が、どの句にもあるといふのではない。「春の水山なき國を流れけり」「畫舟に狂女乘せたり春の水」など、さる鮮明な季感に準據してゐるとは思はれない

ものもあるのである。

物種の袋ぬらしつ春のあめ

「物種」は畑に蒔く種物。春さき八十八夜前後は、苗代を作つたり、畑を耕して、新たに種蒔きをする時分である。

そぼ降る春の雨に、種物の袋を濡らした、といふだけであるが、何となく物の和らぎと、靜かな暖かさが匂つてゐる。必ずしも農家と限るにも及ぶまい——廣い宅地を持つ場合でもよい——、種蒔きをする時分の、事實有りさうな、畑に端近い家の一端までが、繪畫的に見えてゐるやうでもある。

「ぬれたり」と言へば、たゞ客觀的に、袋の濡れたことを報告するに止まるが、「ぬらしつ」と言つて、濡らすまじきものを濡らした、といふやうな、或る主觀を籠めてゐるのに注意したい。

瀧口に燈を呼聲や春の雨

「瀧口」は「たきぐち」、京都の皇居の中に、御溝水の落聚する處があつた。そこを瀧口と言ふ。

其の側に皇居守護の武士の詰所があつたので、「瀧口の武士」とも言ひ、又た單に「瀧口」と言つて、其の武士のことにも通ずるやうになつた。瀧口の武士は平生は二十名、藏人所に屬してゐた。

春雨の降る宮中の夜景、武士の詰所の瀧口に、早やく燈をもてと呼んでゐる、といふのである。只ならぬこと、たとへば怪しい物が見えたとか、曲者らしい影がした、といふ物騷な心持が、句の裏に潜んでゐる。

謠の「羅生門」に、頼光の四天王等が寄り合つて、化物退治の口論をし、遂に其の退治に出かける異樣な場面があるが、それもしと〳〵春雨の降つてゐる夜であつた。蕪村の著想は、その邊に胚胎してゐるかも知れぬ。

又た「源氏物語」の「夕顔」の卷に、夕顔の頓死する條があるが、其の前に女の靈が現はれて恨みを言ひながら、源氏の側に寢てゐた夕顔を起さうとするらしいのに驚いて「紙燭さして參れ」と源氏が燈を呼ぶと、やがて若き男と童が來る。其の若き男が、「瀧口なりければ、弓弦いとつきぐ〳〵しく打鳴らして」、源氏にも、内裏の瀧口を思ひ出されることになつてゐる。この句の出典の一つとして、考慮に入れるべきものである。

ぬなは生ふ池の水かさや春の雨

「ぬなは」は蓴菜、「池の水かさ」は「いけのみかさ」。蓴菜は「雅言集覽」にも「蘇敬本草註」を引て「自三四月、至七八月」とあり、又た「拾遺和歌集」の「年ごとに春はくれども池水におふるぬなははたえずぞありける」を引いてゐる。俳句では季題夏の部に入れてある。蓴菜の食味に適する時期であるからであらう。

俗に蓴菜は、千年經つた古い池で、深さが幾尋かに達するところでなければ生えないといふ。それらを考へれば、この句の景情は、何らの解説なく、眼前に彷彿するであらう。なぜ「蓴菜生ふる」と餘裕を持つて諷ひ出さなかつたかを疑問とする。

夢中吟

春雨やものの書ぬ身のあはれなる

「夢中吟」は、夢見てゐるうちに出來た句の意。

「ものかゝぬ身」は、無筆で字をかくことを知らない。

無筆のあはれさと春雨に何ら趣味上の繋がりはなさゝうであるが、この句を捨て得なかつた作者の心持は、春雨を想化し、エンファサイズした主觀味に、何となく無筆のあはれさと相關するものゝあるやに執著を持つたからであらう。

戀にやつれた、その思ひを筆にもし得ない卑しい若い女などを聯想に描くのは、讀者の自由である。

春雨やものがたりゆく蓑と傘

春雨の降る中を、蓑著た者と傘をさした者が、何か話しながら歩いてゐるの意。

「漁樵問答」といふ畫題があつて、多くの畫家が、古今に渡つていろ〳〵に描いてゐる。蕪村もよく其の畫題を繪にしてゐる。この句の畫面的な趣きは――繪にすれば、蓑と傘を著しく目につくやうに描いて、しかもすれ〴〵に何か物語りつゝ行くやうな風情――そんなところにヒントを得てゐるのでないだらうか。

「蓑と傘」と言ひ放ちながら、何ら妖怪味を感ぜしめないで、それが蓑著た、傘さした人間であることを直感せしめる、それが蕪村獨得の手腕であるとも見られる。

且つ、蓑と傘の物語りつゝゆく、話題の何であるかは不明であるとしても、略ぼ或る範圍に限られてゐる。平和な親しみを感ぜしめるのは、春雨の季感を、しかと把握してゐるからだ。

△ しはるさめや網が袂に小でうちん

「網」は、謡曲羅生門の影響で、渡邊綱と解する說もあるが、他に「一條もどり橋のもとに、柳風呂といふ娼家あり、ある夜太祇とゝもに此樓にのぼりて」と前置して「羽織著て網もきく夜や川千鳥」といふ句がある。同じ女と見る方が妥當であらう。

網といふ娼婦が、雨のかゝらぬやうにであらう、小提灯を袂のかげにしてゐた風情が、女らしく艶めいて見えたのである。

玉人の座右にひらくつばき哉

「玉人」は、鑛石の玉を磨いて、いろ〳〵に象づくる工人、「玉工」「玉師」又は「たまつくり」ともいふ。出雲の國に「玉造溫泉」がある。神代の昔、曲玉其の他を作る玉工が住んでゐたので、其の名があるといふ。

そこらに、磨り上げたもの、磨りかけたものなど、光澤のつや〳〵しい中に、鉢植か、又た一輪挿しか、椿の花が咲いてゐる、玉人らしい工房の一風景である。

椿の花の、堅く光澤を持つた感じから、かやうな空想の風景を生み出したものゝやうである。椿の花も亦た玉の一つであるやうな、感覺も手傳つてゐるのであらう。

初午やその家〳〵の袖だゝみ

「初午」は、舊二月最初の午の日、各地の稲荷祭當日。京都の附近では、伏見の稲荷神社が最も名高い。「その家〳〵」は「そのやそのや」と讀む。

「袖だゝみ」は、衣裳の本だゝみに對して、略だゝみの意。袖と袖を合せて、一所に全體を四つに、褄を合せて折りたゝむ法。

蕪村の他の句に「白道上人の、かりにやどりし給ひける、草屋を訪ひ侍りて、日くるゝまでものがたりしてかへるさに申侍る」と前書し、「蟬の寢る頃や衣の袖だゝみ」がある。外にも「掛香やわすれ顏なる袖だゝみ」がある。又た「江戸廣小路」に「花やあるきのふのかをる袖だゝみ、昌夏」がある。

この句は、矢張「初午や鳥羽四塚の雞の聲」と同じく、伏見稲荷へ參詣した時の、觸目の光景であらう。

初午當日、門前の家々は百穀の種――初午や物種うりに日のあたる、蕪村――、又た陶器などを賣つて甚だ賑ふことが、歳時記に書いてある。

外は雜踏してゐるが、それらの家々を見ると、脱ぎ放した衣などはなく、いづれも袖だゝみしてあつて、混雜に似合はず、整然と取りつくろつてある、といふのでないであらうか。普通袖疊みは、衣裳の略な疊み方ではあるが。

神に奉仕する氣分の、つゝましやかな點を感じてゐるのであらう。

かげろふや簣（アヒノ）に土をめづる人

「簣」は「あじか」、藁又た竹などにて編みたる袋やうの道具。

この句、蕪村の安永三年十二月廿六日――宛名不明なれど――の手紙の中にある。それには「陽炎や簣に土を愛す人」とある。

土をつめてゐる場合とも、又た土を一荷二荷取り寄せた場合とも、いづれにも解さる。要は土の色、其の味等に執着を持ちつゝ、いぢくつてゐる心持が主である。陽炎は其の添景。

農夫、栽培家も聯想に浮べば、又た陶土を試みる陶器師なども想像される。場所、場合等甚だ不明であるが、併し陽炎の立つ頃の、土に親しむ氣分には同感される。

芭蕉菴會

畑うつやうごかぬ雲もなくなりぬ

「芭蕉菴會」は、芭蕉菴の會の時作つた句といふだけの前置。安永五年五月、洛東一乘寺村金福寺の境内に、芭蕉が一時隱栖したといふ口碑によつて、蕪村一派が芭蕉庵を再興し、「寫經社」を結び、「寫經社集」を記念に作り、自ら「芭蕉庵再興記」を書いた。其の芭蕉庵は爾後、蕪村等の句作道場ともなつた。

芭蕉庵から洛東北の景を見下ろした作といふのではない。席上か兼題に「畑打」があつたので、かういふ句を作つたといふだけである。

畑打ちをする時分の一風景で、動くとも見えなかつた雲も、いつの間にか消えて無くなつたといふ意。

畑打つ者が、其の雲を見た場合か、畑打と其の雲とを第三者が見た場合か、いづれにも解されるやうである。たゞ、畑打つ氣分の——自ら打つとも、他人が打つとも——時の經つのも知らない悠久な感じが享け容れらるれば、それでよいのである。趣きは違ふが「動くとも見えで畑打つ男哉、去來」「畑打や道問ふ人も見えすなりぬ、蕪村」「畑打や耳うとき身の唯一人、蕪村」「耕や鳥さへ鳴かぬ山かげに、蕪村」など、いづれも同巧異曲と見るべきである。

はた打よこちの在所の鐘が鳴

「はた打よ」は、畑打に呼びかける言葉。「こち」は「こちとら」など、いふ土語的な一人稱の略語。

碎いて言へば、オ、畑打つてゐる何兵衛よ、こちとらの在所の——お寺の——鐘が鳴つてるぞよ、と言つた心持。句面には現はれてゐないが、この鐘は夕暮の時を撞いてゐるので、日暮の鐘が鳴るのも知らぬげに、畑打をしてゐる、矢張悠長感を諷つたつもりであらう。

用語を下卑た、百姓らしく使つたのが、さまで破綻を見せてゐないところに、此の作者の手腕を見るべきであらうか。

柴刈に砦を出るや雉の聲

「砦」は「とりで」、領地を守る爲め、領境附近に設けた、簡單な小城。

砦を守る番卒どもが、薪炊の爲めの柴を刈りに砦を出る、そこらに雉が鳴いてゐる、客觀的光景。戰禍に遠ざかつた、平和なノンビリした、邊境の感じがよく出てゐる。太平記などにありさうな一節、又た繪にもかけさうな場面である。

元祿頃までは、雉といふ題材を概ね主觀的に取り扱つて、「燒野の雉子夜の鶴」又た「蛇食ふときけば恐ろし」と言つたやうな、實感を離れた句が多かつたやうだ。それが蕪村に至つて、さういふ假想を脱し、實在の雉を景物化する一轉機を見たと言つていゝであらう。しかも蕪村は其の一轉機を劃した上に、何人も企て及ばないやうな詩境を提示して、内容表現の完成を見せてゐる。

この外「鶏山へ通ふ大工やきじの聲」「むくと起きて雉追ふ犬や寶寺」「雉鳴や坂を下りのうまやどり」「雉啼やお里御坊のちさ畑」「雉打て歸る家路の日は高し」など、いづれも同じ寫生的立場に在つての作がある。

それら悉く蕪村の實經驗であるや否や、多少の疑問はあるにしても、さながら實經驗者でなければ感受し得ない境地を彷彿せしめる。敏感と表現の老熟味を咀嚼すべきである。

きじ啼や草の武藏の八平氏

「八平氏」は「はッぺいし」平氏の末流で、坂東に割據した豪族、千葉、上總、三浦、土肥、秩父、大庭、梶原、長尾の八氏を坂東八平氏といふ。又た武藏八平氏といふもあつて、秩父、畠山、長野、江戸、澁谷、川越、豐島、稻毛の八氏をいふ。

武藏野は、草より出でゝ草に入る月、など言つて、渺茫たる曠原の感じ。「草の武藏」といふのも、そこから出てゐる。

この句は、前寫生的立場を延長して、時を超越した一風景を想像裏に描いてゐる。雉の鳴く聲がする、この草の武藏には豪族八平氏が各所に割據してゐる、と八平氏盛んなりし當時を現在と見ての作意である。武張つた、強い、表面は平靜であるやうで、底にもの〳〵しい緊張味の籠つてゐる主觀の客觀化である。

他の一解は、雉の啼くだけが現在で、武藏八平氏の昔を偲ぶ、純然たる懷古感であるといふのである。さうして寫生的立場と、全く趣きを異にした作とする。左樣に解されるにも限らない。いづれにしても、意表に言ひ捨てゝあるやうな「八平氏」と「雉なくや」が一つに融合して、そこに形成する一詩境を味讀せしめる點に變りはないやうである。

紅梅や比丘より劣る比丘尼寺

「比丘」は「びく」出家した男、「比丘尼」は出家した女。

徒然草第百六段に、高野の澄空上人京へ上る途にて、馬に乘りたる女と行き合ひ、上人の馬を堀へ落したとき、其の馬の口引ける男を罵る言葉に「こは稀有の狼藉かな、四部の弟子はよな、比丘より比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞は優婆夷に劣れり、かくのごときの優婆夷なんどの身にて、比丘を堀に蹴入れさせる……」とある。この成語をかりて、紅梅が、比丘に劣る比丘尼の其の寺に咲いてゐるの意。紅梅を除りいゝ花でないとケナす心持である。

比丘と比丘尼を比較する心持から、紅梅に對して白梅を呼び起し、時に白梅の方を贊してゐる意も汲みとれる。

徒然草の先例がなければ、殆んど不可解な句である。

紅梅の落花燃らむ馬の糞

「糞」、「ふん」か「くそ」か。いづれでもいゝであらう。

これも意表に出る句で、手法の大膽さが目につく。紅梅の落花が、馬の糞の上に散りかゝつてゐるのを「もゆらん」、即ち燃えるであらう、と強めて言つたのである。春も半ばになつて、少し汗ばむほの暖かい、町はづれの光景でもあらうか。併しこの句に、さういふ場處の限定は不要であつて、視覺臭覺の色彩化された、むつと鼻を打つやうな雰圍氣を感ずれば、それでいいのであらう。

「大津繪に糞落しゆく燕かな」「杜若へたりと蔦のたれてける」「いばりせし蒲團干したり須磨の里」「大とこの糞ひりおはす枯野かな」など、蕪村は他にも、人の意表に出る作をしてゐる。幾分人を驚かす手段を加味してゐたかも知れぬが、それがたゞ鬼面人を嚇す內容空虛に終つてゐない、即ち手段の爲めに藝術離れする――多くの俳人の陷つてゐる宿弊――イヤな陋習を脫してゐるのに敬服せざるを得ない。

春の海終日のたり〳〵哉

「終日」「ひねもす」。「のたり」は「のたれ死に」などいふ「のたれ」と同義語。這ひまはることを「のたる」ともいふ。

蕪村の句としては可なり初期の作。一日のたり〳〵と、だるさうに、物うげに波打つて居るの意。

人口に膾炙するといふか、蕪村集中第一に上げらるべき、有名な作である。

が、蕪村の句としては、客觀化されるものゝ稀薄な、抽象觀念に終始してゐるのみならず、「のたり〳〵哉」で、春の海らしい、其の特性を抽出したと言つた機智――手柄――の方が目につく。そこが大衆にうける所以でないであらうか。

飛かはすやたけごゝろや親雀

「やたけ心」「俚諺集覽」「和訓栞」など、一樣に「彌猛(たけ)にはやる心」と解してゐる。

親雀が、親心から子雀の爲めに、やたけに心はやりて飛びかはしてゐる意。「とびかはす」か

ら矢竹の矢、又た竹に雀の俗諺から「やたけ」と言葉に因緣を持たせる用意があつたわけではないであらう。

「やたけ心」で、切なる親心を一層强めるつもりであつたかも知れぬが、其の成語が、こゝでは巧みに形容した手段的な華やかさを持つて、却つて親心を玩弄視したやうな、餘裕を感ぜしめるやうである。切實に迫るものがなくて、巧みに詠みこなしてゐると、樂に讀過されるのは其の爲めでないかと思ふ。

芭蕉や一茶の句にはもつと人情に訴へるものがある。蕪村はむしろ其の人情——コンモン・ヒューマニティ——に訴へることを、なるべく避けようとしたやうであるから、さういふ氣持が、こゝに反映してゐるのかも知れぬ。

つばくらや水田の風に吹れ貌

「吹れ貌」「見しり顏」「訪はれ顏」など、蕪村はよく用ひてゐる。「吹かれてゐたさうな顏」の意。もつと立ち入つて言へば「吹かれてゐるのが心持よさゝうな顏」であらう。

燕が水田の側に下りて、其の田を渡る風に、吹かれてゐたいやうな顏してゐるの意。

燕の啼きごゑを、或る地方では「土食て虫くてロチ——ぶい——澁い——」といふ位、燕の習性からいふと、巣を作る前後は、終日營々として飛びまはりながら、時にはよく水田の畔などに下りてゐる。まづ一休みと言つた恰好を、「吹れ顏」と言つたものであらう。急がしげにアクセクして泥を運ぶ習性を知らなければ、この句の細かい情意はわからない。燕に對して、或る憐みを感じてゐるのである。

燕啼て夜蛇を打つ小家哉

「つばめないて、よる、へびをうつ、こいへかな」と讀む。

農家でなくとも、古い家にはよく蛇が住んでゐる。燕の產卵期など、其の卵を奪ひに蛇が現はれ、燕はけたゝましく啼き騷いで、蛇と鬪ふことも往々にしてあると聞く。

さういふ事實を知つて、この句を讀むと、燕を扶けて其の蛇を打ち殺したことまで、僅かに十二字で表現してゐる、其の冴えに驚歎される。

複雜な事件を、餘りに簡素に言ひ了せたので、其のあとをつけるに困つた、已むなく「小家哉」と、蛇足のやうなものを添へたらしく思はれる。この場合、それが小さい家であらうと、

大きい家であらうと、この活事實の上に、何らの興趣をも添へないからである。

が、一句を讀み下す音調の上に、「小家かな」が、この全興趣を殺ぐ贅物とは感ぜられない。穿鑿をすれば、叙法に無理があるやうであるが、人間の尾脙骨のやうに、有つて害なき餘剰感である。繪で言へば、無駄な刷毛ついでの一線、却つて餘裕を見せる類であらう。

かういふ活事實をいくら精細に叙し得ても、たゞ事實を叙したのみで、一句の持つ情緒的感味は稀薄である、卽ち句意は淺い、と言ふやうな說が、芭蕉の句などに對比して、往々說かれてゐる。固よりこの句に、人間の弱さや、人生の淋しさなどに訴へるもの、卽ち人情的に味はせるものは、殆んど無いと言つていゝ。この句は、何もさういふ狙ひを持つてゐるものではない。人生には樣々な生活があり、運動があり、意思があり、感情がある。弱々しく、淋しがつてゐるばかりが、人生の全部ではない。思ひきつて笑ひたい時もあり、死を賭して戀する時もある。發句となると、とかく人生の淋しい、人間の弱々しい、涙ぽい、憂き世をあきらめる、行ひすましてゐる、と言つたマンネリズムに落ちてゐる、それが型通りであるのに反感を持つ者は、もつと廣く人生の諸相を見よ、と言ひたくなる。蕪村は其の點に於て、マンネリズムに好感を持つ人々には、人生を淺く見てゐるといふことになる。寧ぞ知らん、彼はもつと廣い人

生に活眼を開いてゐるのである。弱々しい人情味を蹴つてゐるのである。この燕の句など、明らかにマンネリズム人情への挑戰であると言つていゝのである。單なる事實の報告ではない。この句に包含されてゐるものは、生活諸相中の或る葛藤である、葛藤を經て後の平穩感である。葛藤を逃避しないで、それに直面しつゝ、人生の活相に凝視を向けてゐる、所謂俳人らしからざる態度の所產である。

人生を狹く、手近く、わかり易く見ようとする、センチメンタル患者には、スポーツに勇躍する壯者の心理は會得出來ないであらう。

(7)

日は日くれよ夜は夜明けよと啼蛙

疊字的調子の勝つた句であるが、それが文字の響きのみにとゞまらないで、蛙といふ一自然の持つ特性的興趣の中核に觸るゝものがある。

蛙鳴蟬噪などゝいふ概念的觀念でなく、蛙の聲を、これほど內容づけた、意味づけた作が他に有り得るであらうか。

畫にしては、鳥羽僧正の動物畫卷の持つ內容も、恐らくこの句ほど肯綮に觸れてゐないとも

見られる。

「月に聞て蛙ながむる田面かな」「閑に坐して遠き蛙をきく夜哉」「連歌してもどる夜鳥羽の蛙かな」等の蛙を春の一音樂として聞く程度の句なら、さまで珍らしとしない。「苗代の色紙に遊ぶ蛙かな」は見立ての技巧が勝つてゐる。「獨鈷鎌首水掛け論の蛙かな」は、「井蛙抄」の故事をかりて、そを活かして使つてゐる點は認められるであらうが、技巧が外的に流れ過ぎてゐる瑕疵を否定出來ないやうである。

うつゝなきつまみごゝろの胡蝶哉

眞に一指頭の感味だ。女性的な指さきで、絹糸をいぢるやうな、纖細な感覺だ。

「うつゝなき」は現でない夢のやうの意であらうが、この場合では、弱々した蝶の羽――細かい紛のやうなものゝ附く――の指頭感で、つまんでゐるに堪へない心持も含まれてゐるやうである。

こんな細かい感覺をも忘れてゐない蕪村である。これが單なる指頭の感覺のみに了らないで底には哀憐の感情が流れてゐる。官能を通して情緒が滲んでゐる。さまで推稱に値する作とも

思はないが、蕪村の詩情の一面を窺ひ得るものとして、集中特異性を持つ一例である。

つゝじ野やあらぬところに麥畠

「あらぬところ」の意。平たく言へば、思ひもつかないところ。

躑躅は痩せ地に多いといふ。つゝじ野といふやうに、或る廣さを持つてつゝじの咲いてゐる野づらは、開墾に適しない荒蕪地でもあらう。ところが、思ひもつかず、麥畠があるのに、聊か驚いて眺めねばならなかつた。たゞそれだけのことであるが、他には色彩感から來る――つゝじの赤がゝつたのと、麥の青々したのと――視覺の激變的な驚きも含まれてゐるであらう。

純寫生の作と思はれる。直接經驗からでなければ、假想的には、かやうに、何の情味もなげに言ひ放されないであらう。「つゝじ咲いて片山里の飯白し」などに比して、其の差が判然するであらう。「飯白し」は色彩感を主としてゐるが、多分に直接經驗でない假想味が匂つてゐる。

岩に腰我賴光のつゝじ哉

前句と反對に、甚だしく浪漫的な境地である。賴光は大江山の酒顚童子を退治した大將であ

るが、其の勇姿を想ひ浮べて、我れ賴光の如く、このつゝじを領して、岩に腰かけたと、つゝじを背景にしての——昂然と岩に腰かけた——大將ぶりを謳つたのである。

「賴光の」の「の」が一句の魂で、それが爲めに句全體が弦を張つたやうに引き緊つてゐる。之を「賴光と」など言へば、意味は通じ易くなるかも知れぬが、音律美は滅却してしまふ。

蕪村は丹後に永く滯留して、大江山にも旦暮親しんでゐた。時には、其の鬼の窟といふに登つたかも知れぬ。其の時の實感から出感して、かやうな浪漫的境地を產んだものと思はれる。

丁度つゝじの盛りで、燃えるやうにあたりを染めてゐる。有り合ふ岩に腰かけた氣持が、酒顚童子を退治した賴光の風丰を想起せしめたのであらう。

作者自らの所作を言つたとも、亦た他の誰かの所作を見て言つたとも、いづれにしても差支はないであらう。

箱を出る顏わすれめや雛二對

「わすれめや」は、「忘れるどころか、よく覺えてゐる」の意。

二對の雛——三月の節句に飾る——に對して、親しみと懷かしみを持つた句意。

「箱を出る。」が苦心の存する所であらう。「箱を出す。」では、ぎごちない。事實の働きは「出す」のであるが、そこに現はれる感じを主にすれば「出る」でなければならない。雛を持つ手の働きなど忘却してしまつて、其の懷かしい顏に打たれてゐる。其の感じが「出る」なのである。

「雛二對」の二對も、どうでも一對でも三對でもよさゝうであるが、音調の上ばかりでなく、數の上からも、この場合に適切なやうである。

たらちねのつまゝずありや雛の鼻

この雛の鼻は、少々平べたく仰向いてゐたのであらう。お前の鼻は、兩親がつまんでくれなかつたのか、と氣輕にからかひながら、言ひ知れぬ愛を感じてゐるのである。

言ふまでもなく、幼ない頃、少し平べたい鼻を絕えずつまんでやると、いつか鼻高な、みめよい顏になるといふ、俗諺の親心が背景になつてゐる。

おくのといふ一人娘に愛著を感じてゐた蕪村の親心が、この雛の句によつても想察されるやうである。

商人を吼る犬ありもゝの花

「商人」は「あきうど」。

物賣りに來た商人——別に怪しい者でもない、行商人らしい——を犬が吼える、そこらに桃の花が咲いてゐる、郊外らしい一風景。

屋内のことであるか、屋外の場合であるか不明。たゞ、見馴れない姿の者は、犬が咎める、と言つた普通に有り勝ちな事實から、郊外らしい閑居の一場面が聯想される。——行商人でさへ稀に來るやうな——。

「吼る犬あり」の語勢から言つて、犬の聲ばかりきこえて、其の姿は目に入らぬ思ひがある。では、垣や塀もある屋内の場合か。ともかく、商人を吼える犬の聲を中心にして、春日遲々たる趣きが、ほんのり感ぜらる。支那高啓の詩に「行人入村花宛々、吠犬隔水樹深々」とある、相似た感じである。

几巾きのふの空のありどころ

「几巾」は「いかのぼり」。支那にない國字の「凧」がいつ頃からか書れてゐる。

きのふもあがつてゐた空に、けふも亦た凧が上つてゐる、とぢつとそれを見上げてゐる心持。「きのふの空」といふので、凧よりも、ひろ〳〵とした大きな空を感ずる心持が強い。そこに或る悠久な、永遠を感ずるやうな、捕捉し難い茫漠たる氣分が漂うてゐる。

「蕪村句集講義」に、元祿調に比して、天明調の特色を代表してゐるとの子規說がある。

曉臺が伏水嵯峨に遊べるに伴ひて

夜桃林を出てあかつき嵯峨の櫻人

「曉臺」は名古屋の俳人、中興五傑の一人。

「よるたうりんをいでゝ、あかつきさがのさくらびと」と讀みたい。「たうりんをでゝ」では前後がそぐはない氣がする。

「伏水」は「ふしみ」で桃の名所。

伏見の桃林を、夜になつて出たが、けさは又た嵯峨の花見をしてゐる我らだ、の意。

定型律など、頭から無視してかゝつた、醉餘の放吟とも思はれる語勢が、如何にも愉快で堪

らないと言つた、興に乘じた心の昂ぶりを偲ばしめる。

伏見でどんな遊びをしたか、又た其の夜半はどこにゐたか、そんなことは全く忘れてしまつた興味以外の雜事で、夜桃林を出たのと、曉嵯峨の櫻に對してゐる、それが引きつゞいた一つの出來事として、感興の主題になつてゐるのである。

宗因の檀林派時代、又た芭蕉の「虛栗」時代の、空虛な漢詩模倣とは全く別に、詩情の一貫した脈搏が、人を鼓舞する程度に、高鳴つてゐる。蕪村の癖、いゝ意味に於ての感懷が、こゝに爆發してゐるかとも思はれる。

併し、强ひて難を言へば、自己陶醉と言つた興に乘じ過ぎた嫌ひなきにしもあらずである。外形が破天荒の華やかさを持つだけ、內に籠る情緒を薄めるからである。

この外「月光西にわたれば花影東に步むかな」があり、「嵯峨に歸る人はいづくの花に暮れし」があり、甚だしいのになると、「送道立子東行」と前書して「贈るに湖の月をもてす答ふるに富士の雪を以てせよ」といふのもある。有意識か無意識か、ともすれば定型を逸脫せんとする、心のはづみは、蕪村のどこかに潛在してゐたやうである。

風入馬蹄輕

木の下が蹄のかぜや散さくら

「風入馬蹄輕」は「唐詩選」にある杜甫の五言律詩、「扇兵曹胡馬」と題して「胡馬大宛名、鋒稜瘦骨成、竹批双耳峻、風入四蹄輕、所レ向無空濶、眞堪レ託死生、驍騰有レ如レ此、萬里可横行」で、「風入馬蹄」は「風入四蹄」の誤りである。杜甫のこの詩は、胡馬の英姿をたたへて、死生を託し、萬里をも行くべしと絶讃したのである。それに因んで、日本の馬を想起し、源平盛衰記にある名馬「木下」を讃美したのである。「仲綱（源仲綱）不レ及レ力、父の命に隨て、木下を右大將の許へ遣てけり、聞に合て、實に能き馬なりければ、舍人あまた付て內厩に祕藏して立かひけり、日數へて後……木下丸返し玉はるべき由申たり、右大將此馬をば惜みて、其代と覺しくてナンチャウと云馬をたびたりけり、極めて白き馬也ければナンチャウとは呼ばれけり、最も實に太く逞しくして能馬なりけれど、木下には及び付べき馬にあらず……」とある。

木の下が一たび驅け出せば、其の颯爽たる蹄の勢ひに櫻も散るの意。源義家の勿來關の故事なども手傳つて、其の散る花が、又た馬を美しく見せてゐる心持をも含めてゐる。芭蕉の「木

の下に汁も餘も櫻かな」もあるので、馬の名を「木下」と言ふに興を催したのであらう。

出典の多い句は、どうも獨立の句としての價値は低いやうで、この句もたゞそれだけ、味ひに乏しい。たゞ、この「木の下」を「木下藤吉郎」などに附會する說などがあるから、其の誤りを正す爲めに、こゝに抽出した。

尙ほ蕪村には、別にこの句の初案らしい「馬の名も木の下影やちる櫻」がある。

吉野

花に遠く櫻に近しよしの川

「吉野」は大和の吉野、花の名所。

「よしの川」は吉野の麓を流れてゐる川。

「花」と「櫻」は同じものであるが、時によつて感じは違ふ。蕪村はそこに明らかな相違を感じて、花には遠いが櫻には近いよしの川である、と言つた。

大方、吉野の麓にある「上市」といふ町あたりの作であらう。上市は吉野川に瀕し、さうして吉野山に對してゐる。吉野の方には、群がる花が見えて、川べりには少しの櫻しか無い。この

の句のやうに言はれゝば、成程さういふ感じもするのである。言葉を器用に扱つたのが關の山で、櫻に對し、吉野に對する情味は薄い。別に「ちるは櫻落るは花の夕かな」といふ句もある。

蕪村の吉野に遊んだのは、安永五六年頃で、判然とした記錄はないのであるが、當日非常な風雨に會つて難澁したやうな手紙が遺つてゐる。さうして「雲を呑で花を吐くなるよしの山」といふ句も、其の記念として作つてゐる。

「錢買て入るやよしのゝ山ざくら」「みよし野の近道寒し山櫻」など、吉野の句はあるが、場所負けとでもいふか、左程推稱に足るものがない。

花の御能過て夜を泣く涙花人

「はなのおのう、すぎてよをなく、なにはびと」と讀む。

「花の御能」は櫻時分の能樂で、大方勸進能のことをいふのであらう。昔の能樂は大體武家の私邸で催され、一般には公開しなかつた。たゞ年に一二度、勸進能と稱へて、一般大衆の觀覽を許した。ともかく勸進能と言へば、下々の町人など、其の日を待ちかね、犇めき合つて拜觀したものである。「花の御能」は、例の俳句的節略法で、花又は櫻に關したお能といふのではない。

櫻咲く時分のお能を見てしまつた後、其の夜を浪花人は泣いてゐる、の意。

大阪の人が、お能を拜觀した夜、何を感じて泣くのか、この句の表では判然しない。何か前置でもほしい句である。

察するに、大阪は豐臣秀吉のことを、豐公さん又た太閤さんとも言つて、特別の親しみを持つてゐる。太閤さんは、又た能樂の愛好者で、自ら舞臺に立つたとも言はれる。自然、能を見れば、太閤さんを偲び、太閤さんを思へば、其の三代の短かい榮華を悲しむ氣持になる、といふやうないきさつから、大阪人のさういふ心持を思ひやつたのであらう。

可なり複雜な內容を、こゝまで言ひ了せた技倆は認められるが、尙ほ多少の無理があるやうである。

「夜嵐や太閤樣の櫻狩、園女」と言つた先例が、不圖想ひ出された。

阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉

「阿古久曾」「あこくそ」は、紀貫之の幼名との說もあるが、身分のいゝ小童を親しんでいつたと解していゝであらう。

「さしぬき」「指貫」は、裾をふくらまし、紐にて締めるやうにした袴。

謠曲「鞍馬天狗」に因み、和尙と牛若らしい稚兒姿の小童を描き、この句を題して蕪村の小品がある。句も亦た美しく畫面的である。

蕪村には尙ほ「阿古久曾を夢の行衞や竹婦人」といふ句もある。

芭蕉の「阿古久曾の心はしらず梅の花」は、貫之の「人はいさ心も知らず古里の花ぞ昔の香に匂ひける」に因んでゐるので、貫之の事に解される。

花に來て花にいねぶるいとま哉

花見に來てゐながら、花を見ようともしないで、居眠りしてゐる、の意。

酒にでも醉うて眠てゐるのか、又た何となくいゝ心持になつて、うと〳〵してゐるのか、其の邊は不明。

普通ならば、花見にうかれて、けふ一日を如何に面白く遊ばうと、立騷ぐならひであるに、我不關焉と居眠つてゐる、物にかゝはらない悠然味がある。

作者自らのことでも、第三者として見た場合でも差支ないであらう。

「眠たさの花は御室の花よりぞ」「うたゝねのさむれば春の日くれたり」「寢た人に眠る人あり春の暮」、趣はそれ〴〵違ふが、三句とも蕪村の作。

一片花飛減却春

さくら狩美人の腹や減却す

「一片花飛」は杜甫晩年の詩句。花びらが一つ散つても、それだけ春を減らすの意を、轉じて腹の減る事に――思ひもつかぬことに――飛躍した。覺えず破顏一笑せしめる句である。

大方蕪村の馴染の妓、小糸等と嵐山にでも遊んだ時、彼ら美人連、おなかが空いた、などゝ言つた實情から生れたのであらう。

「琴心挑美人」と題した「妹が垣根三味線草の花咲きぬ」も亦た略ぼ相似た轉和吟。「漢書」といふ書に「司馬相如傳」として「卓王孫有二文君一、新寡、好レ音、故相如謬與令二相重一而以三琴心一挑レ之」とある。文君を妹に、琴心を三味線草に轉ずる所眞に鮮やかといふべしである。

△ にほひある衣も疊まず春の暮

衣裳に香を焚き込んだ事實もあるが、又た仕立おろしの晴著には、それらしいほのかな匂ひもする。ともかく平常著でなく、餘所行きの、晴れ〴〵しい衣裳が「にほひある衣」である。それが脫ぎ放しにつぐねてある。美しい自墮落、ものうさと言つた感じが、夕ぐれの春らしいところであらう。

殿上人の場合か、平民の場合か、一人の衣裳か、二三人の衣裳か、そんなことは、この句の關する所ではない。

「誰がためのひくき枕ぞはるのくれ」「春の夕たえなんとする香をつぐ」「奇楠くさき人の假寢や朧月」など皆相似た境地である。

◎ 苗代や鞍馬の櫻ちりにけり

畑打――耕す――の句は多いが、苗代の句は案外に少ない。

「苗代や」は目に近い景で、「鞍馬の櫻ちりにけり」は目に遠い景。苗代もそろ〴〵芽切つて來た、と先づ苗代に目をつけ、改めて目を遠方に向けて、鞍馬山の櫻も、もう散つてしまつた、といふやうな場合であるが、その苗代には、どこの花ともなく――無論鞍馬の櫻ではない――

花びらのいくつかが、浮き漂つてゐると見たい。苗代の水に落花の漂つてゐるのから、鞍馬の櫻ももう散つた、と目を遠くへ向ける方が自然であるやうに思はれる。

この場合、「や」「けり」の二段切が、さうなければならない緊密さを持つてゐる。二段切のお手本のやうな句である。

この外特殊な二段切に「蝙蝠や佐田にとまれと夕かな」「卯の花や蕗の廣葉にこぼれけり」「短夜や地藏を切てもどりけり」「よき人や醴三度かへにけり」「實櫻や立寄る僧もなかりけり」「初雪や上京は人のよかりけり」「むさし野や笠に音聞あられかな」「寒菊や愛すともなき垣根かな」「あふみのや麻刈る雨の晴間哉」「冷汁やあるじの僧のゆかしさは」「人知らじ木槿落つくすゆふべ哉」「燕や去年も來しと語るかも」「木曾山や萩折る人も見えぬ哉」「白梅や忘れ花にも似たる哉」など初案と見ゆるものがある。いづれも句集には省かれてゐる。

甲斐がねに雲こそかゝれ梨の花

「甲斐がね」「甲斐が峯」は富士山であるとのことであるが、「雲こそかゝれ」は「雲のかゝるや」とか「雲かゝり行く」などいふより、語勢が華やかで、視覺に訴へる實境が薄弱である。

で、之を一幅の畫面のやうな景色と見ないで、梨の花の白々と咲いてゐる、其の形容と見る說も成立するわけである。

形容のしかたは違ふが、「うつむけに春うちあけて藤の花」も、藤のだらりと垂れて咲く姿の主觀的形容である。梨の方は、白々としてゐるといふ主觀を客觀化した形容と見るのである。

形容の客觀化、それは稀れに見る手法として珍重したい。

人なき日藤に培ふ法師かな

「人なき日」は、人の來ない日で、誰訪ふものもない、ひまな日の意。

ひまな日、寺の住持が、藤を培ふ、卽ち根元に鍬づかひでもしてゐるのである。

「和漢三才圖繪」には、冬の中に、酒の糟や、米のとぎ汁などを根に培へば、よく茂つてい、花をつけるとある。こゝの培ふは、さういふ專門的な培養でなく、鍬ついでと言つた氣持で、藤の根元で働いてゐる。勿論もう花も咲いてゐるのであるから、其の根ならし、土でも外から運んで來る位の所作と見るべきであらう。

今更ら培ふ必要もなさゝうなものに關り合つてゐるこの法師の、さしづめ外にこれといふ用

もないらしい閑靜な樣が思ひやられる。若し牡丹に培ふとか、瓜に培ふとかいふのであれば、もつと其の生活狀態がはつきりする。思ひもつかぬ藤に培ふ坊さんを、蕪村も變つた佗しいものに思ひなしたのであらう。

春　景

菜の花や月は東に日は西に

「續明鴉」にこの句を發句とした、樗良、几董三吟の未完歌仙が載つてゐるが、それには前置「春興」とある。

几董の「宿の日記」——安永三年三月廿三日——には「續明鴉」に割愛された殘部が明記されて歌仙滿尾してゐる。

大阪灣に面する山城攝津につゞく平野には、昔菜の花が多く、一望際涯なく、黃氈を敷いてゐたのであらう。蕪村の他の句に「菜の花や摩耶を下れば日の暮るゝ」といふのもある。

春の日永時分、日は西に入りかけてゐる、と見ると五六月頃の宵月が、もうほの白う東の空にかゝつてゐる。可なり空間の廣々とした、無風狀帶の豐かな春らしい晩景でもある。

この立句に對する樗良の脇が、「山もと遠く鶯かすみ行く」とある。兩々合せて、一幅の好畫圖である。

菜の花や笋見ゆる小風呂敷

「笋」は「竹の子」。小風呂敷に包み餘つた笋が見えてゐる、そこらに菜の花が咲いてゐる。「笋見ゆる小風呂敷」は、靜物の畫のやうである。「菜の花や」も其の添景に過ぎない。之を活風景として、字面にない人物を點描して來るのはどうか。「春雨や物語りゆく蓑と傘」の手法とは全く違つてゐる。「物語りゆく」の動詞によつて、自ら人物が描出されるのである。

農家なり、休み茶屋あたりの、緣側又は腰掛などの靜物的點景である、と見られても致方のない語勢である。

如何に俳句的簡約の約束があるとは言へ、この句から、野の道を歩いてゐる人物の風彩まで聯想するのは、餘りに約束耽溺の嫌ひがあるやうである。

菜の花や鯨もよらず海暮ぬ

「鯨もよらず」は、鯨も近寄らない、鯨の姿も見えないの意。其のうらには、寄るべき鯨であることが意味されてゐる。

「鯛もよらない」とか「鰯もよらない」とかいふより、茫漠とした、又た時間も永い、廣い海面が、鯨といふ性質から聯想されて來る。この句の眼目はそこにある。

平生鯨などに緣の遠い海でも、どうかすると意外に近づいて來ることがある。漁村の驚異である。さういふ場合とも、又た天の橋立の内灣に、橋立の下を潜らなければ這入ることの出來ない鯨を生捕つたといふ傳說のあるに因んで、假空に此頃は鯨もよらずと言つても、場合はいろ〳〵に想像される。

春夜廬會

爐塞で、南阮の風呂に入る身かな

「春夜廬」は几董の別號を「春夜櫻」と言つたので、几董宅で作つた句、といふだけの意。

「爐塞で」は「ろふさいで」、茶の湯の爐を塞ぐこと。寒い間は爐に釜をかけるが、春暖かくなれば、爐を塞いで用ひない。

「南阮」は、「晉書」の「阮咸傳」に、「咸字仲容、與レ籍居二道南一、諸阮居二道北一、北阮富、而曰、未レ能レ免レ俗、聯復爾耳」とある故事を出典としてゐる。

爐を塞いで、氣分の變り目を風呂にはいつた、それを南阮の風呂に入つたと洒落て言つたのである。

「入る身かな」は、自分を省みていふ言葉で、其の裏面に、北阮の錦綺粲目の富は敢て望まない、と言つた貧を樂む心持を諷つてゐるのである。

炉ふさぎや床は維摩に掛替る

「床」はこの場合「床の間」。

「維摩」は「ゆゐま」。釋尊と同時代の人、病と稱して一室に籠り、默然無言の行をした、佛聖中でも、餘程超脫した長老であつた。

「掛替る」「かけかはる」「かけかへる」「かけかふる」の三つの讀み方がある。いづれとも定め難い。

爐を塞いだのと同時に、床の掛物を維摩の畫像に掛け替へた、といふのである。

春になつて心は賑やかである筈なのだが、爐を塞いだ心持は、永く親しんだものに別れる多少の哀愁――淋しさ――がある。其の心持に合するやう、掛物を維摩像にしたのである。

維摩の默然無言の行を、爐を塞ぐといふに利かせた技巧、そこらが作者の狙ひ所であるかも知れない。

尙ほ「桃李」といふ几董との二吟連句の中に、「文机の花打拂ふ維摩經」といふ蕪村の附句もある。

行春や撰者をうらむ哥の主

「哥」は「歌」の略字。

春も末になつて、近く夏にならうとする、時候の變化已むを得ないが、もつと春であつてほしいやうな、春の逝くのを惜む心持と、それに、日の永さに幾分物うさ、ものゝだれたやうな感じが一所になつて、「行く春」といふ季題感を構成してゐる。

どうしてあの得意な歌をとつてくれなかつたか、と撰者を恨んでゐる歌の作者の感懷は、行く春の季題感にうつてつけな、晩春情調の一人物なのである。戀に破れた者、樂器に親しむ者、行旅に飽いた者など、行春圏内の人物は數ふるに遑ないであらうが、何人もの想像に上りさうもない、落選作者を點出したところ、作意の豐富さを示して餘りある。

尤も、平忠度が「千載集」に、自分の作歌を、戰場に赴く途中、態々踵をかへしてまで依頼したに關らず、「不知讀人」として載せられたのを恨んだ有名な故事がある。それが一つの出典として考へられるが、句は强ちそれに拘泥はしてゐない。

夏之部

絹著せぬ家中ゆゝしき更衣

「家中」「かちう」は「俚諺集覽」に「大名諸侯の藩中家人の總名」とある。

「ゆゝしき」は、場合によつて「いま〳〵し」「いみじ」「はなはだし」「たけし」「をゝし」などいろ〳〵の意味に使はれる。こゝでは、凛とした氣分のいみじき樣をいふ。

綿入から袷に著替る時、又た改めて、絹物御法度の藩中のゆゝしき樣を感ずるのである。衣至骨袖至腕壯士の樣も目にちらつくやうである。舊藩時代の儉約令は、隨分苛酷と思はるゝまで、嚴守されたものである。

「ゆゝしき」とせず「ゆゝしや」と普通ならいふべき場合である。が、作者は、「や」といふより「き」と留めた方に、語勢の强みを感じたのであらう。「や」の軟音より「き」の硬音が、「ゆゝし」といふ軟音つゞきにふさはしく思つたのであらう。

眺望

更衣野路の人はつかに白し

「眺望」は讀んで字の如く、遠くを眺め見る意。

「野路の人」「のぢのひと」、野の道を行く人。

「はつかに」「わづかに」の古言。

衣がへ時分であるから、野道を行く人の、ちらと白いのも目につき易いのである。この「白し」は、何が白く目に映ずるのか、こゝでは問ふ必要はないであらう。目に白いと感ずることが、更衣の季感に融合する第一要素である。

或は頰被りのやうなものであるか、婆さんの白い腰卷の端であるか、それらは讀者任せでいいのである。

芭蕉の「海暮れて鴨の聲ほのかに白し」が、句作手段としての先例になつてゐるであらう。かやうな破調的の句は「更衣母なん藤原氏なりけり」もある。

蕪村の草稿には「わづかに」とある。

たのもしき矢數の主の袷哉

「矢數」「やかず」、澤山の矢を射る競射の中でも、京都三十三間堂の大矢數が有名であつた。「翁草」といふ書にも、和佐大八といふ少壯射手の名譽な話が書れてゐる。

「矢數の主」は、其の競射をする選手。

袷姿の選手の樣子が、いかにも思ひ通りの數を射さうで、たのもしく力强いのである。

「少年の矢數問ひよる念者ぶり」「ほの〴〵と弼にあけゆく矢數かな」など、昔の一種のスポーツではあらうが、嚴肅勇壯の中に、物堅い哀れが籠つてゐる。この矢數の主の袷なども、眞に矢數の現場を知らない者には、當時の人の受けた感銘は覺り難いであらう。「たのもしき」の一語の力も、むしろ平凡化するに役立つものとしか享け容れないであらう。

因みに、「蕪村句集講義」に、この句を蕪村創始の體として、「たのもしき」の形容が「矢數の主の袷かな」の下十二字全體にかゝる、といふ虛子說が、いろ〳〵例を引いて述べてあるが聊か牽强の嫌ひがある。この句も「たのもしき」は「矢數の主」だけにかゝるので「袷」まではかゝらないと見て、何ら不都合はないやうである。

御手討の夫婦なりしを更衣

「御手討」「おてうち」。不義はお家の法度で、お手討になるべき二人が、祕かに許されて存命し、今は水入らずの女夫暮しをしてゐる、それが衣がへの時に、改めて昔を追懷する心持である。

かやうな、永い時間の經つた、複雜な事件を、かく安らかに十七字に纏め得た例は、他にないであらう、といふので、蕪村發見當時、殊に推稱喧傳されたものであつた。

小說的趣向では、この外に「打はたす梵倫連れ立つて夏野かな」「盜人の首領歌よむ今日の月」「追剝を弟子に剃りけり秋の旅」「子を捨てる藪さへなくて枯野かな」などがある。

しれるおうなのもとより、ふるきゝぬのわたぬきたるに、ふみ添ておくりければ

橘のかごとがましきあはせかな

「しれるおうな」は知つてゐる媼、卽ち老女。古い衣を、綿を拔いた袷にして、それに手紙をそへて送つて來たから、といふ前置。

「かごと」は託(かこ)つける意、かごとがましは外のことにかこつけて、言はでものことをいふ意。碎いて言へば、愚痴ッぽい、とでもいふ心。

お婆さんが念入りに細かく、何や彼やくだ〳〵しく書いて袷を呉れた、いかにもお婆さんらしい仕打ちだと思つて、其の袷にすが〳〵しい淡い哀れを感じてゐるのである。

「橘の」の「たちばな」は、「かごとがましき」の「か」即ち「香」の枕詞として置かれてゐる。「香」と「かごと」の掛け言葉である。橘といふ蜜柑に類した木の花の香りを賞翫して、昔から「橘の香」としての通語になつてゐる。橘は丁度夏の初めに花が咲くのである。

橘のにほへる香かもほとゝぎす啼く夜の雨にうつろひぬらん（萬葉集）

橘の香をなつかしみほとゝぎす花ちる里を尋ねてぞ訪ふ（源氏物語）

ことしより花咲きそむる橘のいかで昔の香に匂ふらん（新古今集）

など和歌の先例は多い。

お婆さんの愚痴も、橘のかごとがましと言へば、何となく上品な、聞き心地のわるくないものに思ひなされる。袷を通して、媼に對する情愛もほのめいてゐる。これも手際のいゝ、上品な酒落と言つていゝ。

かやうな掛言葉を、音調の上から利用した例は、更衣の中にも「更衣身にしら露のはじめ哉」「袷きて身は世にありのすさび哉」などがある。尤も掛言葉は、當時の文章にも韻文にも、ザラに流行した、器用を誇る手段でもあつた。

他に「蟲實のかごとがましき朝寢哉」といふのもある。

ほとゝぎす平安城を筋違ひに

「平安城」は、京都の古名。

時鳥が、京都の空を、すぢかひに啼き過ぎた、の意。

他に、この句の初案らしい「すぢかひに上ミ京過ぬほとゝぎす」がある。

二句を對照して、句勢の相違が著しく感ぜられる。

時鳥の特性を一層想化して、強く勢ひあらしめる爲めには、前句は遙かに後句に勝るものがある。一氣に息もつがせない。堂々とした語調でもある。「眞直ぐに」といふより「筋違ひに」の方が、場面の廣さでなく、飛ぶ勢ひを、一層如實にするやうである。

これを後句のやうに、先づ「すぢかひに」と言ひ出したのでは、何らの勢ひを生じない。そ

れに「上京」——京都は上ミ京、下モ京に分れてゐた——では、筋違ひの效果が十分でない。時鳥の季感を想化し、超現實感を與へる技巧はさる事ながら、多少手段的な、人の意表に出ようとする、心の構へが、句面に臭つてゐないにも限らない。

蕪村の長所を發揮した句で、同時に短所——其の弊——をも見せてゐるものでないであらうか。

子規、柩をつかむ、雲間より

「柩」は「ひつぎ」、屍を納めた棺桶。

これも極端に、時鳥を魔性にまで想化してゐる。

「柩をつかむ雲間より」は、羅生門の鬼が、斬られた腕を取り返しに來た、渡邊綱の故事を出典としてゐるのであらう。斬られた腕を、柩に翻案して、妖鬼が雲間からそれをつかむ、さういふ背景にもそぐふ鳥と見たのであらう。さう言へば、實際はともかく、浪漫的な想像を逞しうすれば、怪談的な一風景として、必ずしも度はづれた、無內容な假作でもないやうである。

「平安城を筋違ひに」の幾分現實らしい足場を持つた句よりも、現實を總て蹴つてしまつた、

かゝる飛躍に、却つて同感が持てるやうである。之を蕪村の空想から生れた小說の一シーンとして見れば、上田秋成の怪談文學の更に其の上を行くものであるやうな氣がする。若し蕪村に長い散文を書く筆があつたとすれば。

大德寺にて

時鳥、繪になけ東、四郎次郎

「大德寺」は、京都紫野の禪寺。

「四郎次郎」は、古法眼狩野元信の俗名。

夜明に東が白ろ〳〵を「四郎次郎」に掛けて言つたのである。

大德寺に、元信の筆と稱する襖でもあるのであらう。其の靈腕に成る時鳥なら、畫といへども鳴いてほしい、この東の白む夜明けに、といふ意。繪馬の馬がぬけ出した、といふやうな傳說に基いてゐる。

うまい掛言葉であらうと言つた手柄顏が目につくが、かくまで十七字を操る腕の冴えには驚かされる。たゞ、元信を尊崇する心持が稀薄で、俗名を興がつた、駄洒落を言つてゐるやうな

浮ついたものになつたのは已むを得ない。

「菅の風」といふ書には、この句の前書が「紫野に遊て、ひよ鳥の妙手を思ふ」とある。「ひよ鳥」は鵯で、大方其の啼き聲を、上手に眞似る者のゐたことを思ひ出したといふのであらう。——元信が鵯を描く名手であつたといふのではないであらう。——この前書きによると、鵯の啼き眞似から、畫中の時鳥の一聲に轉ずることになる。さればこの句の出來た心理的經過とでもいふものを考へると、其の方が幾分自然であるやに思はれる。

牡丹散て打かさなりぬ二三片

牡丹の花の散つた二ひら三ひらが、かさなり合つてゐる、觸目の光景。

「うちかさなりぬ」と重々しくいふところに、作者の感情が籠つてゐる。尤も句全體の調子も其の主感を扶けるものになつてゐる。若し之を「二三片かさなつてちる牡丹哉」とか「散る牡丹二ひら三ひらかさなりぬ」とか言つては、作者の感興は逃げてしまふ。事件は、たゞ牡丹の花が二三片かさなり合つて散つてゐるのみであるが、それが宇宙の秘密といふ程でなくとも、或る神秘性を以て、美しく重味のあるものに、作者に映じたのである。雲烟過眼視すれば、總ての自然の現象は、たゞ雜然たる物質の堆積に過ぎない。我が心に詩あつてこそ、自然はそれに伴奏するものであることを、この句など、如何にもうつてつけに教示してゐる。殊にそれが、花の王と言はるゝ牡丹である點、誰もが共鳴し得る有效條件を備へてゐると言つていゝであらう。

名匠の筆に成る靜物の繪で、二三片の花びらに、ぢいと天地の靜まる幽玄味と言つたものが籠つてゐる。

蕪村もやゝ得意の作であつたと見え、これを立句として、几董との兩吟「桃李」の連句を作つてゐる。「桃李」の兩吟歌仙が、約半年かゝつてやつと滿尾してゐるのを見ると、如何に苦辛に苦辛、經營に經營を重ねたものか、想像の外である。几董は、一字一涙として當時を追懷した文章を書いてゐる。それ程重視した歌仙の發句であるから、この句を選定した意思は、可なり强固な信念、自信を裏書きしてゐると見て差支ないであらう。

波翻舌本吐紅蓮
閻王の口や牡丹を吐んとす

「波翻舌本吐紅蓮」は「舌本を波翻して紅蓮を吐く」と讀むらしい。佛語であらうが、出所は

判明しない。舌本とは舌根と同義で、舌のこと。波翻は、波の如く翻へる、でこれも翻へる意。佛教の方では舌の長いのを尊んで、鼻をなめ、又た額に屆いたといふやうな例もある。舌を翻へして紅蓮を吐く、卽ち舌が紅蓮のやうだ、といふ意。

「閻王」は「閻魔大王」。

閻魔樣の畫像などを見ると、大抵大きな口を開いて、亡者を一喝してゐる。其の舌が紅蓮を吐くといふ所から、更らに形容をすゝめて、其の大きな口が、まさに牡丹を吐かんとしてゐるといふのである。

奇想天外から落ちるといふか、比喩もこゝまで徹底すれば、句の佳否など超越して、たゞ呆然、空を行く奔馬を見るやうに、遠くから眺めてゐねばならない。

比喩の妙味、形容の劃切、それは腕の冴えであるから、句の內容には深みが足らない。併し其の比喩を、こゝまで力强く表現する、この句の措字には敬意を拂はねばならぬ。

一體蕪村以前の、どの時代でも、牡丹を素材としたものは、富貴草とか、ふかみ草とか言つて、むしろ芽出度い、優にやさしい花とばかり見てゐたやうである。芭蕉に至つて、其の閑寂傾向から、性に合はないものとして、近づくべからざるものと考へてゐたらしくもある。

蕪村の獨創性は、さる先例や傳統にお構ひなく、句の素材から殆んど除外されてゐた牡丹を、自己の詩情の對象として、縱橫に詠みこなした。そこに、蕪村の牡丹なるものが、實に輝かしく、くつきりと、古今の和歌俳句を通して、絢爛目を奪ふやうに咲き盛つてゐる。眞に我が短詩界の偉觀としなければならぬ。

句集にも牡丹の句は八句あるが、「新花摘」又は、それ以外十二句を算し、其の他尙ほ二三句數へられる。さうしてそれら總てが、傳統を無視した、蕪村獨創の牡丹を發輝してゐる。この詩人蕪村以外、其の個性、獨自性、創造性を示現した俳人が幾人あるであらうか。

寂として客の絕間のぼたん哉

お客のない、其の絕間、牡丹のしんとしづまりかへつてゐるところに、氣をひかれたのである。

「寂として」の漢語調でないと、この場合の感じは出ないのである。

これを家の內と見、又た牡丹園のやうな屋外と感ずるのも、讀者の任意である。批評者の立場として、原句を善意に、又た有利に理解するを其の道德とすべきであらう。

地車のとゞろとひゞく牡丹かな

「地車」「だぐるま」。荷車、大八車、牛車等の名はあるが「地車」はないやうである。或は蕪村の造語であるかも知れぬ。「とゞろとひゞく」といふので、どういふ車か判然しないながら、重い荷物でも積んでゐさうに思はれる。

牡丹を見てゐる時、ごろ〳〵大地を鳴らして車が過ぎる、其の響きが、牡丹に傳はる——花がびり〳〵ゆれる——、蕪村の牡丹としての詩の躍動がそこにあつたのである。

玉堂富貴の代名詞によつて、テクニックされた牡丹であるなら、大八車がごろ〳〵ドス〳〵不愉快な雑音を漂らすやうでは、却つてイヤな頭痛ものである。それが蕪村に於ては、如何にも牡丹らしい、勢ひの充ちた、兩々一つに融合した詩の世界なのである。驚くべき創造であると言はねばならない。

併し、この句から、どういふ場所、又た場合が聯想されるか、所謂地理的條件は明らかでない。作者は、地車の響きの牡丹に交錯する、動的絢爛に打たれただけなのであるから、其の詩美煥發以外の條件などは、勿論問題にはしないのである。

さういふ詩美煥發の中核をのみ攝取して、他の雑駁な混濁分子を排除する、直面不動の態度も、句作の要諦を得てゐる許りでなく、實に近代詩人の理論にも合する、痛快なフォームである。

牡丹切て氣のおとろひし夕かな

牡丹を切つて、氣のよわつた、疲勞を感ずる夕べであるの意。

無心に切つたのでは、何ら後續の感興が起らない。有心に、しかも重大な關心を持つてゞあるから、氣の衰へが、痛切に味はれるのである。たとへば、寵姫を手打ちにした後の主人の心持、と言つたやうなものである。

「地車」は感情の客觀化であるが、これは又た方面をかへて、主觀を直叙してゐる。蕪村の獨創性は、其の表現の技巧も亦た圓滿無礙である。鬼に金棒といふべきである。

「おとろひし」は、他にも「おとろひや小枝も捨てぬ年木樵」がある。「おとろへ」といふべきを、古語風に言つたつもりなのであらう。蕪村の造語と見ていゝであらう。

山蟻のあからさま也白牡丹

「山蟻」「やまあり」、「昆蟲草木略」といふ書に「蟻之類多、爾雅曰、蚍蜉大蟻」とある。黒く大きな蟻。

白い牡丹に、山蟻の黒い、色彩の反映が、異様な世界を見せられたやうに心を打つたのである。平常氣にもとめない蟻の、逞ましい四肢觸角の動きまでが、これを見よと言はぬばかりに。

牡丹に蟻を配した句は、この外に「山蟻の覆道作る牡丹哉」「蟻王宮朱門を開く牡丹哉」がある。之を見ても、蕪村はたゞ空想化した牡丹を、自己の趣味性に附會してゐるのでなくて、牡丹の實境を精細に、又た注意深く凝視してゐることがわかる。即ち自然の默示を尊重する、其の暗示に隨順する善き徒弟であつたことを立證してゐる。

廣庭(ひろには)の、ぼたんや天(てん)の、一方に

「天の一方」蘇東坡の前赤壁賦に「望美人兮天一方兮」とあつて、人口に膾炙した成語。

廣い庭に咲いてゐる牡丹を、天の一方に美人を望むやうに眺めたの意。

誰でもの口に馴れた成語を、目新らしく活かしてゐる技倆に吞まれる。之を下手に應用すれば、成語の奴隷になつてしまふ。

「方百里雨雲よせぬ牡丹哉」といふのも、「方百里」といふ成語を、自在に驅使して、自家詩囊のものにしてゐる。自然の諸相を把握し、成語の意義を咀嚼したものでなければ、其の反芻に生彩は生じないのである。

此外牡丹の句は「新花摘」に「南蘋を牡丹の客や福西寺」——福濟寺——「ぼうたんやしろかねの猫こがねの蝶」「ぼたん有寺行過しうらみ哉」「詠物の詩を口ずさむ牡丹かな」「日光の土にも彫れる牡丹かな」等、蕪村の牡丹らしい、一唱三歎に値するものがある。これら皆蕪村の想化した、專賣特許的の創造であり發明であるから、單り前人未發であるのみか、後人亦た模す能はざる、唯一無二の境地である。かやうな先例があるからと言つて、徒らに絢爛を競ふ牡丹を詠じたところで、それは蕪村の特許權を犯すものであり、又た糟粕を嘗めるに過ぎないものである。よく、蕪村の前に蕪村なく、蕪村の後に蕪村なし、などゝ口癖のやうに言はれてゐるが、詩の本領から言へば、創造に先例や後繼はない筈である。先師があり、第二世があるのは、世間的の交際關係に於てゞあつて、詩とは沒交渉であるべきである。

柴庵の主人、杜鵑布穀の二題を出して、いづれ一題に發句せよと有、されば雲井に定て王侯に交らむよりは、鶉衣被髪にして、山中に名利なしとはんには

狂居士の首にかけた歟羯鼓鳥

前置の「柴庵」は、蕪村の俳友で漢學者であつた樋口道立の別號——又た自在庵ともいふ——。安永五年四月、道立の主唱で、洛東一乘寺村の金福寺に、蕪村一黨の初會合を催し、新たに寫經社と命名した。金福寺には、昔芭蕉の隱栖した芭蕉庵があつた。又た芭蕉の「うき我を淋しがらせよ閑古鳥」の出來た處である、といふ口碑が遺つてゐるのに因んで、同時に芭蕉庵を社中で再興し、當日の題詠も亦た時鳥と閑古鳥を選んだのである。其の記念に小冊子「寫經社集」を編んだ。其の時の卽席吟である。

「杜鵑布穀」は時鳥と閑古鳥の異名。

「雲井に走て」云々は時鳥に、「鶉衣被髮」は閑句鳥にかけて言つてゐる。「鶉衣被髮」はぼろぼろの衣物に、鋏も入れない髮で、世を逃がれた隱士の形容。王侯の賞翫にもなる時鳥より、名利を厭ふ閑古鳥の方に好感を持つの意。

「狂居士」「きやうこじ」、山中に隱れた、狂人ぢみた隱士の意であらうが、謠曲にある「自然居士」「東岸居士」のやうに、有髮僧衣の居士が、說法の間に、羯鼓を打つたり、サヽラを鳴ら

したりした、さういふ事實にも因んでゐるのであらう。

「羯鼓鳥」も閑古鳥の異名。

羯鼓といふ樂器は、小さい太鼓のやうで、紐で腰のあたりに結びつけ、撥を一本宛左右の手に持つて、拍子に合せて、舞ひながら打つものであるが、この句では、それを首にかけるものとしてゐる。

狂居士は首に羯鼓をかけてゐる、閑古鳥の啼く音は、あの羯鼓が鳴つたのか、それとも鳥が啼いたのか、隱士臭い、物淋しい聲の意。

「かけたか」は時鳥の啼く音「ほぞんかけたか」又た「てつぺんかけたか」に通はしてゐるので、これで、時鳥と閑古鳥の二題を一句に讀み込んだつもりなのであらう。

來歷澤山、手段澤山、殆んど駄洒落に近い、餘り冴えない機智を誇るやうな、句作常習犯的の弊を丸出しにした句である。蕪村でも、こんな陷穽に落ちることもあるのだ、と覺えず苦笑せしめる。

が、平生口癖のやうに「我が社中」を振り廻してゐた蕪村の事であるから——この事は、ただ一派を立てゝ他派を排斥する利害關係からでなく、眞に藝術的な研究を積まうといふ精進な

期待からであつた――、其の日の實現した愉悅に昂奮して、大分堅くなつてゐた點もあり、一つ念入りに洒落れて見よう野心も手傳つてゐたのであらう。其の第二世夜半亭を繼いだ時にも「花守の身は弓矢なき案山子哉」と、如何にも理窟ぽい拙い洒落かたをしてゐる。これも對世間へのお義理もあるが、さういふ儀式張つた事に、束縛されての遊びが擡頭するのであらう。

閑古鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ

「麥林寺」の「麥林」は、元祿の俳人中川乙由の別號。世に伊勢流の元祖のやうに言はれてゐる。乙由には有名な「閑古鳥我も淋しいか飛んで行く」の作があるところから、「麥林寺」と洒落れて言つた。

閑古鳥が鳴いてゐる、そこらにお寺が見える、何といふ寺か知らないが、若しか、あの有名な句に因んで、麥林寺といふのでないかの意。

「春泥句集」の蕪村の序に「……我社裏に歸て、句を吐く事數千、最も麥林、支考を非斥す、余曰、麥林支考其調賤しといへども、巧みに人情世態を盡す、さればまゝ支麥の句法に倣ふも又工案の一筋ならざるにあらず……」と召波と支麥論をする一節がある。

又た「桃李」に關する几董の追憶文中に、以前諸國を流浪してゐた時分、悟るところがあつて、美濃派の流行する地では美濃派を模し、伊勢流の地では伊勢流を作つて、自己の頑固な考へに融通をつけた、といふ意味のことを書いてゐる。

それら、乙由に對する蕪村の寛容な心持を知れば、この句の出來る動機も自ら理解される。理智を伴はない、淡い文字上の洒落として同感されるであらう。

「閑古鳥」で切れ「寺見ゆ」で切れる、この上半の二段に切れるボク〳〵した、一氣に讀み下せない、むしろ澁滯した固く鈍い調子も、「麥林寺とやいふ」の重々しい下半と相待つて、特殊な音律美を成してゐるやうである。丁度立佛と蓮座の釣合のとれた、調子のしつくりした佛像の感じである。

俳人でお寺を立てゝもらつたのは、古今乙由一人である、呵々。

この外閑古鳥の句は「山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり」「足跡を字にも讀まれず閑古鳥」「うへ見えぬ笠置の寺」「むつかしき鳩の禮儀」「櫻の枝もふんでゐる」など、理智によつて興味を呼ばうとするものが多い。恐らく蕪村は、閑古鳥をしつかり認識してゐないので、自然の暗示による景情を捕捉するに苦しんだ結果であらう。

かきつばた、へたりと鳶の、だれてける

「へたり」を「べたり」と讀むか、「へたり」と澄んで讀むか、作者はいづれとも指示してゐない。いづれに讀んでもいゝやうである。

これを、鳶の糞が、杜若の上へ垂れたのであると解したのは、正岡子規であつた。蕪村句集の初めて持てはやされた、明治三十年頃、難解の一例としてとやかく論議されたことがある。鳶がへたりと大きな翼をおさめて下りたのであらうと言つても、「へたり」の形容が妥當でない、として落著かなかつた。之を子規に質した時、明快に、鳶の糞であるとの解釋を與へた。それ以來、其の解釋に從つて、實に意外な場合を捕へたものだといふことになつた。

「へたりと」「たれてける」、硬音的の疊音も、一分の隙のない技巧の極致で、この場合の光景を躍動せしめてゐる。先づ「へたり」の形容語すらが、我々の持つ語彙の中には、容易に見つからない。「たれにけり」「たれたりし」などでは、たゞ事實を報告するが主になつて、それに伴なふ感情が籠らない。

のみならず、糞を言はずして、其の落ちた動きのみを——この場合糞といふ感じよりも、落

ちた動きの方が、先きに眼に映ずる——直寫してゐる所、極めて印象的であり、又た詩の表現的原則にも協つてゐる。

表面混濁してゐるやうで、其の實、或る杜若の爽快感が一句を讀了するところに湧いて來る。度々言ふやうであるが、蕪村の自然現象を見るに、如何に忠實であつたかゞ如實にわかる。自然に忠實であつたればこそ、かゝる句も生れるのである。

これに比べれば、「宵〳〵の雨に音なし杜若」などは、理智から生れた空想の臭ひが強く、何らの迫眞力がない。むしろ駄作と言つていゝであらう。

鮎くれて、よらで過行く、夜半の門

一篇の美文、むしろ美文以上であると言つてもいゝ。

鮎をくれたが、今夜はもう更けてもゐるので、こゝで御免を被ります、と門もはいらず、其のまゝ過ぎ去つて行つた、といふやうな場合である。

叙述の整然として、一糸亂れぬと言つたところ、相變らず、表現の妙境を思はせる。

鮎といふ魚の持つ特性、漁季、漁人氣質、それらを熟知する豫備知識を十分に持つてゐる者

は、表現の甘さ以外、この句が鮎でなければならない、鮎を中心にしての或る洒脫な生活の一面を感受する。

「夜半かな」とも言はず「夜半の月」とも置かず、「夜半の門」とした、この「門」が、たゞ調子の具合や、不用意に附けたものではない點にも著目したい。鮎をくれて行く者の、門べに於ける應對動作までが、「よらで過ぎ行く」と相竢つて、讀者の聯想裏に描き出されて來るのは、この「門」の一字あるが爲めである。

平面描寫化し易い俳句を、立體化してゐるいゝ標本であるとも見られる。

短夜や同心衆の川手水

「短夜」「みじかよ」は、夏の夜の間の短かいことから、俳句では大體に、夏の夜明けのことに使つてゐる。だから「短夜」といふのに、この言葉の持つ以外、夜明けの爽快さ、と言つたやうな季題感が、概念的に含められてゐる程である。「春の雨」は絹糸のやうな、こまかい音もしないやうな雨、「春の山」は、小さい丸々としたやさしい山と言つた風な、概念的季題感である。

俳句の便利なのは、この概念的季題感が傳統的働らきを持つ所にある。が、其の弊も亦たこの

概念化の中に胚胎してゐる。それらの詳論はこゝに省かねばならないが、ともかく「短夜」と言つて、之を夏の夜明けの爽快さを表示する言葉とするやうな約束的季題感は、他に類例を見ないやうである。

「同心衆」は昔の警官、町奉行の配下に屬した與力の手下で、今日の巡査か探偵位のものであらう。同心衆とあるから、一人ではなく、いくらかの人數がある。

「川手水」は、川水で顔を洗つたり、口を漱いだりする朝の手水。

句意は別に解說するまでもないが、この同心の一群れが川水で手水をつかつてゐる光景を、毎朝の平常の事として見るか、即ち作者が、たま〳〵同心の住居する同心長屋のあたりを通つて、其の光景に氣を引かれた場合とするか、それとも、何か捕物の事件があつて、或る所に張り込んでゐた、といふやうな非常時の光景とするか、即ち犯人の樣子はどうあらうと、夜もしら〳〵明けて來たので、丁度そこの川水で、そこ〳〵に川手水をつかふといふ、心いそぎのする場合とするか、其のいづれであらうか。

同心衆を點出したのを、其の職掌柄、ゆつくり朝寢もしないであらう想像からだとすれば、平常のことゝしていゝやうであり、「川手水」が變つた手水ぶりであると思つたとすれば、非常

時の聯想が浮んで來る。

作者の意圖が、いづれであつたか、句面に判然としない憾みがある。

みじか夜や二尺落ゆく大井川

「二尺落ちゆく」は減水の程度をいふので、一夜の中に水量二尺を減ずるの意。

「大井川」は東海道第一の大河、昔は川渡しの難所として名高かつた。

義太夫の「朝顏日記」にあるやうに、增水も早ければ、又た減水も早い。二尺落ちゆくは、減水の目に見えるやうな水勢で、普通の川には見られない大河の滔々たる水の樣を、卽ち驚くべき減水のしかたを表示してゐるのであらう。

「二尺」と限るのが、多大であるのか寡少であるのかは、川の狀況によつて、どちらにも測定されるやうであるが、次ぎに「大井川」と來るので、其の減水時の水の壯觀が、音律の上からも想像されるやうである。

大井川を題材とした俳句は、それが東海道中の川であつたゞけ、可なりな數に上つてゐるがかやうに水の動きを現實に見せつゝ、其の壯觀を諷つたものは少ないと思ふ。

短夜の作中でも、毛色の變つてゐるものである。

尙ほ曉臺の「幣袋」に「嵯峨吟行」と前書して「短夜や闇より出て大井川」といふ蕪村の句がある。この大井川は、嵐山の方で、東海道ではない。嵐山のは普通「大堰川」と書く。併し作者は或は嵐山の實境から、二尺落ち行くと言つたものかも知れぬ。

短夜や浪うち際の捨篝

「捨篝」、篝を焚いたのが、其のまゝ打ち捨てゝある。火が燃えてゐるかどうか、白い烟でも立つてゐるのであらう。

この篝が何の爲めに焚かれたものであるか不明であるが、浪の打ち際に、篝の名殘を見るのは、靜かな夏の夜明けの光景として、爽快味を滿喫せしめる。

漁村では、夜に乘じて網を曳く時、篝を焚く場合がよくある。又た沖に出た釣舟の目標に火を焚くこともある。さういふ篝であるかも知れぬ。

蕪村の柳女、賀瑞といふ母子俳人に與へた手紙に、「みじか夜やさゞらなみよる捨篝」と、この句の初案らしいものが書かれてゐる。

この外「短夜や小見世明たる町はづれ」「みじか夜や伏見の戸ぼそ淀の窓」など、寫生的の句があり、「短夜や枕に近き銀屏風」「短夜やいとまたまはる白拍子」など濃艶體と言つたのがあり、「短夜や金も落さぬ狐つき」「短夜や思ひもよらぬ夢の告」などの想像構成の作があり、ここにも行くとして可ならざるなしの、旺盛な句作力を見せてゐる。

砂川や、或は蓼を、流れ越す

「蓼」は、「和漢三才圖繪」にも「「青蓼喜二濕地一、二三月生レ苗、四五月繁茂、至秋作レ穗開二細花一」とある。

砂のこまかい小川に蓼が生えて、青く茂つてゐる、其の上を水が流れ越すところもある、の意。「或は」にはいろ〳〵の意味がある。大體に、もしや、とか、もしくは、おそらくは、といふやうに未定の疑問を含んでゐる。こゝでも「ひよつとすると」といふやうな心持を、漢語調に洒落れて言つたものと見るのである。強く「或は」の意味に拘泥せず、一種の流行言葉を口にする程度の洒落である。

說明すれば、何でもない野川の、ザラにある光景のやうであり、さうして又た句の全體の音調が、可なり散文的でもあるが、「或は」の要領を得た語調で、新たなものを見せられるやうな淡いながら言ひ知れぬ興趣を味はせる。

これを、人生の葛藤に附會したりしては、もう詩の圈外の問題になつてしまふ。眞に觸目の一些景、この味ひを知る者は、ひとり俳人のみであると言つても、過言ではないやうである。

蓼の葉を、此君と申せ、雀鮓

「此君」は、晉の王子猷が竹を愛して「何能可ニ一日無二此君一」と言つたのから、竹の異名を「此君」といふ。こゝでは和樣に訓んでゐる。

「雀鮓」は、「和漢三才圖繪」に、「攝州福島小鯛、名二雀鮓一」とあり、又た「喜遊笑覽」にも「攝津名物の内、雀鮓、江ぶな也、腹に飯を多く入たるが、雀のごとくふくるれば、かくいふなりといへり、江ぶなとは、江戸にて、おぼこといふ、いなの子なり」とある。又た「七部大鏡」には「炭俵」の附句「あざみや苣に、雀鮓もる」の解說に「……五條家の料理に、雀鮓といふものあり、蛤の貝を色々の供御をそへて、蓼などにそへてくるむなり」とある。

今日「雀鮓」といふのは、小鯛の腹に飯をつめたもので、大阪よりも和歌山が本場であると

いふ。ともかく、小さな魚の腹に、たつぷり飯をつめて、ふくら雀のやうな恰好をした鮓のこと。

雀鮓には、ツマとして蓼の葉が添へてある。蓼の葉は笹の葉に似てゐる。俗諺に、竹に雀といふが、雀鮓の蓼は、丁度其の俗諺の趣がある。王子猷に倣つて、蓼を「此君」と洒落れて見たい、と例によつて來歴故事による工風の多い作。

雀鮓を、まともに又た平面に見ないで、一ひねりひねつて見ようとする動機は、大方雀鮓といふもの丶恰好が、好奇心を唆るユーモラスな變つた味を持つてゐるからであらう。作者は案外、甘い洒落だらうと、當時得意であつたらうとも想像される。

三井寺や日は午にせまる若楓

「三井寺」は近江大津にある、湖水を見下ろす眺望のい丶寺で、又た園城寺といふ。近江の大寺で、結構壯麗を極めてゐた。「三井寺」の句は古今甚だ多い。

「日は午にせまる」の「午」は「正午」の「ゴ」。日の正午近いのを強めていふ。

「若楓」は、若葉の出た楓。他の木の若葉よりも、細かく密な、光澤を帶びてゐる感じ。

三井寺の境内に、實際楓があるかどうか、それを穿鑿する必要はないであらう。輪奐の美を

極めたお寺を背景にして、眞午の太陽の照り輝いた楓の若葉の、目にしみるやうな光を感じてゐるのである。其の餘情として、初夏の充實した、萬物皆生き榮えんとする、旺盛な內的力をも感受してゐるのである。「せまる」と特に強めていふ語勢は、心の昂ぶりから生れる、自然の響きである。

「三井寺や」が概念的に置かれてゐやしないか、といふのと、「三井寺や」によつて、その景情がよく具象化してゐるといふのと、二つの議論が生れさうである。それは「三井寺」を熟知してゐると否との分岐點でもあるやうだ。作者としては、何ら概念的に名所を利用したのでなくて、嘗て見たか、又たこの時實驗したか、其の實感がこ丶に蘇つてゐるのであることに論議はないであらう。

他に「路たえて香にせまり咲く花茨」がある。相對比して「せまる」の語氣を味ふべきである。

窓の灯の梢にのぼる若葉哉

窓の灯かげが、窓外にある木の若葉の梢まで照らしてゐる夜景。

「のぼる」と靜止的な灯影を動的に叙したのは、作者の印象からで、下から上へ昇るけはひを

感じたのであるが、前句の「せまる」と同じやうに、其の印象を活かす爲めの、自己の言葉を求めたのである。

「のぼる」は單に語氣を強めたのみではない。又た若葉の木の或る高さを如實に思はしめるのみでもない。暗中にくつきりと描き出された燈光の、眼に映る以上の眞實性と言つたものを把握してゐるのである。卽ち作者は、或る驚異的な、神祕に對する憧憬的な心を祕めて、この燈光に對してゐるのである。

若しこれが「窓の灯の梢を照らす」であつては、もはや作者の詩ではないのである。かやうな夜景は、必ずしも特異性を持つとは言はれない。何人もが、時に經驗し得る自然である。が、それを詩化し得た俳人がなかつた。蕪村が始めて發見したといふ、探險者的な名譽よりも、其の發見を表現するに當つて、其の情緒の生む適當な言葉を創造したことが、詩人としての榮冠を贏ち得る第一條件なのである。

これと反對な感じを與へる句に「たかどのゝ灯影にしづむ若葉哉」がある。

不二一つうづみ殘してわかばかな

隨分有名になつた句である。中には蕪村生涯の傑作のやうに言ふ者もある。

山々は皆若葉した中に、富士山だけは、高く一頭地を拔いて、其の麗容を聳てゝゐる、とでも言へば、まだ尋常な句になつたのであるが、語氣を強めて「うづみ殘す」と擬人的な言ひ方をした。それが失敗して、何らの詩情をも催さない、俗氣紛々たるものになつた。

語氣を強める成功と失敗は、其の動機の如何によつて、全く反對の結果を生む。動機の內的感情に發するか、外的理智に賴るかの差異である。「埋み殘して」は、他の總てが埋められた—さういふ見方からして、既に感情的ではない——と見るからの理智判斷に生れる言葉である。富士の高きを禮讚するのでもなければ、若葉の壯大觀を諷ふのでもない。たゞ、富士と若葉の比較觀を、裏から反語的にいふ機智の閃めきのみである。俳句の月並化する墮落の一要素でしかない。機智主潮の作に過ぎないのである。

蕪村の如き大天才にも、この理論の徹底しなかつたのは、矢張時代の罪なのであらう。固よりこの一句あるが爲めに、蕪村の鼎の輕重を問ふ要はないのであるが。

絕頂の城たのもしき若葉かな

地形や、其のあたりの模様など、少しも説明らしいものがなくて、山の頂きにある城の光景と、其の城を埋めんとする如き若葉の壯觀とが、如何にも鮮明に描かれてゐる。さうして其の城に對する作者の感懷——要害堅固で、百萬の大敵でも引きうけて戰ひさうなたのもしさ——がこの光景にうつてつけに出てゐる。

一度血腥い戰場を潜つて來た武人の感懷のやうであるが、木々の若葉する時分の、天地に充ちた旺盛なエネルギーを感ずる者の、自ら抱く昂奮でもある。さういふ昂奮は、蕪村以前の俳人は、むしろ俗人の情として忌避する傾きさへあつた。さういふ禁忌を破つて、新たに詩情の展開を成した活眼を、こゝにも推稱されていゝと思ふのである。

蛇を截てわたる谷地の若葉哉

「蛇を截て」の「蛇」に「へび」「だ」「ぢや」の三つの讀み方がある。强ひていづれと定めなければならない理由はないやうである。

蛇を截るのは、漢の高祖の故事、「史記」に「劉季夜徑二澤中一有二大蛇一當レ路、季拔レ劍斬レ之」とある。

漢の高祖を諷つたものとしなくていゝであらう。路にあたる大蛇を斬つて渡る雄壯な氣持が作者の感ずる若葉の壯觀と相俟つて、一場の劇的シーンとなつたのである。「史記」の故事を念頭にしての、空想工作に成るものであらうが、其のボロを出してゐない、或る迫眞力を持つところに同感される。

「峯の茶屋に壯士餉す若葉哉」も、略ぼ相似た、蕪村特得の積極味に勝つた、かやうな光景が俳句になり得るかを驚かしめる作である。

蕪村の壯丹と言ひ得るなら、これは蕪村の若葉であつて、古今獨歩といふべきである。

山に添ふて小舟漕ゆく若ば哉

芝居かゝつた豪快味ばかりでなく、かやうに靜かな、水鄉風景ともいふべき、淡々たる句境もある。山ぞひに小舟が漕いで行く、其の山を覆ふ若葉は水にひたるかの如く大きな背景となつてゐる。水彩畫にでも見るやうな、すが〳〵しさである。

句面には現はれてゐないが、山に添うての山に、幾分大きな聯想が伴なふので、この水も可なりの廣さを持つた、全體に或る視野の大きい風景が眼前に浮ぶ。小舟の「小」は、形が實際

に小さくもあるのであらうが、其の大景に對して起る感じの小なのである。小さいとは言へ、この風景の中心をなすものである。

海の景色ではなく、長流とでもいふ川の澱みの光景であらう。

工みのない淡々たる句には、尙ほ「蚊屋を出て奈良を立ち行く若葉かな」「山畑を小雨晴れ行く若葉かな」等がある。

蚊屋の内にほたる放してア、樂や

蚊帳の中に、螢を放したのは、特にさういふ變つた趣向を凝らした或夜の戯れであるが、何と圖にあたつたいゝ心持だらう、と言つた氣分が「あゝ樂や」の詠嘆迸發となつたのである。變つた戯れは、態とらしい、すまじきことをすると言つた、不快味を伴なふ場合が多い。其の不快味を抹消してゐる上に、今日の生活を樂しんでゐる餘裕綽々たる餘情さへが味はれる。表現の效果が著しいといふべきである。

「ア、樂や」は此時代としては、殆んど口語體である。口語體の句は、元祿にも先例はあるが、これ程緊密な內容にそぐふ表現形體をなしてゐるものは稀れである。

この句初案は「蚊屋の中に螢放してアラ樂や」であつたらしい。「アラ」より「ア、」の方が適切であらう。

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音くらし

昔の井戸には、害物や毒物を食ふといふので、鮒や鯉などを飼うてゐた。それが水面を飛ぶ蚊虻などを食ふことがある。「蚊にとぶ魚」はさういふ場合をいふ。「音暗し」は、井戸の底でする音から享ける感じである。常識では音に明暗はないのであるが、感情の上には明暗のみならず黑白さへもある。

が、この句も芭蕉の「海暮れて鴨の聲ほのかに白し」に影響されてゐるので、井戸の魚を素材として——自己の經驗に立脚して——の蕪村の技巧に生れた言葉であらう。それが感情上の認識と一致するので、其の技巧が技巧としての臭味を解消してゐるのである。

たゞ「古井戸や」の「古」は、「音暗し」に照應せしめる豫備工作らしい痕跡を殘してゐる。自から「古い」井戸を感ぜしめる表現が、他にあるのでないかと思ふ。

「うは風に蚊の流れゆく野川哉」はこの句と違つた實寫的の一小景であるが、矢張「野川」の

「野」が、幾分この小景を理智的に是認せしめようといふ説明氣分に置かれてゐるやうである。流るゝ水の上を、蚊の群が流れに沿うて吹かれてゐる、視野に入る卽景を叙して、そこに郊外らしい氣分は自然に感受されるであらう。

それが實際「古井戸」であり「野川」であるからといふ肯定論は、詩を論ずるにあたつて、聊か粗暴であらう。

蚊やりしてまいらす僧の坐右かな

敬虔な心持の出過ぎてゐる程、上品な句振りである。僧の近くに、を「坐右かな」と言つた。それが「參らす」と相俟つて、置き得て妙なりの感がある。

「僧とめて嬉しと蚊帳を高う釣る」といふ句もある。僧に對して、常に尊敬心を持つてゐたやうである。

蚊の聲す忍冬の花散るたびに

「忍冬」「にんどう」は一種の蔓草、「すいかづら」ともいふ。木などに纏はりついて、三四月頃

花を開く。一つの蕾に二瓣の花が開くが、其の瓣に大小があり、蘂は日が經つと黃色になり、新らしい蘂の白いのと黃白相映ずる所から「金銀藤」「鶯蕎藤」等の異名がある。冬も枯れないので「忍冬」とも言はれる。香氣の强い草で、又た藥用にも使はれる。「忍冬酒」など不老長壽の藥とも言はれてゐる。寒國には少ないやうであるが、暖地には左程珍らしい草でもない。

句は文字通りで、蚊の聲がする、それは忍冬の花が散るたび〳〵にするといふのである。忍冬といふ蔓草の性質から、垣などに圍まれた庭園の片隅が想像され、又た蚊の聲をきく位置關係から言つて、佗しい荒れた、廣からぬ庭であるやうに思はれるが、さういふ繪畫的な構圖は、この句の主眼とするところでないので、一切省かれてゐる。總てが聞く耳と、視る眼の官能を通して印象化されてゐる。

忍冬の花も、ひどく眼立つものでもなく、蚊の聲も亦た至つてかすかなのが普通である。――蚊雷といふ、雄蚊の大群集は別として――。大方、忍冬の花の散る動きにつれ、今まで物かげに靜まつてゐた蚊も動搖を感じて――事體の變を感じて――飛び立つかすかな聲がする。さういふ些細な空氣の動きが、一度でなく、同じやうな力と速度で繰り返さるゝといふので、先づ其の境地の如何にも鎭まりかへつた、ひつそりした靜かさが感ぜられる。又た作者の神經

が針程鋭敏に亦た細かく顫へてゐなければ、かゝる微細な事象に對應しないのである。蕪村集中にあつても、これ位神經の尖鋭な、空氣の微動ですらが、滿身の衝動となる底の句は稀れである。

餘計なことではあるが、作者は一ッ時物に倦むかどうかして、端近く、廣からぬ庭面に、放心したやうにぢつと視線を向けてゐる。寂として萬象の鳴りを鎭めてゐる中に、先づ其の靜寂を攪亂するものゝやうな動きが眼につく。それは忍冬の花の白き動きであつた。と、更らに耳を疑ふやうな音響が、其の一隅に湧きあがる。それは嘗て耳に經驗のある蚊の聲であると、更らに視線と聽覺を其の方に注意深く向ける、と言つたやうな場合と思はれる。

詩人蕪村の孤獨に安住する、靜寂を樂しむ一面が、コンモン・ヒューマニティを餘處に、美しく流露してゐると言つていゝ作である。

「忍冬の花の」と長句法に言つたのも、其の花を凝視せしめるに役立つてゐる。リズムも其の爲め柔らげられてゐるであらう。

下十二字「忍冬の花散る毎に」と傳へてゐるのもある――新五子稿――。併し矢張原句を正しいとすべきであらう。

若竹や橋本の遊女ありやなし

「橋本」は淀川沿岸の遊廓。男山の麓、對岸は山崎、昔山崎橋こゝに架りし故、橋本といふ。「ありやなし」は「伊勢物語」にある在原業平の歌「名にし負はゞいざことゝはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」の先例に因る。

一種の懷古感で、今年の新竹卽ち若竹の伸びたのに對し、あの橋本の遊女はどうしたか、と遊女の在りし昔を偲ぶのである。

先づ橋本附近に來て、そこらの若竹を見ての感想とすべきであらうが、それら地圖的な說明の加へられてゐない爲め、聯想は區々になるやうである。

竹數竿の略畫に、自らこの句を題した半切の一幅がある。が、若竹といふ配合の眼新らしい以外、淡い、在り來りの懷古感以上には出ないやうである。

筍の藪の案内やおとしざし

「おとしざし」は、刀を帶へさすに、こじり下がりにさすこと。

密集的に竹が立つてゐるので、普通のやうに刀をさしては邪魔になる、それで刀をおとしざしにした、ユーモアを含んだ卽興。

「筍の藪」は、筍の生える時分の藪の意であるが、「筍の藪」とつゞける言葉には、も少し筍に他の意味を持たせる手段もあるやうである。で、たゞ無意味に藪の案内をしたのでなく、筍を賣る爲めの案内であらうといふ聯想も起るのである。

筍をホンの一添景とした——季題を主眼にする普通の句作態度と別な往き方——一事相の寫生的描寫。刀の落しざしのやうに、氣輕に微笑さるゝ雰圍氣。芝居に出て來る下郎と言つた風格の一本ざしと、百姓體の粗野な藪主との對話的雜音も聞える一シーン。

若竹や夕日の嵯峨となりにけり

嵯峨は藪の名所、芭蕉の「嵯峨日記」にも「時鳥大竹藪を漏る月夜」がある。

若竹は伸びた、夕日を感ずる嵯峨になつたの意。

それまでは、さほど夕日に心を惹かれなかつたが、若竹時分になつて、それを感ずるといふのに、何か因緣があるのであらうか。「嵯峨日記」に「嵐山藪のしげりや風の筋」の句の後に「斜日に及て落柿舍に歸る」とある。それ位が豫備知識にあつたかも知れぬ。

若竹に夕日を感ずるのは、初夏の時候關係で、日の永さと、漸く日光の暑氣を感ずるにもよるが、若竹の穗先きの揃つた、芭蕉の句の「風筋」の著しく眼に映ずる、竹の姿體にも關するやうである。言ひ足せば、其の揃つた穗先きが、日光をうけてキラ〳〵光る趣きがある、其の眼の刺戟によるのであらう。眼の刺戟から、夕陽の嵯峨を感ずる、興趣の外から內への推移には、多少の曲折があるとも言へる。「や」「かな」の二段切れを必要としたのも、細心な注意が拂はれてゐるのである。

なれ過た鮓をあるじの遺恨哉

「なれ過ぎた」は壓し鮓の場合で、鮓をつけてから、蓋の上へ、石などの重みのあるものを乘せ、酢の味の飯に滲みるのを待つ。それが壓し過ぎて、丁度のいゝ時機を失した、卽ち「なれ過ぎ」である。

折角、うまい鮓をと心待ちしてゐたのが、なれ過ぎて味をなくしてしまつた、甚だ遺恨千萬の意。

普通の習慣として、鮓をつけるのは、弔祭の場合、又は客來の時などで、或る饗應を意味してゐる。家庭の主人としての恨みは、ひとり自分一個の問題でないことも、この句の裏面にはのめいてゐる。

ともかく家庭に於ける、言はゞ身邊雜事の一些事を、寫生的に描寫した鮓の句の先驅をなすものであると思はれるが——この句は安永五年以前の作——、この後「新花摘」——安永六年——に於て、又た蕪村の鮓を造りあげてゐる。

「鮓を壓す我ゝ酒醸す隣あり」「鮓を壓す石上に詩を題すべく」「鮓桶を洗へば淺き游魚かな」「眞しらげのよね一升や鮓のめし」「卓上の鮓に目寒し觀魚亭」「鮓の石に五更の鐘のひゞきかな」「寂寞と晝間を鮓のなれ加減」「鮓つけてやがて去にたる魚屋かな」「鮒鮓や彦根の城に雲かゝる」「鮓おしてしばし淋しき心かな」の十句、先人未發の詩境を、意氣颯爽として濶步してゐる觀がある。

「鮓を壓す」の第一句は、隣家が酒を醸してゐるといふ許りでなく、それに對抗して、我は鮓を壓してゐる、と鮓を壓す豐かな心持を諷つてゐる。「石上に詩を題すべく」は、白樂天の詩句「林間煖レ酒燒二紅葉一、石上題レ詩拂二綠苔一」に因んで、其の壓石を詩化する情趣の白熱である。

「洗へば淺き」は村居の實情。「ましらげの米一升」は、牡丹散つてうちかさなりぬと同じく、靜物的の爽快感。「卓上の鮓も」「觀魚亭」——何處の割烹店であるか不明——の背景による卽興。「五更の鐘」も、次ぎの「なれ加減」と相似た夜と晝との感懷。「鮓の石」といふ大膽な造語に注意すべきである。中で趣きの變つてゐるのは「鮒鮓」の句で、「彦根の城に雲かゝる」の眺望的遠景に、鮒鮓といふ感じを具象化せしめてゐる、珍らしい手法である。景を述べるのが主ではない。其の景色の持つ內的雰圍氣とでもいふものが、作者の鮒鮓に對して起す情趣なのである。

これら蕪村の鮓は、又た燦然として、俳句史上の一偉觀を成してゐるのである。

愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら

心に悲しみを抱きつゝ岡にのぼると、そこには野茨の花が咲いてゐる、といふまで。が、餘情として、其の花茨が、悲しみを慰めるやうでもあり、又た悲しみを誘ふものともなる、といふやうな、漠然とはしてゐるが、緣なきものに緣を感ずる詩人的憂鬱性がほのめいてゐることを見逃がせない。

「花茨故鄕の道に似たるかな」は、遠く母鄕を離れた遊子の情であるが、これは其の延長とも

見るべき作である。

（洛東芭蕉庵落成日）

耳目肺腸こゝに玉巻ばせを庵

「洛東芭蕉庵」は既出。

「じもくはいちやう、こゝにたまく、ばせをあん」と讀む。

「耳目肺腸」は、司馬溫公の「獨樂園記」に「明月時至、清風自來、行無レ所二牽止一、無レ所レ耽、耳目肺腸、奄爲二己有一」とある、其の成語を借りたのである。溫公の意は、獨り樂めば、明月清風の友があり、何處へ行かうと勝手であり、耳も目も肺も腸も、卽ち我が身體も心も、悉く自分のものだ、と孤獨の境界を述べたのである。

「玉巻く芭蕉」は、芭蕉の新らしく出る葉が、棒のやうに堅く巻き込まれてゐるのを形容していふ成語。

玉巻く芭蕉から芭蕉庵に掛けて、其の再興の悅びを述べたのであるが、「耳目肺腸」は芭蕉にかゝるのでなくて、蕪村——及び其の一黨をもこめて——自らの身も心も、といふ意であらう。

一方では「玉巻く」が、我々の身も心も清澄である意になり、他方では我々の苦心が酬いられて、芭蕉庵落成の玉となつた、といふ心持をも含めてゐるのであらう。

從來解釋のつかない句とされてゐたのであるが、蕪村も深くは考へず、「耳目肺腸」の字面と其の音讀の音の自分に快適なものゝあるのを、不圖こゝに引用したのでないであらうか。極端に言へば、字義には拘泥せず、たゞ其の發音のリズミカルな面白さを主としたのであるやにも思はれる。つまり、音美を要素とした大膽な試みなのである。

解釋は明らかにつかなくとも、何處かに尋ねあて得ない妙味が潜んでゐるやうで、捨てられない作である。

青梅に眉あつめたる美人哉

「青梅」は、梅の實、梅干の原料。餘り熟さないうちに漬け込むので、青梅といふ感じがある。

この美人が青梅をどうしてゐるのか、或は一つぐらゐ食うたのか、又は盆にでも盛つたのを見てゐるのか、さういふ事實は、この句には現はれてゐない。たゞ青梅と美人の顏の、僅かな距離で接近してゐることが想像されるだけである。青梅は酸味の强いものであるから、たゞ

見たゞけでも、口中唾を生ずる。さういふことを利用した、昔の支那の軍國の故事もある程である。

美人が眉をよせて、其の酸味に打たれてゐる、それが却つて、其の美人に別趣な風格を與へてゐる、と畫家である蕪村は又た其の美人を凝視してゐるのである。

「あつめたる」は、眉をよせた形容の强調で、蕪村のいつもの巧妙な造語と見ていゝであらう。

外に「青梅や捧心の人垣をへだつ」といふのもある。「捧心」は「莊子」にある、有名な美人西施の故事で、胸を抱くやうに手をそへることであるから、先づ西施の如き美人を垣間見た場合の作である。或は、姙娠をすると酸味のものを欲しがる事實も、作意のうちに幾分加味されてゐるかも知れぬ。

かはほりやむかひの女房こちを見る

日常生活風景の一片。

これに一層輪をかけたのが「酒を煮る家の女房ちよとほれた」である。——「酒を煮る」は、

酒釀業者の年中行事で、新酒全體に一度火を通す、卽ち一度或る溫度にまで煮上げるのである。それをしなければ、酒は皆腐敗する。が、其の時期は春になつた頃であるに關らず、俳句の季題は夏になつてゐる。季題制定者の何かの誤りであらう。酒釀業者は、大抵富有である許りか邸宅も堂々たる構へで、主人內儀など、奥深く住みなしてゐるのが普通である。蕪村のこの句は、どうも酒釀家のそれにそぐはない氣輕るさがある。酒を煮る事實を、よく承知してゐなかつたのでないかと思はれる。

洒樂な不良老年でなくとも、近所合壁の家庭接觸の間には、時に容色行爲に關して、異性的な感興を喚ぶこともある。蕪村は、率直に其の眞情に觸れたので、却つて胸中の光風霽月酒々落々たるものがある。

夕風や水青鷺の脛をうつ

「青鷺」は、鷺の中の巨鳥。頭も背も翅も冠毛も皆蒼黑、腹白く、脚は綠色。大抵水邊を步して魚をあさつてゐるが、巨翼を張つて飛ぶ樣も亦た壯觀。

「脛を打つ」は、風立つて來た水が、脛にあたつてゐるのを强めて、巨鳥の悠然たる樣を現は

してゐる。引いて夕暮れの涼氣を感じてゐるのである。

蕪村の作としては、平面描寫に近く、感興の一本道をたどつて、甚しい曲折がない。それだけ徒らな昂奮のない、平靜な大きさがあるとも言へる。さういふ意味でか、俳友であり同時に俳敵でもあつた曉臺との出會に、この句を立句として一聯の歌仙を卷いてゐる。安永三年四月十五日東山紋阿彌亭での興行であつた。連中は、京都の蕪村、大魯、几董、嵐甲、美角等、名古屋の曉臺、士朗、宰馬、都貢、丈芝等の都合で十名の大一座。

一體昔の連句は、俳諧師二人以上出會の時の座興及び禮儀の爲めに催したものであるが、互ひに其の力量を競ふ上から、座興とは言へ、甚しく眞劍味を帶びたものであつた。殊に日頃俳敵と目ざす仲間との出會に於ては、全力を傾けて戰ふ勇士の面影さへがあつた。評釋の岐路に入るやうであるが、この青鷺の句に因んで、當時の歌仙の一部に就いての所感を記すのも、必ずしも徒爾ではないであらう。

其の歌仙は、曉臺の記行「幣袋」と、几董の「宿の日記」に記されてゐる二つがあつて、所所一致してゐない。大方、曉臺の方で、公刊する時改刪したらしく、「宿の日記」の方が、當時の初案を傳へてゐるのであらう。

夕風や水青鷺の脛を打つ　蕪村
蒲二三段凄〳〵と生ふ　宰馬
きるべしと思ふ節より節をれて（宿の日記）　大魯
十日餘りもおなじやどかる　士朗
一しきり雨吹はれて月の雲　几董
つらなる山にたゞ秋の聲　都貢
かくばかり萩刈とりし人いづち（伏せ（宿の日記））　美角
鎖あづかる（とざしひらける）（宿の日記）　貫之の門　曉臺
星落る方に小細き水の音　丈芝
馬勞れしと松につなぎて　嵐甲

大體に京、名古屋と交互に附けてゐる。脇の「蒲二三反」は、發句の餘情をいふ規定に從つて青鷺の居さうなあたりの景物を叙してゐる。「凄々と生ふ」物すごく尋常でない言葉づかひに、氣構への尋常でないところもほの見える。第三句は、さういふ沼べりに住む人物を描いて、思

ひ切つた轉じ方をしてゐる。日頃切りたいと思つてゐた節から、ついてゐた杖が折れたといふ老人らしい意外な出來事である。聊か、こゝまで離して、さうして卽いてゐるだらうと肩肱を張つた調子に見える。第四句は、それを行脚の旅人か、又は不時の病人とも見て、長逗留をすることにした。この猛者揃ひにしては、やゝ平易な附けである。第五句も、其の平易さをうけて、逗留もやがて終るべき意をこめながら、月夜の雨晴れの光景を叙した。第六句、扨て立ち出でゝ見れば、山々に秋の聲が充ち〳〵てゐる、と語氣を强めて、切々たる旅情を述べる。前の二句の叙事叙景を、少し手ぬるしと見た意氣である。第七句、こんなに萩を刈つた人は、どこに往つたのか、と秋山孤節の趣。第八句、秋山の趣から、貫之の故事に轉想して――土佐日記に、門の鍵を預けた人のことがある――荒れたる樣を史實化した。衒學の嫌ひはあるが、ここもと曉臺大得意のところであらう。第九句、「小細き」「こばそき」とよむのであらう。何か變つた景を言はうとして、少々繼りかねた體だ。そこになると、第十句の「馬勞れし」は變化も景情も、先づ首肯ける。それに句ぶりも穩やかである。この嵐甲といふ人、傳記不明であるが若くして死んだ。月居、士川などまだ擡頭せぬ前の作者であつたが、惜しむべき一人であつた。

連句はかやうにして、如上の十人が鎬を削つてゐるのである。卷尾に至る程興を增すのであ

るが、長きに失するので割愛する。

述懷

椎の花人もすさめぬにほひ哉

「すさめぬ」は賞翫せぬ意。

蕪村自らの上を述懷して、自分は椎の花の香ひの如く、人に賞翫されない、まことにつまらない花であるの意。併し、誰も賞翫はしないが、椎の花には、椎の花らしい香ひがある、と暗に自己の意氣を言つてゐる反語的なところもないではない。

ありふれた、謙抑な「コンモン・ヒューマニティ」を、理詰めにした句ぶりで、「述懷」などゝいかめしく言ふ程の價値はないやうであるが、作者は芭蕉信仰から、其の「幻住庵記」にある「先づたのむ椎の木もあり夏木立」を後ろ楯にしての、自己否定卽自己禮讃をしてゐるのである。

芭蕉を背景にしてゐると思ふと、尙更ら理詰めの上塗りで、詩人といふより道德者、それも低級な一知半解の、悟り氣分の鼻につく道德人と言ひたくなる。芭蕉を背景にする者、悉くこの陷穽に墮ちてゐる。蕪村旣に然り、他の斗筲の凡俗俳人をや、と言ひたくなる。

路邊の刈藻花さく宵の雨

道のべに刈り上げた藻が、枯れもしないで、生き〳〵と花をつけてゐる、その花を夕暮の雨中に見たのである。「宵の雨」を「夜の雨」と見て、昨夜の雨を感じながら、翌朝刈り藻の花を見たのであらう、といふやうな解釋もある。それも成立するか知れないが、蕪村の「宵」は、多く夕暮の意味に使つてゐる。「春の夜や宵曙のその中に」など其の一例である。夕暮の雨中に藻の花を見つけたとしていゝと思ふ。

藻の花といふのも廣義に解すれば、いろ〳〵の花、色がある。こゝには、どれといふ指定はない。夏になると、水を通ずる便利の爲め、枝川、野川の藻を刈り上げる。又た池、堀の藻刈舟もある。それも、この句では如何なる場合か判然してゐない。

が、一句全體として、作者のやさしい氣持の窺はれる、さはやかな潤ほひが、豐かな繪の具でかいた繪のやうに出てゐる。

「揚土に小雨つれなき田螺哉」といふ春の句もある。

湖へ富士をもどすやさつき雨

近江の琵琶湖は、大昔富士山が噴火した時に出來たものだ、といふ傳說を根據にして、五月雨が富士を降り流して、もとの琵琶湖へ戻す、と雨量の多く、且つ力强いことを言つたのである。客觀化されるものゝ稀薄な、一寸したウキットを誇るものであるが、餘りに超理論的な、又た飛び放れた非常識ながら爲め、誇大妄想的ではあるが、却つて馬鹿らしさに淡い興味がある。單に文字上の遊戲とのみ見るのは、作者の飛躍的な著想、大膽な反セオリーが泣くであらう。

趣きは違ふが、他に「龍王へ雨を戻すや落し水」といふのがある。

又た「五月雨や富士の烟のその後は、其角」の先例もある。

○さみだれや大河を前に家二軒

「大河」「たいが」と讀む。

この景色にうつてつけと言つていゝ、リズムの張つたところが先づ感ぜられる。「たいが」と讀まなければ、「おほかは」ではそれが出ない。

又た「大河の前に」でも「大河の前の」でも、其の強さが出ない。何でもないやうであるが「大河を前に」は、リズムの上から言つても、堅密さを持つてゐる。「大河を前にして」といふ意で、單に大河の前に、あるのではない。

大河に五月雨が降り注いでゐる。刻々に水も增すであらう、すさまじい、恐怖を感ぜしめる中に、其の景色の中心をなすものゝやうに家二軒が立つてゐる。それが大河を前にして、如何にも孤立無援な情態である、といふのが作者の主なる感興であらう。渺茫たる高原的な風景に小さく旅人の一二人を、たよりなげにかいたやうなものである。

さみだれを鬱陶しい、陰氣なものとのみ感じて來た慣例から言つて、客觀的にそれを豪壯な力强い、一つの大景としたのは、恐らく蕪村に創まるであらう。芭蕉にも「さみだれをあつめて早し最上川」の水勢の豪壯味を諷つたものもあるが、「あつめて早し」の技巧の爲めに、さみだれの客觀味は全く表面に現はれてゐない。

蕪村のさみだれの代表句として見るべきものである。

「さみだれの塀たのもしき砦かな」「五月雨や滄海をつく濁り水」「さみだれや鵜さへ見えなき淀柱」「さみだれや美豆の寢覺の小家がち」「さみだれや貴船の社燈消る時」など、いづれも五

月雨の客觀的壯美を主とした著想である。

さみだれや佛の花を捨に出る

これは鬱陶しい陰氣な方面の作。

お寺であるか、在家であるか、さういふ事實は例によつて不明である。が、作者の直接經驗と見ていゝであらう。

佛壇に供へた花は——樒又は時々の草花など——普通の場合、可なり時日を持たせる。床の間の挿花と違つて、少々枯れ葉の見える位、さまで氣にかゝらぬ位である。それを何分にも其のまゝにしておけない、捨てなければならないといふので、一層陰氣なのである。

「捨てに出る」の「出る」働きが、一方には雨に濡れるといふでもないが、直接に雨を感ぜしめ、他方には鬱陶しい退屈な中の、僅かな身の動きで、それが陰鬱さを反映してゐるとも見られる。

「床低き旅のやどりや五月雨」「さみだれのうつぼ柱や老が耳」など陰氣な部類であらう。

蕪村にはこの外、壯大な客觀美ともつかず、又た籠居の陰鬱味でもない、純寫生的の立場か

ら、實境に卽した、他の境地を拓いたものが少くない。「ちか道や水ふみ渡るさつき雨」「さみだれや鳥羽の小路を人の行」「さみだれや水に錢ふむ渡し舟」「かゝげあえぬはだし詣りや五月雨」「あか汲んで小舟あはれむ五月雨」「紙燭して廊下過るやさつき雨」など、却つて屈托のない明るさをさへ感ぜしめる。こゝにも亦た蕪村の一發見があるやうである。

いづこより礫うちけん夏木立

どこから打ち込んだつぶてゞあらう、と夏木立——大方は其の木立の中にゐて——の深くこんもりした、畫尙ほ暗い趣きを感じてゐる。

礫を明らかに眼に見るのでなくて、其の音、葉の動きなどから、直感的に礫と斷定する、其の方に詩的な味ひが深い。

勢ひの旺んな夏木立には、又た大きな靜かさ、と言つた感じもある。句は其の靜中の動を諷つたので、突如として豫期しない動きを起すものとして、礫は甚だ要領を得てゐるのみでなく、又た最も自然な事實でもある。

夏木立の中を行きつゝあるものが、不圖足をとゞめて、はてな、と或る驚きと恐怖を感じつ

つ、其の礫の音を聽きとがめる、さういふ場合が無礙に現はれてゐる。

酒十駄ゆりもて行や夏こだち

「酒十駄」は、荷を積んだ馬を一駄とするから、十匹の馬に積んだ酒荷。狂言に「木六駄」がある。それは牛六匹に積んだ薪であるから、必ずしも馬に限らないかも知れぬ。「酒十駄」も「木六駄」から轉じたものであらう。

「ゆりもてゆくや」、ゆられつゝ行くの意であるが、「ゆられてゆくや」の他働的でなく「ゆりもてゆくや」の自働的である所に注意したい。何も十駄の酒を故意に搖り動かすのではないが一駄二駄と違つて、十駄の大行列となると、高低凸凹、或は左支右吾、搖り動かすことが、又た其の目的でもあるらしく見えるのである。卽ち、ゆられてゐる樣が、一層活事實として、描き出されるのである。

十駄の大行列が夏木立の中を行進してゐる、それが又菰被りか何かの酒荷である。さうして其の行進する狀態さまでが細かに眼前に描き出されて來る、豐かな力の籠つた、眞に理想的な夏日風景である。

蕪村が若しかゝる風景を、空想裏に描き得たとするなら、風景作者として入神の技といふべく、又たかゝる實景を寫生したとするなら、表現技巧の極致を行くものである。

おろし置笈に地震なつ野かな

地震を素材とした句がないわけではないであらう、たゞこれ程詩化された一風景として活用された例は、恐らく他に見出し得ないであらう。

「笈」は、山伏修驗者などの背に負ふ旅行具であるから、この場合にも、山伏なり修驗者なり笈の主の人物がゐなければならないのであるが、それの點出してないのは、其の必要がないからである。必要の有無よりも、詩の要素として、眼にも心にも映じないのである。

夏木立の礫のやうに、これも廣々とした夏野の靜中の動を、笈の地震の頓へに感ずるのである。外の動きでなく、地震による動きであることが、夏野の廣大な舞臺と相竢つて、言ひ知れぬ味ひを生ずる。笈の動きは、限られた小範圍の事相であるが、無限大を感ぜしめる地震を想ふことによつて、一時の恐怖よりも、悠久無限感を土臺とした、おほどかな驚きに打たれるのである。

「おろし置く」といふのも、この場合、景情を明らかにするに役立つてゐることを忘れてはならぬ。

この句の初案らしい「笈の身に地震しり行く夏野かな」がある。「笈の身」と言つて、人物を點出してゐる許りでなく「地震しりゆく」と時の經過と、人物の感觸をも現はさうとしてゐる。それだけ詩味は混濁してゐるやうである。又た「實方の長櫃通る夏野かな」もある。實方中將の陸奥に貶されし故事に因むのであるが、遙かに平面描寫的であると言つていゝであらう。

行々てこゝに行々夏野かな

「行々て」は「文選古詩」に「行々重行々、與君生別離」とある。この句を引用して、「和漢朗詠集」に「行々重行々、明月峽之曉色不盡」といふ先例もある。

「行々」を原詩のとほり音讀しないで、「ゆきゆきて」と訓讀し、全く國語化した働きを見ねばならぬ。殊に「重ねて」を變じて、「こゝに」と言つたのが、一層國語化の味を深め、先例の有無を忘れしめる程、蕪村自らの言葉になつてゐる。支那の成語を引用して、之を國語化し、又た自己語化し得ない衒學者流に比して、眞に段違ひの技倆と言はねばならぬ。

疊音的音律に、感興の一部を托してゐるのであるが、其の音律の內面に、果てしもなく、又た撓みもなく、行き盡ざる旅情——淋しいとか、哀れだとかいふ、はつきりした情緒でなく、運命づけられて歩いてゐるやうな、又た或る限られた時間を、永久のやうに長く感ずる——の細やかさが籠められてゐる。

これらの句が先例になつて、夏野といふ季題を、明治以後の俳人は、餘程概念化してゐるやうに思ふ。それだけ、これらの句が、萬人の胸に響く或る迫眞力を持つとも見られるのである。

離別れたる身を蹈込で田植かな

「離別れたる」は「わかれたる」か「さられたる」か。いづれにしても、夫婦分れをしたことであらう。併し、「わかれたる」と言へば男女いづれにも通ずる。「さられたる」では、女の方に限られる。それによつて解釋は多少の相違を來たす。一體かゝる成語を使つて、それを音讀しない限り、訓讀の振り假名を加へるべきである。

「わかれたる」として見ると、(其一)夫婦別れをしたにも關らず、一つ田に身を蹈み込んで田植をする意にもなり、(其二)別れた亭主女房のいづれかゞ、相手の田に蹈み込むことにもなる。

(其三)夫婦分れをした恨みや悲しみ——とも限らないが——を抱いて、田植川の繁忙に身を投ずる意とも解されんではない。

「さられたる」としては、女に限られることゝなるから、これも(其一)昔の亭主の田にふみこむ場合、(其二)恨みを抱いて田植をする場合、の二樣の解が生れる。

又た一解として「蕪村句集講義」に、「離別れたる」をどう讀むか判然しないが、きぬ〴〵の朝の別れから田植に行く、田舍の戀を主題にしたとの子規說がある。

かやうに種々の解釋を生むのは、表現に缺陷のある爲めで、事相が作者に十分咀嚼されてゐないことを裏書きしてゐる。結局、小說的著想に追はれて、妥當な表現に至らず、內に藏るべき情緒が、餘りに表面化した罪なのであらう。部分的に言へば、「身を蹈み込んで」が、餘りに强調化され過ぎ、却つて不愉快な動作を見せるにも因るであらう。

尙ほ蕪村の草稿を見ると、明らかに「さられたる」と假名で書いてある。さすれば、種々な解釋も亦た生れないであらう。

「新花摘」に「けふはとて娘も出たつ田植哉」「泊りがけの伯母もむれつゝ田植哉」などがある。これは家庭圓滿の方であるが、少々甘い感じである。

それよりも「早乙女やつげの小櫛はさゝで來し」「雨ほろ〳〵曾我中村の田植かな」など主觀客觀の區別はあるが、情趣は透明で、又た純である。「餘得て歸る田植の男かな」、表現のいかめしい所に、却つて輕いユーモアがあり、「獺をうちし翁もさそふ田植かな」には、老農らしい雙分の威容が現はれてゐる。

狩衣の袖の裏這ふほたる哉

「狩衣」はもと鷹匠の著るものであつたのが、段々高位の人の常用衣になつたとの事。袖口に括りの爲めの紐の通つてゐるのも、始めはそれを搾つて袖口を締め、野外の働きに便したものである。高位の人の常用衣になつてからは、布が絹になり、夏の紗となり冬の裏つきとなり、種々色模樣の派手なものにもなつたといふ。

この句の場合も、無論平民でなくて、身分のいゝやんごとない人の上を言つたのである。紗の狩衣の袖の裏に光る螢を、たゞ見る螢よりも美しく感じた、たゞそれだけの句である。「源氏物語」の螢の卷に、源氏が澤山の螢をかくし持つて、玉葛姫の几帳の前に放すことがある。几帳の羅を通してめでたく光る樣も叙してあるから、それを出典としてゐるのかも知れぬ。

が、柔してどうであらうか。

むしろ、捕へたと思つた螢が、あらぬ袖裏を這つてゐる自分の經驗を主として、狩衣の美しさを借りて來たのでないであらうか。

さういふ類似の出典を求むれば、他にも種々無きにしもあらずであらう。自己經驗の想化と見る方が、蕪村に煩ひする意味が輕くなるやうな氣がするのである。

螢には、他にこれといふ作がない。叙景では「さし汐に雨の細江の螢哉」、又た一書生を痛罵した「學問は尻からぬける螢哉」位であらう。

こもりゐて雨うたがふや蝸牛

蝸牛は、普通雨天に活躍する。それまで殼の中に籠つてゐた蝸牛が、雨なら活動を開始するのだが、と殼の中で思案してゐる、其の實は雨になつてくれゝばいゝと念じてゐる、作者が蝸牛になつての擬人表現である。

「うたがふや」は全くの疑問ではない。どうも雨らしい、と疑ひつゝ肯定してゐるのである。動植物など非情の人格化も珍らしい手段ではないが、單なる見立てゞなく、其の物になり切

つての、擬人でなく、作者が却つて非情化してゐる例は少ない。殊にそれが、當座の酒落や穿つたウキットでなく、非情そのもの、個性と情意の眞を失なつてゐない例も少ない。

しの、めや鵜をのがれたる魚淺し

長良川の鵜飼を見た經驗のあるものは、長良川原の夜明の景を、無礙に想起する句である。淺瀨にチョロ〳〵する小魚を見て、昨夜の鵜飼を思ひ、それらの魚は、鵜の嘴をのがれて、命拾ひをした仲間だ、と或る憐みをそれらの小魚に感じてゐるのである。

「鮒桶を洗へば淺き游魚哉」もある。「魚淺し」は印象的ではあるが、同時に文字の扱ひの巧妙さを極めてゐる。

殿原の名古屋顔なる、鵜川かな

「殿原」の殿は男子の敬稱、「ばら」は其の複數を意味する。

「名古屋顔」名古屋人らしい顔、どういふ顔のスタイルなのか判然しないが、こゝでは顔のスタイルをいふのでなくて、名古屋人らしい、人品恰好をいふのであらう。

「鵜川」鵜飼をする川、こゝでは長良川の、金華山下あたり。

岐阜の鵜飼は、鵜を見るのが從で、納涼的の遊山氣分が主である。酒肉を具し、絃歌を伴なひ、一夕の歡樂を盡くす、むしろ豪華を誇る清遊である。自然昔は富裕な名古屋人の遊び場所で、土著の岐阜人は、却つて田舍者扱ひされた程だつた。

句は其の歡樂境たる現實の鵜川で、あの船もこの船も、いづれも名古屋者らしい豪華を競つてゐる面々であろといふのである。

鵜飼と言へば、人生に比喩した苦難を、如何にも悟り顔にいふ慣例の中に、歡樂境たる實況に著眼して、有りのまゝを寫生した、それも蕪村にしては、何ら異を立てたことではなかつたであらう。

今日までの史料では、蕪村が岐阜に遊んだ事實は考へられない。若し岐阜を通過したとすれば、江戸から上京する際か、又は青年時代に、江戸に下る途中か、この二回の機會しかない。

他人からの見聞によるのでなく、鵜飼の實況に通じてゐるらしい、これらの作例から押して、鵜飼見物の蕪村を想望することも、必ずしも無稽ではないであらう。殊に「夜やいつの長良の鵜舟曾て見し」の、如何にも遠いことを追懷するらしい句のあるに徴して、下江上洛の當

時のいづれかであつたことが、いよ／＼事實として具體化する。

外に「老なりし鵜飼ことしは見えぬ哉」は謠曲「鵜飼」に因むが、それとは全く別趣のある哀れ。「誰住んで樒流るゝ鵜川かな」は「樒」が思はせぶりで、しつくりとしない恨がある。

夏百日墨もゆがまぬこゝろ哉

「夏百日」「げ、百日」、「げ」は結夏、夏行、夏籠、夏書などゝいふ、普通四月十五日から七月十五日まで、九十日間、佛者の夏の修行。

句は夏書——經文を寫す——の場合で、百日の永い間、墨も歪まぬ位、謹んでゐる心かなの意。夏行の嚴肅な、空氣の引き締つた心持。墨は磨りかたによつて曲り易いものであるから、それを眞直ぐに磨ることが、夏行の心持の象徴にもなるのである。

尙ほ、「墨もゆがまぬ心かな」は、未來に期待する意味に、墨もゆがまないやうに心がける、とも解釋され、又た夏行中の現在の心境とも見られ、或は夏行を終る頃の、過去を顧みる心持にもとれないことはない。が、其のいづれにしても、夏行の淸淨な空氣を感ずればいゝのである。

この句初案は「夏百日墨をゆがまぬ心かな」であつたらしい。「を」は强く「も」は柔らかである。强いだけに、墨に注意が集注され、餘りに墨を中心に考へ過ぎる嫌ひがあるので、「も」と柔かくしたのかも知れぬ。

慶子病後不二の夢見けるに申遣す

降かへて比枝を廿ヂの化粧かな

「慶子」は俳優中村富十郎、女形の名手。それが、病快癒して不二山の夢を見たといふので、めでたい夢を見た、とそれを祝つてやつた。

「降かへて」「ふりかへて」。

「比枝を廿ヂ」「ひえをはたち」。

「伊勢物語」に業平が富士を見る條に「その山をこゝにたとへば、ひへの山をはたちばかりさねあげたらんほどして」とある。又た「富士の山を見れば、五月のつもごり」は「萬葉集」の山邊赤人の、富士山を詠んだ歌うふれり」ともある。この「五月のつもごり」は「萬葉集」の山邊赤人の、富士山を詠んだ歌に「富士の嶺にふりおける雪はみな月の十五日（望）に消ぬれば其の夜降りけり」から來てゐるのでもあらう。それやこれやが、この句の出典となつて、結句「降りかへて」と言ひ出した

のである。

富士の雪は、水無月に消えても、其の夜すぐ又た降りかはるやうに、慶子も病氣はしたが、すぐ快癒して、又た新たな化粧をする、と雪の白いのと、白粉の白いのも掛け合せてゐるのである。

役者に贈る句など、も少し早わかりのするものでよさゝうであるが、一ひねり二ひねり、少少ヤニコイところまで行くのが、蕪村の癖なのであらう。

石工の鑿冷したる清水かな

「鑿」は石工の石を切り、又た彫る道具。「たがね」ともいふ。いろ／＼種類がある。

清水は普通に、井戸側などのない、自然に湧く水をいふから、この場合は、山の石を切り出してゐる石工で、それが鑿を清水にひやしてゐる光景。

金屬性のものを冷してゐるので、一層水のつめたさを感じたのである。餘計な技巧のない、棒を引いたやうな淡泊さに同感される。

併し、鑿を冷すのは、暑中金が燒けるからであるか、又た禿びた先きを尖らす爲め鍛冶を加へたものであるか、その邊は判然しない。

この句初案は「石切の」であつたらしい。外に「石切の(又た石工の)飛火流る、清水かな」もある。

どこかの石切山を見て來た實景なのであらう。

草いきれ人死居ると札の立

「草いきれ」、いきり立つた茂つた夏草。

「人死にをると札の立つ」と讀むのであらう。

文字通り、人が死んでゐると書いた制札が、むつとするやうな草いきれの中に立てゝあるのである。

行倒れ、行旅病者の死などが聯想される。

極端に不愉快な素材を捕へての詩化手段、草いきれがムツと讀者の面を打つてくる、怪談話をきくやうな興味、かういふところにも詩のある警告のやうな作である。

いくら交通不便な昔でも、行倒れを始末もしないで、たゞ死人があると札を立てるやうな事實があり得るかどうか。さういふ事實の穿鑿は、餘りにリアルに物を考へ過ぎるやうである。

さういふ場合を作者が創造して、草いきれの感じを象徴したとすれば、其の創造力に敬意を表していゝであらう。

律院を覗きて

飛石も三ツ四ツ蓮のうき葉哉

「律院」は律宗のお寺。「飛石」は、飛び〳〵に庭に置かれた石、庭園の一つの裝飾として。

律宗は、僧侶の戒律を守ることの最も嚴格な宗旨である。其の爲めといふのでもないであらうが、寺内の庭園なども、それに準じて、整頓し又た清潔であると言はれてゐる。

律宗のあるお寺を覗くと、そこらに三ツ四ツ飛び石がある、それと歩調を合せるやうに、蓮の浮葉も見えると、庭の様を見たまゝに叙して、矢張律宗のお寺らしい、と其の清らかな様を感じてゐる。

蓮の浮葉の、丸く水面に浮いてゐるのが、飛び石と相似た恰好であるところに、興味の中心はあるのであらう。見様によつては、この飛び石は池の中に置かれてゐるので、浮葉が其の側にある場合であるかも知れぬが、この句では、飛石と浮葉がどういふ關係の位置にあるか判然

しない。

又た他の見様によつて、全く別な解釋も生れる。「蓮のうき葉かな」を「蓮のうき葉の如きかな」の意として、飛び石の三ツ四ツあるのを、蓮の浮葉と見立てゝ興じてゐるとするのである。若しこれが「飛石の三ツ四ツと」と「と」の一字が加つてゐるとすれば、かやうな解釋は生れないのであるが、このまゝでは、全然誤つた解釋とも言はれない。が、それにしても——蓮の浮葉は眼には映らないが——初夏らしい浮葉頃の蓮のすが〳〵しさを心に感じてゐるのであるから、主たる句の感興にはさまでの差違はないやうである。

白蓮を切らんとぞおもふ僧のさま

僧の様子が、白蓮——びやくれん——を切らうと思うてゐるらしい、と白蓮と僧形の對照に興味を持つた作。切らんとぞ思ふ、に拘泥して、蓮に手をかけてゐるとか、手に鋏を持つてゐるとか、それを形ち動作の上に見ようとするのはどうか。切らんとぞ思ふ、は全然作者の主觀なのであるから、どういふ形體動作から、さやうに斷定したかは問ふ必要はないやうである。ただ懷手して坐つてゐるのでも、羽翼を得て大空を飛ばんとしてゐるとも、牙を得て地にもぐ

らんとしてゐるとも、主觀的觀點は作者の自由であるからである。

たゞ、切らんとぞ思ふが、白蓮と僧の對照を、より詩化するか、又た非詩化するか、それだけが殘された問題なのである。

附け加へて置きたいのは、僧と蓮の對照を、客觀的に見て、正面から僧の動作を叙する普通の手法によらず、僧の心理に突入して、而も其の意欲をも斷定した、大膽ともいふべき變つた叙法であることである。大方蕪村自ら白蓮に特殊な感興を持つてゐたので、僧を借りて其の希望を述べたのであるかも知れぬ。

變つた手法ではあるが、白蓮と僧の對照など、聊かお誂へ向きといふ感があり、又た多少役者の科白の過ぎた嫌ひなきにしもあらずであらう。要するに、机上の句で、器用に出來てはゐるが、情趣は深まらない憾みがあるやうである。

堂守の小草ながめつ、夏の月

「堂守」は、餘り大きからぬお堂の番人。

「小草」は、さして伸びてゐない草、同時に餘り澤山もない僅かな草の意。

「小草ながめつ」に、御堂に端居して、見るともなく視線を投げてゐる、堂守の放心の體が窺はれる。

晝間は參詣人もあつて、紛れた暮しをしてゐるものゝ、夜になつた孤獨な堂守の或る淋しさが、月の光りと相待つて、ほのかに滲み出てゐる。夏の月は、晝の暑さをさます心持もあるが、秋の月のやうに、月に對する享樂を意味しない點、この場合に適切な添景となるやうである。

これに似た「殿守のそこらを行くや夏の月」もある。

又た「遠淺につはもの舟や夏の月」「ぬけがけの淺瀨わたるや夏の月」「賊舟をよせぬ御船や夏の月」など軍記物を素材にした著想もある。

雷に小屋は燒れて瓜の花

落雷の爲めに、番小屋が燒け失せた跡の瓜畑の光景。

慘澹たる自然の暴威の跡の靜かに落著いた光景を感じてゐる。瓜の花が其の象徴なのである。

落雷に詩美を見出した蕪村の神經の、如何にも四通八達、觸るゝもの皆燒く慨のあるに驚歎される。

「瓜小屋の月にやおはす隱君子」と洒落れたのがあり、「あだ花は雨に打れて瓜畑」と細かい寫生をしたのもある。

蕪村が結城下館邊を流浪してゐる時分、川船宿の帳面附をしたといふ口碑があり、又た貰つたなりの夏羽織で、鮨かなんか掬つて來たといふ逸話もあるが、其の時分ボンヤリ其の日を過ごさないで、環境の自然を、精細に見學したのでないかとさへ思はれる。百姓ですらが見過ごすやうな野外の光景の、彼の詩囊に盛られてゐるのは、畫事に携つて、寸閑を得なかつた晩年の收穫であるまいと思はれるのである。

大佛のあなた宮樣蟬の聲

大佛は京都方廣寺、其の東に妙法院といふ宮御門跡がある、俗に妙法院宮と稱してゐる。それで「あなた宮樣」といふ。

名所の地圖的並列のやうであるが、それを望む氣持は、たゞ名所を指示してゐる許りではない。敬虔なといふより、慕はしい懷かしいと言つた、何心なく湧いて來る心のときめきである。

自然蟬の聲も、暑いとか騷々しいとかいふのでなく、大樹鬱蒼たる中に鳴く、それすらが、

慕はしい氣持に伴奏するものにきゝなされるのである。

「あなた宮樣」の言語內容とでもいふものが、豐かな思慕の情を籠めて響くのである。

「蟬啼くや僧正坊のゆあみ時」京都名所としての鞍馬もある。「蟬鳴くや行者の過ぐる午の刻」

「蟬なくや行人絶る橋柱」一つは行人あつての景、他は人影なきの景、有無ともに、其の所を得てゐるであらう。

掛香や啞の娘のひとゝなり

「掛香」「かけかう」、又た懸香と書く。

「繹氏要覽」といふ書に「比丘房內臭、佛許レ用二香泥一、泥レ之、猶臭、應二四角懸レ香」とある に始まるといふ。

「鹽尻」に「近世宮々より關東諸家へ掛香を贈らせ給ふ、按ふに是れ五月五日の藥玉の法なるにや云々」

「嬉遊笑覽」にも懸香の由來と處方を說き「掛香は小袖のたゝみたるあはひに入れ置き、衣桁などにかけたるはよし、夏のあつき頃、かけ香のにほひ甚しきは、初心なるものなり、たき物

など小袖にとめる事なほいやしきものなり、そらだきにはたき物よし、小袖帷子共に伽羅をたき給ふべし、ふせ香にかけてとめるより、身にきてとめたるがよし、あたらしき小袖にとめるは、あつき湯を中におきてとめねばとまらぬものなり、火加減大事なり云々」

以上で大體掛香のどんなものであるかゞわかるであらう。

夏の汗臭い匂ひなどを避ける爲めに、香を袋に入れて、衣桁などに懸け、其の匂ひを衣裳に滲ませるらしい。

「ひとゝなり」は、成人卽ち一人前に生ひ育つた意。

「啞」は言ふまでもなく、口のきけない不具者、俗に啞の娘は美しいといふ。如何にも美しい娘が、人並みに香の匂ひのする羅の派手やかなのを着てゐる——それが啞である——姿を憐んだのである。

「ひとゝなり」の中に、哀愁が籠められてゐる。表面に「哀れなり」などゝ言はないだけに、其の哀れは深い。

繪團のそれも清十郎にお夏かな

「繪團」「ゑうちわ」。繪の書いてある又た版にしてある團扇。

お夏清十郎は、西鶴の「五人女」、近松の「五十年忌歌念佛」にも書かれて、當時評判になつた若い戀人同志。「向ふ通るは清十郎ぢやないか、笠がよう似た萱笠が」といふ俗謠なども流行し、又た芝居狂言にも度々仕組まれた。自然ありふれた雜用の團扇の繪姿にも書かれたのであらう。

「それも」はこの場合、これもそれもの複數を意味する。お夏清十郎の繪團扇が、いくつも——又た度々——眼につく心持。其の熱烈な戀話を、押しつけ聞かされるやうな、古い話を新たにするやうな、それによつて又た新たな憐れを感じてゐるのであらう。少ししつこい、と言つた氣分も、かすかながら、其の憐れに織り込まれてゐるやうである。

「清十郎」を「せじゆらう」と詰めて讀む。

ともかく句法の變つた點で目新らしい。

手ずさびの團畫かん草の汁

「手ずさび」は、手なぐさみ。

草を絞つた汁で、手なぐさみに團扇に何かかいて見ようか、かいて見たいの意。

これこそ眞に蕪村日常生活の一斷片、そこに其の全生活の雰圍氣をもかすめてゐる。別に醉餘の戯れでもなければ、郊外遊樂の餘興とも限らない。生活苦に追はれてゐる者の、或る休息を欲する、自然の欲求の一片影でもある。

殊に蕪村自ら「俳諧物の草畫」と言つた俳畫に、或る自信を持つてゐた、心の樂しさの告白でもあるやうである。

几董に與へた手紙の中に

かけ物七枚、よせ張物十枚

右いづれも尋常の物にては無之候、はいかい物の草畫、凡海内に並ぶ者覺無之候、下直に御ひさぎ被下候儀は御用捨可被下候、他人には申さぬ事に候云々。

自賛をこめた——半ば諧謔ではあるが——ものがある。それと對照すれば、句意更らに別趣を生ずるものがあるであらう。

涼しさや鐘をはなるゝかねの聲

變つた言葉づかひで有名になつた。いろ〳〵の解釋も生れるが、鐘を撞くのを、比較的近い

距離で見且つ聽く時の心持とするが、就中妥當のやうである。一つゴーンと撞く、其のゴーンの餘音が、波を打つやうに、あとから〳〵ゴーン〳〵とつゞく。それを段々鐘から離れて往くものゝやうに思つた。さういふ即興感が土臺となり、それに鐘の聲は罪業消滅の因となる傳統觀念なども加つて、かやうな機智的言葉を生んだのであらう。「涼しさや」は多分に主觀的な、罪業消滅的な、身輕になつたやうな氣分が象徴化されてゐる。

鴨河にあそぶ

川狩や樓上の人の見しり貝

「川狩」は川の漁、主として投網、さし網、たて網などの漁。松明をともす夜漁を「夜ぶり」ともいふ。

鴨川に遊んだ即景。自ら川狩の仲間になつたやうな心持——事實は自ら川狩をしたのか、たゞ傍觀してゐたのか不明——で、そこらの樓上にゐる人が、見知つた顏をして、こちらを見おろしてゐるのである。

あたりに人家もないやうな、又た川幅もずつと廣い、田舍の川狩と違つて、都會の川狩は、

ホンの一時の慰みと言つた遊び氣分が濃い。お互ひに何にも知らない他人同志でありながら、それが見知つた顏をしてゐる、矢張京都の鴨川らしい風景である。不言の間に、人と人との親しみが籠つてゐる。

「雨後の月誰ッや夜ぶりの脛白き」「月に對す君に投網の水煙」など、いづれも鴨川風景、この川狩の連作と見ていゝであらう。

夕立や草葉をつかむ、むら雀

「草葉をつかむ」は、草葉にとまる、安らかな姿でなく、それをたよりにする急場の趣がある。雀の面くらつてゐる樣が巧みに描かれてゐる。自然に、夕立の勢ひの强さが具象化されてゐると言つていゝであらう。

「白雨や門脇殿の人だかり」の「門脇殿」が、如何なる場處であるか知らない者にも、大きな門を想像せしめて、リズムの上からも好感を懷かせる。——「平家物語」にある平敎盛の宿所「六波羅の惣門の脇におはしければ、門脇の宰相とぞ申しける」とある。

「双林寺獨吟千句」と前書した「夕立や筆もかはかず一千言」は、先づ夕立を比喩に、獨吟千句を作る心の昂ぶりと、息もつかず筆を下す勢ひに借りて來た。或は其の千句興行中に、爽快な夕立が降つた實況とも見られる。

以上いづれも夕立の豪快さを諷つてゐる。

旅意

廿日路の背中にたつや雲の峰

「雲の峰」は「夏雲多二奇峰一」の陶淵明の詩句から轉化したのであらうが、夏を象徴する天象の著しきものである。

「背中に立つや」は、單にうしろに立つ意でなく、背近く立つ、燒きつく心持を言つたのであらう。二十日もかゝる——永い旅をする——苦しい旅意に外ならぬ。苦しい上に、尙ほ壓迫感をうけてゐる。蕪村の東北行脚の體驗らしくもある。

「雲の峰四澤の水の涸れてより」は、陶淵明の詩句をかりての雲の峰感である。「揚州の津も見えそめて雲の峰」は謠曲「唐船」を踏へての作。どうも出典のある句は、一應はそれと首肯されるが、作るが爲めに作つた、幾分の餘處々々しさを如何ともし難い。

日歸りの兀山越るあつさ哉

「龜山へ通ふ大工や雉の聲」「兀山や何にかくれて雉の聲」を一つにして、夏へ延長したやうな作。

宮島

薫風やともしたてかねついつくしま

「薫風」は「史記」の五帝紀に「南風之薫兮可以吾民之慍兮」から出たのであらう。夏は大體に南風の多いところから、又た青葉を吹きわたる氣持から。

「俳諧歳時記」に、宮島の大祭は、例年六月十五日——十七日で、管絃の船の出ることなどがある。又た其の大祭當夜、嚴島全島にある燈籠に灯を入れるといふ。

「ともしたてかねつ」は、灯しても〳〵消える、ともし難い、を強めて言つたのであらうが、若し燈籠に火を入れる大祭當夜の樣とすれば、其の語氣を強めた作者の氣分も、幾分享け容れられるであらう。

嚴島といふ地形から言つて、又た大明神の鎭座ます、其の建築の特殊性——海上に建てられた、特異な廻廊のある宮居——から言つて、「薫風」はうつてつけであるとも見られる。

清くすが〳〵しい風に、灯のチラ〳〵瞬きし、又た明滅するやうな光景であらう。

秋之部

秋立や素湯香しき施藥院

「素湯香しき」「さゆかんばしき」。「施藥院」「せやくゐん」。「職原抄大全」に「天平寶字元年十二月、勅普爲救二養疾病、及貧乏之徒一、以二越前國墾田一百町一、永施二山階寺施藥院一」とあるから、隨分古代から設けられた。又た「京之水」に「施藥院洛陽九條坊門の南、西洞院の東なり、舊趾を施藥院といふ當院は藤原氏の祖先上奏によつて、諸國の藥種を收め、病者を養ひ、老衰して無據輩、又は孤獨等を此所に於て保育あるなり」とある。「拾芥抄」には「施藥院、唐橋南室町西」ともある。

施藥院の建築狀態が不明であるが、京都大阪邊の大寺院の實狀によると、境內に茶呑所があつて、其處に大釜をかけ、いつも湯を沸してゐる。夏の間は、三昧湯など、稱へて、藥物を混じる例であるが、秋になれば固の素湯になるともいふ。施藥院にも、應急施設として、さういふものがあつたのかも知れぬ。

施藥院の場處柄だけに、素湯の沸き立つてゐるのも、どこか匂はしい。立秋といふ、永い夏から蘇る季節感が、更にそれを深め强めるのである。

尤も句面には、素湯がどうなつて、どこに位置してゐるのか、又た釜にたぎりつゝあるのか一杯の茶碗にうけてゐるのか、さういふ場合も亦た判然してゐない。要は「素湯」の如き、平生氣にとまらないやうなものに、立秋感の働らく、そこらの實在的景物を超越しての直感である。「秋たつや何におどろく陰陽師」も相似た手法、恐らく蕪村の想定スケッチなのであらう。「秋來ぬと合點させたる噓かな」は、實際經驗らしいが、少々鼻につく臭味がある。

初秋や餘所の灯見ゆる宵のほど

燈火親むべしを引用するまでもなく、火に親しみを覺える淡々たる情趣。施藥院、陰陽師などの道具立てなしの素劇類似、却つて讀み飽きない滋味があるやうである。

高燈籠滅なんとするあまたゝび

「高燈籠」は盂蘭盆に揭げる燈籠を、高く杉丸太の先きに灯す種類。「用捨箱」に「六月晦日長さ五六間の杉丸太の上に、三角のいらかを結、杉の葉にて包…燈籠は辻番の行燈の形にちひさく作、上開き下すぼませ…玄關と臺處の間の廣みに建、七月朔日より晦日まで、毎夜暮六

ッより明六ッまでともす、一向宗には見えず、他宗はみな〳〵如此云々」とある。

「滅なんとする」は「きえなんとする」。

灯籠の灯の心もとなさは、衰れをさそふのであるが、それが高燈籠であるといふのは、聊か藥の利き過ぎた感じ、更に「あまたゝび」は、調子の張つたところ、一應はうなづける。併しよく味はうと、少々仰山な、そこまで言はずともと言つた、自然感を殺ぐ嫌ひがありはしないか。

どうも燈籠に蕪村らしい句はないやうである。

十六日の夕、加茂河の邊りにあそぶ

大文字や、あふみの空もだゞならねゝ

七月十六日の夜、京都東山の北嶺如意ヶ岳の中腹に、火で大きく「大」の字を現はす——一劃約百間内外、劃内に薪を積んで焚く——それを普通に「だいもんじ」といふ。盆の供養の一つで、丁度鴨川邊がいゝ見所である。

大文字の火が盛んに燃えあがる、それにつれて近江の方の空も、たゞごとでない氣合がするといふのである。大方大文字の火焰の空を染めてゐるのが、近江の方へも映り榮えてゐるのであらう。

大文字を純景觀化して、且つ實情さもあるべく、寫生的にありのまゝを捉へてゐる。毒氣のない句である。

「相阿彌の宵寢起すや大文字」の方は、多少の作意がある。相阿彌の宵寢を起す一事件、大文字のともる一事件、何の因緣も關係もないらしい兩事件を結びつけて、一つに纏まつた情景を生む。詩美構成上の變つた手段が目につく。尤も作者自身には、大文字を見る爲めに、相阿彌の宵寢を起す、大文字に對する感懷の一貫したものであらうが、一句の出來上つた效果から考へると、何らかの作意のあるものゝやうに見える。たゞ下五「大文字」と言ひ放したのは、定型律の已むを得ない結果とは言へ、ちと大雜把であるやうである。

英一蝶が畫に贊望れて

四五人に月落かゝるおどり哉

「英一蝶」は江戸中期の畫家、其角と親交もあつたらしい。蕪村初期のまだ「四明」「朝滄」を號してゐた頃は、一蝶の畫模を模してゐたやうでもある。

この句、盆踊りの畫賛として書いた蕪村の畫もあるが、其の僞作も亦た多いので、蕪村の名句のやうに有名になつた。

「月落ちかゝる」は、月の光が四五人を照らしてゐるのでなくて、西の空へ月の落ちかゝつた、夜の更けた樣である。一時は大勢出てゐたでもあらうが、一人去り二人去り、殘り四五人になつた踊のさびれた趣きである。

一蝶の略畫か何かで、僅かな踊り手の手振りを描いてゐたのを、蕪村がさやうに見立てたのであらう。畫賛だから、といふ逃げ場所もあるが、景情の空々しい、有名になり甲斐のない作である。

いなづまや堅田泊りの宵の空

「堅田」は近江八景の一つ、琵琶湖を背景にした稲妻風景。

「いな妻や八丈かけてきく田摺」——菊田摺、八丈縞の一種——「稲妻の一網うつや伊勢の海」——阿漕の故事——「稲妻にこぼるゝ音や竹の露」——など、いづれも洒落や小細工に落ちた作の中に、湖上の一風景のみ、穩やかで素直である。

飛入の力者あやしき角力かな

田舍の草相撲には、飛び入り勝手といふのが今でもある。其の飛入りの力者が、驚異に値する相撲だつたの意。

其の力者が、幾人もく投げ倒したとか、驚くべき怪力を見せたとかいふのであらうが、さういふ内容細部はわからない。

又た「あやしき」といふ言葉から、飄然と來て怪力を揮ひ、又た飄然と去つた、ありやァ天狗の化身か、と言つた妖魔氣分も感ぜられないにも限らない。

蕪村の妖怪好き？　から言へば、或はそれが正しい解釋であるかも知れない。

「夕露や伏見の角力ちりく〳〵に」は、盛んなりし後の淋しさを感じて、しんみりしてゐる。「夕露」の「露」が、實在的であるより、感傷的象徴であるのもいゝ。相撲場の光景であるのを、「角力ちりく〳〵」も、眼よりも心を主とした用語である。「負まじき角力を寢物語りかな」「訪ひよりし角力うれしき端居かな」「角力取つげの小櫛をかりの宿」「二つ三つよき名望まるすまひ取」など實情に卽して、それく〳〵に興趣がある。

遊行柳のもとにて

柳散清水涸石處々

「やなぎちりしみづかれいしところ〴〵」と讀む。

「遊行柳」は下野芦野附近にある、謠曲「遊行柳」にも仕組まれた、西行の歌「道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ」で有名な柳。芭蕉の「奥の細道」にも、「清水流るゝの柳は芦野の里にありて、田の畔に殘る、此所の郡守戸部某の此柳見せばやなど、折り折りに、の給ひ聞え給ふを、いづくの程にやと思ひしを、けふ此柳のかげにこそ立より侍りつれ田一枚植て立去る柳かな」と、更にこの柳を名高くした。

寶暦二年——蕪村三十七歳——出版の「反古衾」には「神無月のはじめの頃ほい、下野の國に執行して、遊行柳とかいへる古木の影に、目前の景色を申出はべる」といふ前書がある。寶暦二年には、京都双林寺の會に顔を出してゐる蕪村であるから、この句はそれ以前、結城、下館、烏山邊を往來してゐる時分の作と推定される。

作者の言ふとほり、目前の景色を其の儘に、風物の衰へを感じてゐる。「清水涸れ」といふのも、西行の歌に因んでゐる。

目前の景色を其のまゝ寫生したので、何らの特異性を持たないやうであるが、寶暦前後江戸を始め、各地俳風の沈滯と墮落は、たゞマンネリズムの糜爛した、殆んど言語の遊戯に過ぎなかつた中に、かやうな寫生の手法によつて、我が主觀を客觀化する正しい詩線を道破した其の發明は、後に安永天明の盛容を成す先驅として、確然と記錄されねばならないのである。

「古今短尺帖」——毛越編、寶暦元年——の跋に「余平生二三子と古今俳諧の異同を論じて、かたはら春秋に入、今や俳諧に覇たる者、各其風旨を異にし、彼を謗り是をなみし、肱はり頬ふくれて自宗匠と徇へ、或は豪富を鼓吹し、孤陋を馳驅し、多く未練の句をならべて撰に備ふ、識者目を覆てすつ……おもふに雄才の子興て、かならず一匡の功をなすもの出む、夫ちかきにあらんか云々」と大言壯語して、時流を罵倒し、暗に自ら一匡の功を成す者の如き口吻を漏らしてゐるのを見ても、當時の意圖の那邊にあつたか、略ぼ推知せらるゝのである。

この「古今短尺帖」には、「猿どのゝ兎とひ行く夜寒かな」を自署出句してゐる。「柳散り」の句と共に、蕪村句集中、最古の作にかゝる。

殊に「柳散り」の表現形式の、殆んど定型を無視したやうな破調である點、「ちり」「かれ」

「ところ〴〵」と舌音類似の硬音を疊みかけたところ、それが偶然の結果であると見るべきであらうか、それとも俳句の形式に、果た微細な音の內容に、何らか意識し期待するものゝ潛在してゐたと解すべきであらうか。

蕪村の心的過程として、重大な意味を持つ一句であることを看過してはならないと思ふ。このことは、蕪村略傳の中にも反覆述べて置いた。就いて參照されたいのである。

几董が「蕪村句集」を編む時、この句に限つて、一字の假名を交へなかつたのは、それこそ偶然の思ひつきなのであらうが、句の特殊性を想察せしめるいゝシンボルとなつた。

尙ほこの句法に類した「茨老いすゝき痩せ萩おぼつかな」などが後にもある。

薄見つ萩やなからむ此ほとり

すゝきを見たから、萩もないことはないであらう、このほとりの意。

萩芒と秋草の中でも、口に言ひ馴れた關係上、萩も見たいもの、と言つた希望の心持も含まれてゐる。秋の草花を愛撫する情趣の片影である。

安永二年九月廿四日、京都油小路に病臥してゐた和田嵐山を、折節上京した伊勢の三浦樗良、

門弟高井几董の二人を具して訪問し、嵐山の勸めるまゝに四吟歌仙の競吟となつた。其の時この句が第一歌仙の立句となつてゐる。後に「此ほとり」と題して、其の四吟歌仙を一冊子として公刊した。

この句の發案「薄見つ萩程ちかく思ふ哉」とある。

女郎花そも莖ながら花ながら

「そも」は「抑」の略とも見るべく、「扨て」と同じに一種の發語であるが、禪語の「そもさん」のやうに、「いかにも」と言つた意もある。

「莖ながら」の「ながら」は「さながら」の略。「そのまゝ」の心持。

女郎花の姿を詠歎する言葉が、リズミカルに流れ出た、と言つた句。一々の言葉にさしたる意味はない。其のリズミカルな音樂的波動を味ふべきである。

芭蕉に「ひよろ〳〵と尙ほ露けしや女郎花」がある。それが先入感にあつたのであらう。この芭蕉の句をもぢつて、几董の姿を寫生した畫に「ひよろ〳〵となほ露けしや男郎花」と題し几董の背高い樣を諷するやうな戲畫が蕪村にある。

太祇にも「山吹や葉に花に葉に花に葉に」などがある。十七音を如何にリズミカルにするかの好標本といふべきであらう。

白萩を春わかちとるちぎり哉

「わかちとる」は、宿根草は春根分をする例であるから、こゝでも根を分けて取るの意。

「ちぎり」は約束する。

春には根分けをして取る、と白萩に約束するので、この「春」は來年の春を意味する。

かう言つて、白萩のめづらしさや、花の哀れさを匂はさうとする、理智の手段が働くのは、月並俳句の常套手段である。たゞこの句は「春わかちとるちぎり哉」の、むしろ無理と思はれる巧妙な語勢によつて、理智の影が薄められてゐる。

詩線の上を綱渡りするやうな句である。

澗水湛如レ藍（かんすゐたゝへてあるごとし）

朝がほや一輪深き淵のいろ

「澗水湛如藍」は「碧巖錄」第八十二則に「山花開似錦」の對句として出てゐる。花紅柳綠と言つたやうな、大悟徹底の形容であらう。

この碧巖錄の語を、朝顏の濃い藍色の花に想ひ出して、眞に一輪の花の、澗水の深い淵のいろをしてゐる事よ、と感歎したのである。

視線を凝集したたゞ一輪の花に、魂が融け込んでゐるのである。

この句は、次ぎの「朝顏や手拭のはしの藍をかこつ」と相竢つて、其の感じを深めるであらう。手拭のはしを染めてゐる藍のいろは、朝顏に比して、何といふイヤな色だ、とかこつてゐる。朝顏の天然色讃美の聲である。

蕪村が畫家として、色に敏感な素質をこゝにも見出すことが出來る。

夜の蘭香にかくれてや花白し

蘭は香ひのいゝ花、夜になつては尙更ら其のかほりが高い。あたりの暗い爲め、其の葉も姿も見えない、それが「香にかくれてや」で、たゞ花の白いのばかりが、眼に見える――言はゞ幻影のやうに――といふのである。

蘭は古の哲人などの玩んだ例もあつて、高雅な、世を捨てた幽人幽居の聯想もある。「香にかくれてや」は、その邊からも、幾分の因緣を引いてゐるであらう。

併し「夜の蘭」と置いて、夜の氣分を感ずるよりも、次ぎの「香にかくれてや」を呼び出す前提のみに使はれてゐるのは、定型上已むを得ないとしても、贊同し難いものがある。「夜の蘭」と先づ畫に對する時間を限定しないで、自ら夜を感じて來る雰圍氣を漾はすべきでないであらうか。

「香にかくれてや」も、巧みな表現ではあるが、言葉の巧みさがさきに立つて、感情は藻ぬけになつてゐる憾みがある。

それよりも「蘭夕べ狐のくれし奇楠を炷かん」の方が、潔い妖怪味を交へて、作者の感じてゐるものを直截に表現してゐる。

「夜の蘭」と「蘭夕べ」は相似た語法であるが、全然素質が違ふ。「蘭夕べ」は「宵の蘭」の時間限定語ではないのである。蘭に夕べを感じてゐる感情流露語なのである。

身にしむや亡妻の櫛を閨に踏

「身にしむ」といふ俗言が、いつ頃から俳諧に在つて、秋の季感を表示するものになつたのか。「御傘」に「秋なり、連に二あれば、誹に三あり、身の字人倫になる也、溫、凉、ひやゝか、すさまじ、ひゆる、かんずる、熟する等に皆二句去也」とあつて、連歌時代からの成語であることを明らかにしてゐる。

亡き妻の面影をまだ忘れ得ない、悲痛の極みを嘗めてゐる主が、其の日頃挿してゐた櫛を不用意に蹈んだ、其の場所が又た寢間であるといふので、身に沁む思ひを、四ところ責めといつた風に責めつける句である。

蕪村の細君名を「とも」といふ。どうも初婚らしく、良人の死後まで健在であつたから、この句は蕪村の小説であると言つていゝ。

「あぢきなや蚊帳のすそふむ魂祭」の方が、淡泊でいゝやうに思ふ。が、最近フランス消息によると、パリ人の俳諧禮讃者の中に、この句を推稱してゐるのがあるといふ。と言へば、西洋人の好きさうな、油濃いと言つた感がしないではない。

朝霧や杭打音丁々たり

「詩經」に「伐木丁々」の成語がある。「とう〳〵」と讀むらしい。

蕪村の草稿には「杭ヶ」と假名が送つてある。

「杭打音」、「くひうつおと」か「くひぜうつおと」か。

霧のかゝつてゐる中に、杭を打つ音をきく、一種の爽快感であらう。例の漢字を驅使して、其の音に微妙な餘韻を與へてゐる。

この場合「くひぜうつおと」と七音に讀まなければならない理由はないやうに思ふ。「くひうつおと」の六音の方が、却つて「とう〳〵たり」の音調にそぐふやうでもある。

「朝霧や村千軒の市の音」も別な音感であるが、音味は遠心的音と求心的音と、廣狹鋭鈍、一は捕捉すべからず、他は耳底を貫く、全く相反する極端と極端であるのも一興である。

もの焚て、花火に遠きかゝり舟

「もの焚いて」は、火を焚くとか、木や薪を焚くといふ程明らかでない、焚火の明かりの意。

「かゝり舟」は碇泊してゐる舟。自然小舟でなく、外海を航海する程度の船。

季感を主潮とする俳句も、自然の諸相に接近して行けば、季感の稀薄になる、放射的になる、

又たそれをホンの一添景とする複雜な、混沌とも見ゆる實在性に觸れなければならなくなる。それを季感主潮の原則に準じて、其の中核を捕へようとすれば、其の複雜な自然性が歪曲される。と言つて、其の複雜性を如實に表現しようとすれば、主觀の透徹しない、景物の堆積となる。

この句は、さういふ表現の惱みに對して、好指針を示す、俳句の一權威ともいふべき、重大性を帶びてゐると見なされる。

花火といふ季題をめぐつての自然の諸相は、其の空音をきく程度の遠隔の地にまで擴げられる。そこには景觀構成の雜多の事相が、計り知られない層をなして疊まれ、同時に各自の力に準じての動向をたどつてゐる。其の諸層の動向を、妖雲を排する神業のやうに、明快な一道の光明によつて照らし出してゐるのである。碎いて言へば、季感主題の花火を、あるかなきかの一添景として、暗に包まれた碇泊船の心もとないとも見える一光景に打たれてゐるのである。

俳句の自然への伸展性を示す、眞に劃期的の作である。

「花火せよ淀のお茶屋の夕月夜」も亦た季題を客體とする、同方向にある句である。「淀のお茶屋」は秀吉の寵姫淀君のお茶席のあつた、淀の城主稻葉長門守の所在地。淀の風光を主として其の感懷より「花火せよ」、花火でも揚げてはどうか、と其の感懷を內容づけてゐる。

俳句が逃避文學であるとか、厭世觀念に立脚するものであるとかいふ偏見は、こゝに至つてもう用をなさないであらう。

みのむしや秋ひだるしと鳴なめり

「みのむし」、蓑蟲は木の古葉などを、堅固な袋につくつて、其の中に栖む芋蟲の一種。

父戀しとはおれがみの蟲の聲　季吟
蓑蟲の音をきゝに來よ草の庵　芭蕉
蓑蟲の鳴くにつけても夜寒かな　乙由
蓑蟲の鳴いて枯木の風情かな　淵泉
蓑蟲の音さへもかるゝ嵐かな　如行
蓑蟲よ父もこひしと泣くものを　也有

「蚯蚓鳴く」といふ類で、別な俳人動物學が、蓑蟲を鳴くものに、昔から決定してゐる。どんな風に鳴くものか、「チ、ノ〳〵」と鳴くといふところから、季吟や也有の洒落が生れてゐるのであるが、それとは別に其の聲の內容を「秋ひだるし」、腹が減つた、と觀察したのは蕪村

一人である。滑稽にからかつたやうであつて、底には憐れみが流れてゐる。

如何にも蓑蟲らしい歎息——人間から見て、巢籠つてゐる退屈——を無造作らしく言つてのける、かういふ所にも、蕪村の特技が窺はれる。

蠹て下葉ゆかしきたばこ哉

畑に作られた煙草、何人もが不用意に見過ごす微細の形、色に氣を引かれてゐる。蟲に食はれて、ボツ〳〵穴でもあいてゐる、それを奥床しく、どこか氣品のある、蟲の食ひかたに別な趣があると、ぢつと見入らねばならなかつたのである。

煙草は、葉の柔かな幅廣いもので、下葉ほど大きく、高さ四五尺にもなれば、整然とした圓錐形狀に立つ。さうして、順序も正しく、下葉から幾分黃に枯色を帶びて來る。之を反別にしても、株の數と高さを算盤ではぢいて、何枚葉が出來る、とキチンと精算されるほど、總てに規律正しい草である。「ゆかし」といふ心持に同感される所以でもある。

一本の煙草を見た場合とするより、其の畑を見た時の心持とした方が、却つて自然であるやうである。